

Title	インド言語哲学資料・語彙コーパスの作成とそれを用いたの思想史研究
Author(s)	赤松, 明彦
Citation	(2005)
Issue Date	2005-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/85128
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

インド言語哲学資料・語彙コーパスの作成と
それを用いての思想史研究

(課題番号：14510025)

平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書



平成 17 年 3 月

研究代表者 赤松 明彦
(京都大学大学院・文学研究科・教授)

インド言語哲学資料・語彙コーパスの作成と

それを用いての思想史研究

(課題番号：14510025)

平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書

平成 17 年 3 月

研究代表者 赤松 明彦
(京都大学大学院・文学研究科・教授)

本研究は、インド古典期から中世までの「言語哲学」に関連する諸テキストの語彙分析を通じて、思想史的方法によって、インドにおける言語哲学の展開過程の全体を明らかにすることを目的としたものである。この作業の準備段階として、インド言語哲学の代表的著作であるバルトリハリの『ヴァーキヤ・パディーヤ』の第1章と第2章について、その主詩節、彼の自註（『ヴリッティ』）、およびプンヤラーダの注釈のテキスト・データベースを作成し、マークアップ作業を行って、言語哲学と認識論・論理学に関連する要素的な語彙の定義集を作成することを試みた。同時に、ニヤーヤ学派の諸文献についても、言語論、言語哲学に関連するテキストのデータベース化と、語彙の抽出を行った。ニヤーヤ学派のテキストについては、古典的なテキストのほかに、新ニヤーヤ学派に属するジャガディーシャの『シャブダ・シャクティ・プラカーシカー』についても、「言語哲学」に関連する議論を展開するテキストを蒐集し、その思考法や概念の把握を試みたところである。

本報告書では、こうした作業を通じて得られた語彙研究の成果と思想史的研究の成果を、公表することとした。

研 究 組 織

研究代表者 : 赤 松 明 彦 (京都大学大学院・文学研究科・教授)

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 14 年度	1,200	0	1,200
平成 15 年度	1,300	0	1,300
平成 16 年度	1,200	0	1,200
総計	3,700	0	3,700

研 究 発 表

- (1) 学会誌等 (AKAMATSU, Akihiko. *Anumāna in Bhartṛhari's Vākyapadīya. Papers of the 12th World Sanskrit Conference*. Vol.10.2. 2005.
- (2) 学会誌等 (AKAMATSU, Akihiko. Bhartṛhari, On Meaning and Form. *ACTA ASIATICA* 90. forthcoming.)
- (3) 口頭発表 (AKAMATSU, Akihiko. The Epistemic Structure of *Anumāna* in Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. 第 12 回国際サンスクリット学会。2003 年 7 月 14 日、ヘルシンキ。)

目次

1. 語彙研究 (1) tarka と anumāna 5
2. 語彙研究 (2) バルトリハリにおける anumāna 27
3. 成果発表 (1) 第 12 回国際サンスクリット学会
における発表要旨 45
4. 語彙研究 (3) vākyārtha (文の意味) 51
5. 成果発表 (2) 意味とかたちー『ヴァーキヤ・パディーヤ』
第 2 章詩節 325 - 347 の研究ー 67

1. 語彙研究 (1) tarka と anumāna

[目次]

1. tarka の用例
 - 1.1 問題の所在
 - 1.2 いくつかの仮説
 - 1.3 Nyāyaśāstra:
 - 1.3.1 NS1.1.1
 - 1.3.1.1 NBh 4.15
 - 1.3.1.2 NV 18.1
 - 1.3.1.3 NVT 61.18
 - 1.3.1.4 NVT 62.5
 - 1.3.1.5 NVT 62.9
 - 1.3.1.6 NVT 62.15
 - 1.3.1.7 NVTTP 142.10
 - 1.3.1.8 NVTTP 142.16
 - 1.3.1.9 NVTTP 142.24
 - 1.3.2 NS 1.1.40
 - 1.3.2.1 NBh 581.16
 - 1.3.2.2 NV 583.21
 - 1.3.2.3 NV 583.24
 - 1.3.2.4 NV 583.26
 - 1.3.2.5 NV 584.1
 - 1.3.2.6 NV 584.9
 - 1.3.2.7 NV 584.16
2. anumāna の用例
 - 2.1 Nyāyaśāstra
 - 2.1.1 NBh 182.7 ad NS 1.1.3
 - 2.1.1.1 NBh 291.10
 - 2.1.1.2 NBh 292.8
 - 2.1.2 NV 292.18
 - 2.1.3 NV 293.15
 - 2.1.4 anumāna の諸定義
 - 2.1.4.1 NV 300.1
 - 2.1.4.2 NV 300.25
 - 2.1.4.3 NV 301.1
 - 2.1.4.4 NV 302.8
 - 2.1.4.5 NV 302.17
 - 2.2 Mīmāṃsā 学派
 - 2.2.1 ŚBh 30.18
 - 2.3 Vaiśeṣika 学派
 - 2.3.1 Vaiśeṣika 学派における anumāna の定義
 - 2.3.2 VS 9.18
 - 2.3.3 VS 2.1.8-10
 - 2.3.4 VS 2.1.15-17
 - 2.3.5 VS 3.2.6-7
 - 2.3.6 NBh 292.1
 - 2.3.7 Randle p.154: プラシヤスタパーダの推理論の評価。
 - 2.3.8 PBh 476.1
 - 2.3.9 PBh 491.1
 - 2.3.10 ŚBh 30.18
 - 2.3.11 PBh 503.1
 - 2.4 Vākyapadiya における anumāna の定義
3. 推理 (認識の一部) と論証 (言語表現) の区別
 - 3.1 PBh 509.3
 - 3.1.1 NKand 512:
 - 3.1.2 Randle's statement
4. 部分と全体: 知覚か推理か
 - 4.1 Nyāyaśāstra
 - 4.1.1 NBh (ND) 462.3
 - 4.1.2 NV 465.15 ad NS 2.1.31
 - 4.1.3 NV 466.2 ad NBh
 - 4.1.4 NV 467.15
5. 結論

1. tarka の用例

1.1 問題の所在

問題のテキスト:VPVṛ 10.3--5:yaḥ sarvaparikalpānām ābhāse 'py anavasthitaḥ / tarkāgamānumānena bahudhā parikalpitaḥ //(ka) 「われわれ人間が、ありとあらゆる想像を働かして[それを]思い描こうとも、そこにおいて捉えられたことには決してならないものであり、思量(タルカ)や伝承(アーガマ)や推論(アヌマーナ)によって、多種多様に想像されるものであり、」(この詩節そのものは、ヴリッティ中に含まれているものである。また、中村・リントナーによって言及されるものである。)

これに対するパッドhatiは、次のように言う。Paddhati 10.20: līṅgam antareṇa svayam utprekṣāpratibhānam tarkaḥ / parataḥ śravaṇam āgamam, parapratiṭṭisādhanaṁ līṅgato 'numānam / 「タルカとは、論理的な根拠なしに自分で信じ込むような想念のひらめきであり、アーガマとは他人から聞いて知ることであり、アヌマーナとは、論理的な根拠に基づいて他者を理解させる手段である」。

つまり、この解釈は、dvandva としてこの複合語を解釈するものであるが、果たしてそれでよいのか?他にどのような解釈が可能か?問題は、このタルカとアーガマとアヌマーナの三つ組みが、何を意味するかである。(1)初期の段階において、これらの三種が、何らかの認識の根拠として並列される文献はあるか?(2)Vākyapadīya において、三者の関係はどのようなものとして捉えられているか? tarka と āgama の関係と、tarka と anumāna の関係と、āgama と anumāna の関係を明確にすること。(3)「tarka を根拠とする anumāna と、āgama を根拠とする anumāna」といった複合語の解釈は可能か?このような問題を設定した上で、ここでは、tarka と anumāna の二つの語彙について検討する。

1.1.1 アプテの辞書に見る tarka の用例

p.764:

動詞 tark

(1) to suppose, guess, believe, infer;

(2) to reason, speculate about, reflect. dṛṣṭvā tatsaukaram rūpaṁ tarkayāmāsa citradhā 「彼のブタのような姿を見て、その人は(or わたしは)様々な思いをめぐらしました。」-- Bhāg. 3.13.20.

(3) to consider or regard as (with thw acc.)

(4) to think of.

名詞 tarka

(1) supposition guess;

(2) reasoning, speculation, abstract reasoning; kutaḥ punar asmīn avadhārite

āgamārthe tarkanimittasyāpekṣasyāvakāśaḥ; idānīm tarkanimittākṣepaḥ parihriyate -- ŚBh

「しかしこの既に確定されているアーガマの対象に対して、タルカをきっかけとする想念・考察の働く余地が一体どこにあるのか。それで今や、タルカをきっかけとする想念・考察は排除されるのである。」

(3) doubt;

(4) logic;

(5) 論理、帰謬法。

この用例のうち、動詞の(2)tarkayāmāsa の用法に注目すべし。この語法での用例が以下に見るように叙事詩文献にしばしば見られる。第 10 類の動詞だからこの過去形が出るのは当然。また、名詞の(2)の ŚBh の記述に注目すべし。

1.1.2 参照例 : *Mahābhārata* と *Rāmāyana*

Mahābhārata:

0011600251/ sa hi tām tarkayām āsa rūpato nṛpatih śriyam /
0011600253/ punah samtarkayām āsa raver bhraṣṭām iva prabhām //
0011600283/ rūpam na sadrśam tasyās tarkayām āsa kimcana //
0011600311/ evam sa tarkayām āsa rūpa draviṇa sampadā /
0011620071/ kṣut pipāsā pariśrāntam tarkayām āsa tam nṛpam /
0030540121/ sā cintayantī buddhyā atha tarkayām āsa bhāminī /
0030600353/ durdharṣām tarkayām āsa dīptām agni śikhām iva //
0030650083/ tarkayām āsa bhaimī iti kāraṇair upapādayan //
0020120263/ pāṇḍavas tarkayām āsa karmabhir deva sammitaiḥ //

Rāmāyana

5 8 49cd/ tarkayām āsa sītā iti rūpa yauvana sampadā /
5 13 25cd/ tarkayām āsa sītā iti kāraṇair upapādibhiḥ //
5 13 38cd/ tarkayām āsa sītā iti kāraṇair upapādayan //

1.1.3 参照例 *Śabarabhāṣya*

kutaḥ punar asminn avadhārite āgamārthe tarkanimittasyāpekṣasyāvakāśaḥ; idānim tarkanimittākṣepaḥ parihriyate -- ŚBh 「しかしこの既に確定されているアーガマの対象に対して、タルカをきっかけとする想念・考察の働く余地が一体どこにあるのか。それで今や、タルカをきっかけとする想念・考察は排除されるのである。」

少なくともこの用例からわかること：アーガマとタルカが対比的に言及されている。また、tarkanimitasyāpekṣasya といわれることから考えて、タルカは、何らかの思考（概念的・論理的・妄想的）の発動原因になるようなものとして捉えられているのではないか。

1.2 いくつかの仮説

1.2.1 仮説 1 :

tarka は、現実の目前にある対象についての直接的な認識ではなく、間接的な認識であるという点で、pratyakṣa の直接性に対立する。tarka は、認識者の自律的な、つまり自分勝手な、一人よがりな、独創的な -- svayam --認識（想念、妄想）であるという点で、他から伝えられるものである -- āgama --伝承に対立する。tarka は、間接的な認識である点では、anumāna と共通するが、後者が、何らかの根拠を基にして、その正当性ゆえに他者に対する理解をもたらすことを志向するのに対して、前者 tarka は、認識者の思考の内部にとどまる点で、anumāna と対立する。

1.2.2 仮説 2 :

認識のプロセスとしては、(1)pratyakṣa ⇒ (2)tarka ⇒ (3)anumāna である。

1.2.3 仮説 3 :

可能な定義の展開としては、(1)--(2)--(3)のプロセスが、認識者内部に起こるものであるとすれば、(2)tarka は、その曖昧性ゆえに、正しい認識からは排除される一方で、(3)anumāna は、認識者自身の思考の内部にあるもの (→svārthānumāna)と、他者を理解させるための論証 (→parārthānumāna)へと分化する。あるいは、(3)anumāna が定義的に、論理的根拠・理由に基づいて他者を理解させるための論証(parārthānumāna)であるとされるならば、(2)tarka は、その真・偽は問うことなしに、認識者内部に起こる自律的な論理的・概念的認識を指すものとなる。つまり tarka = svārthānumāna + vikalpa (mithyā)。

1.2.4 仮説 4 :

直接性の系列 : āgama / pratyakṣa。

間接性の系列 : tarka / anumāna。

自律性の系列 : pratyakṣa / tarka。

他律性の系列 : āgama / anumāna。

ただし、anumāna に「正しい認識」という性質を付加すれば、tarka は、「正しい・正しくない」のいずれをも含む思考一般の段階にある。→「正しい anumāna」はあっても、「正しい tarka」はない。

1.2.5 仮説 5 :

仏教認識論における、pratyakṣa と anumāna の二分法は、もともとの pratyakṣa と tarka の対立を受け継ぐものであって、それほど独創的なものではない。

1.2.6 仮説 6 :

「見る」・「聞く」と「考える」の対立。

1.3 Nyāyaśāstra:

ニヤーヤ学派における tarka の定義を検討して、上の仮説が論証可能かどうかを見てみる。

1.3.1 NS1.1.1

pramāṇa.prameya.saṃśaya.prayojana.drṣṭānta.siddhāntāvayava.tarka.nirṇaya.vāda.jalpa.vitaṇḍā.hetvābhāsa.chala.jāti.nigrahassthānānām tattvajñānān niḥśreyasādhigamaḥ.

1.3.1.1 NBh 4.15

tarko na pramāṇasaṃgrhīto, na pramāṇāntaram, pramāṇānām anugrāhakaḥ tattvajñānāya kalpate / tasya udāharaṇam, kim idaṃ janma kṛtakena hetunā nirvartyate, āhosvid akṛtakenāthākasmikam iti ? evaṃ avijñātātattve 'rthe kāraṇopapattyā ūhaḥ (=NS 1.1.40) pravartate -- yadi kṛtakena hetunā nirvartyate, hetūchedād upapanno 'yam janmocchedaḥ / .../ etasmiṃs tarkaviśaye karmanimittam janmeti pramāṇāni pravartamānāni tarkaṇānugrhyante / tattvajñānaviśayasya ca vibhāgāt tattvajñānāya kalpate tarka iti / so 'yam itthambhūtas tarkaḥ pramāṇasahito vāde sādhanāya upālambhāya cārthasya bhavatyīva evamarthaṃ prthag ucyate prameyāntarbhūto 'pīti /

この論述からわかることは、(1)タルカは、プラマーナを補助するものであって、結果的に真理(事実)の認識を生み出すものとなる；(2)「ある事柄が判明していない際に、理由が成り立つかどうかをためす熟考がおこる」(服部訳)そのような熟考のことである。

ただしこれは NS 1.1.40 に対応するものであるから、やはり「その真実が[Aとも non-Aとも]知られていない対象について」と読むべきであろう；(3) タルカの対象に対して働くプラマーナは、タルカによって補助される；(4) 真実の認識の対象を分析するものであるから、「タルカ」は、結果的に真理の認識を生み出すのである。

ここに見る「タルカ」は、上記の仮説 4 に関わると言える。

1.3.1.2 NV 18.1

tarko na *pramāṇasaṃgrhīto* na *pramāṇāntaram* (=NBh), *aparicchedakatvāt* / *pramāṇam* *paricchedakam*, na *tarkaḥ* / *tasmān* na *pramāṇam* / na *pramāṇāntaram* *apy* *ata eva* / *pramāṇaviśayavibhāgāt* (=NBh *tattvajñānaviśayasya vibhāgāt*) *tu* *pramāṇānām* *anugrāhakaḥ* (=NBh), *yaḥ* *pramāṇānām* *viśayas taṃ vibhajate* / *kaḥ punar vibhagaḥ* ? *yuktāyuktavicāraḥ*, *idaṃ yuktam idam ayuktam iti* / *yat tatra yuktam bhavati tad anujānāti*, na *tv avadhārayati* / *anavadhāraṇān* na *pramāṇam* *bhavati* /

「認容し」ても「確定しない」からタルカはプラマーナではない。

1.3.1.3 NVTT 61.18

bhāṣyam *anubhāṣya* *hetum āhāparicchedakatvāt* (=NV) *anīścāyakatvāt* / ... / *idaṃ yuktam idam ayuktam iti* (=NV) / *itikāreṇa yuktāyuktaviśayaṃ tarkajñānam parāmṛśati* / *tad anena tarkasya svarūpaṃ darśitam* / *tasya vyāpāram āha* -- *yat tatra yuktam bhavati* (=NV), *saṃbhavati tad anujānāti na tv avadhārayati tarkaḥ* / *etad uktam bhavati*, *pramāṇam tattvāvadhāraṇāya pravṛttam karaṇatayā itikartavyatām apekṣate* / *tarkaś ca* *pramāṇaviśayayuktāyuktavicārātmā* *pramāṇam yukte tattve pravartamānam anujānan* *pramāṇam anugrhnāti* / *tadanugrhitam pramāṇam tattvanirṇayāya paryāptam* / na *ca* *pramāṇaviśaye cet tarkaḥ pravartate kṛtam asya pramāṇānujñayā*, *nanv ayam eva nīścāyakaḥ kasmān na bhavatīti sāmpratam*, *tasya prasaṅgatayā pāratantryeṇa svayam asādhanaṭvāt* /

タルカの認識は、正しい・正しくないを対象とするものであること。「プラマーナの対象についてそれが正しいか正しくないかを考究することを本性とするタルカは、正しい真実に対して働きかけているプラマーナを認容して、そのプラマーナを補助する。それに補助されたプラマーナが、真実の決定へと到達する。そしてもしタルカが、プラマーナの対象に働きかけないのであれば、タルカがプラマーナの認容のために役に立つことはない。[反論:]これがどうして確定的な認識(=プラマー)ではないのか？[答論:]タルカは、プラサンガであって他者依存的なものであるからであり、それ自身では論証手段ではないからである」。

ここではすでに、タルカはプラサンガと同一視されている。タルカをプラサンガとするのは、タルカの説明において、「Aか non-Aかの考察」から「もしAでないならば・・・」という風に思考が展開することが例示されることが専らであったからであろう。それはすでに NBh の注釈中に見られる。

tarka という語は、「帰謬法」を、論理的な結果として指示することになるのであって、etymological に「意味する」のではない。以下の NVTT の論述は、*anupalabdhi* の問題とも関連して興味深い。

1.3.1.4 NVT 62.5

asti hi prasaṅgo, na prasaṅgo hetuḥ (← criticism to Dharmakīrti ?)/ tathā hi pratyakṣam eva tāvad bhūtaḥ pravartamānaḥ tadviśeṣaṇatayā ghaṭābhāve 'pi pravartamānaḥ yady atrābhaviṣyad ghaṭo bhūtaḥ ivādrakṣyat, tena saha tulyadarśanayogyatvāt / na ca dr̥śyate / tasmān nāstīti *tārkeṇa* nujñāyamānaḥ ghaṭābhāvaviśiṣṭe bhūtaḥ pravartate kevalam evedaḥ bhūtaḥ neha ghaṭa itī /

「実にタルカは、プラサンガ（帰謬法）である。しかしプラサンガは、[仏教論理学派が主張するように、]論理的理由ではない。すなわち、先ずはじめに直接知覚だけが地面に対して働いているときに、それ（地面）の限定要素であるから、壺の非存在に対してもまた[その直接知覚は]働いているのであるが、その時に「もしここに壺があるならば、地面と同様に見られであろう。それ（地面）とともに等しく見られる可能性があるのだから。しかし[壺は]見られない。それゆえ[壺は]存在しない」というタルカによって、[その直接知覚は]補助されつつ、壺の非存在によって限定されている地面に対して働くのである。「これは地面だけであって、ここには壺はない」と。

ここでタルカによって補助されるプラマーナは、直接知覚(pratyakṣa)であることに注意。仏教論理学派における dr̥śyānupalabdhi の理論の史的展開の中に、この Vācaspatimiśra の論述を位置づけてみる必要がある。同様に、ニヤーヤ学派における tarka の位置づけについても再考する必要がある。

1.3.1.5 NVT 62.9

evam svargakāmo yajeta iti śabdo 'pi pravartamānaḥ paramāptasya bhagavata īśvarasya niyogo nāsvargaphalāyām yāgabhāvanāyām avakalpata itī samānapadenopātto 'pi duḥkhatayā dhātvarthaḥ sādhyā itī na yuktaḥ / bhinnapadopātto 'pi puruṣaviśeṣaṇam api svarga eva bhāvanāphalaḥ yukta itī *tārkeṇa* nujñāyamānaḥ pravartate / na ca yady abhaviṣyad ghaṭa itī vā yady abhaviṣyad dhātvarthaḥ sādhyā itī vā kriyātipattir asti, yad āśrayaṇiṣṭaprasaṅgenāyuktatvam itarathā tu yuktatvam, tat *tārkeṇa* niściyate / tasmān na pramāṇam / niścayāya tu pravṛttaḥ pramāṇam tadviśayaavivecanenānugrhaṇan itikartavyatātvenopayujyate /

同様に「天国に生まれたいと思うなら供犠をしなければならない」（＝「ファミコンが欲しかったら勉強しなさい」。wollen と sollen. 欲求と義務。意志と命令。ミーマーンサー学派の議論に見られる「倫理観」の問題。Halbfass が論じている議論の射程。彼の著書の再読。当然それは、「アートマン論」についての考察の深化につながる。）というシャブダ（ヴェーダの言葉、教令。文脈からして、ミーマーンサー学派がプラマーナのひとつとして認めるもの）もまたタルカによって助けられつつ働くのである。この場合のタルカの内容は：「最も信頼できる者でありバガヴァットであるイーシュヴァラの命令（ニヨーガ）が、天国を果報としないような供犠の実行に対して有効に働くことはない。したがって[yaj という]一つの単語[動詞と同じ語?]によって言及されるものであっても、困難であることによって(?) (duḥkhatayā)、[「供犠」という]動詞語根の意味が達成されるべき事柄であるというのは適当でない。複合語(bhinnapada)[動詞とは別の語?]によって言及されているものであっても、人間の限定要素であっても、天国こそが、実行の果報であることが適当である」である。そして、「もし壺が存在するならば」とか、「もし達成されるべき事柄としての動詞語根の意味が存在するならば」とかといった条件法(kriyātipatti)が[タルカで]あるのではない。[そうではなくて、]望ましくない論拠が帰結されることによって適当でないことがあり、その反対であることによって適当なのであるというこのことが、タルカによって決定されるのである。それゆえ[タ

ルカは]プラマーナではない。一方、決定のために働くプラマーナは、その対象の識別によって補助されつつ、itikartavyatā として使用されるのである。」

ここの議論はよく理解できない。この議論の背景にあるものが、ミーマーンサーの方にあるはず。またここでの用語 itikartavyatā の語義がここだけでは不明。しかしプラマーナの問題を考える上で重要な概念であるはず。

「ファミコンが欲しかったら勉強なさい」における達成目標(sādhya)は、あくまで<ファミコン>であって、<勉強>ではない。」

1.3.1.6 NVTT 62.15

yathoktam -- mīmāṃsāsamjñākas tarkaḥ sarvavedasamudbhavaḥ / so 'to vedorūmāprāptakāṣṭhādilavaṇātmavat // pūjītavīcāravacano hi mīmāṃsāsābdah / ayuktapratīṣedhena yuktābhyānujñānaṃ tarkaḥ / pramāṇetikartavyatātvena ca pramāṇādvedād bhedā uktaḥ / so 'to veda itī āṅgāṅīnoḥ abhedavivakṣayā / itikartavyatātvam cāsyasākṣād darśitam / dharme pramīyamāṇe hi vedena karaṇātmanā / itikartavyatābhāgaṃ mīmāṃsā pūrayīṣyatīti sarvam avadātam /

「mīmāṃsā と呼ばれる tarka は、すべてのヴェーダを根源とするものである。それゆえそれ（タルカ）は、ヴェーダである。ちょうど、ルマー湖に流れてきた木片などがその本質を変えて塩になるように[、ヴェーダから生まれたものは、すべてヴェーダとなるのである]。実に、mīmāṃsā という語は、尊ぶべき思考を言い表わすものである。タルカは、正しくないことを否定することによって正しいことを認容することである。

ここに出る二つの詩節の出典は何か？ lokanyāya の一つとして、rumākṣiptakāṣṭhanyāyaḥ 'The illustration of wood thrown into the salt-lake [or mine], Rumā. 'を Apte (70) は挙げている。そして次のように言う： Rumā is 'viśiṣṭalavaṇākara' [medinīkoṣa] and situated near Ajmere. この rumā の喩については、正信公章「<ルマーの塩>の比喩にみる<従心所欲不越踰矩>」（『阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集、アジアの歴史と文化』平成9年(1997)4月、汲古書院、pp.519--28)を参照すること。この正信論文による限り、ここに引用される詩節は、その意味するところから考えてクマーリラのものではあり得ない。しかし、再度 Tantravārttika を調査する必要はあるだろう。

1.3.1.7 NVTTP 142.10

tad evam abhāvaviṣaye pratyakṣe 'pi tarkaṃ darśayatā anupalabdhiṅgakānumānasya sādhyo 'bhāva itī saugatamatam apāstam / anupalabdher api niṣedharūpatayā anumānāntarasādhyatāyām anavasthānāt, asiddhāyās cāgamakatvāt, pratyakṣatas tatsiddhau tv anumānānavakāśāt, vyavahārasyāpi vikalpānugatavyāpārāt, pratyakṣata eva siddhatvāt / anyathā vidhivyavahārārtham apy upalabdhiṅgakam anumānam āstheyam / evaṃ ca punar apy anavasthāiva / na hi liṅgam apy avyavahriyamānam evānumitīm bhāvayet / tasmād vidhivyavahāravan niṣedhavyavahāro 'pi pratyakṣasiddha eva / vipratipannaṃ prati tu parīkṣakais tarkaḥ sahāyatvenopaneya itī ramaṇīyam /

仏教がたてる anumāna としての anupalabdhi を否定して、否定の決定は pratyakṣa に基づくことと、そこで tarka が働くことを明瞭に主張することによって、ヴァーチャスパティの論述を一層明確にしている。

1.3.1.8 NVTTP 142.16

āgamasahāyaṃ *tarkam* āha -- evaṃ svargeti(=NVTTP) / yajetety atra samānapadopātadvād bhāvyatvāc ca dhātvarthaḥ sādhyo bhavatu, bhavatu vā puruṣārthatvāt svarga iti saṃśaye *tarkasyāvatāraḥ* / yadi sādhyo dhātvarthaḥ syāt, tadopadeṣṭur āptatvaṃ vidheś ceṣṭopāyatvaṃ vākyasya tadabhidhāyakatvaṃ prekṣāvatāṃ ca pravṛttir na syāt / asti caitat sarvaṃ pramāṇataḥ siddham ity arthaḥ / anujñāyamānaṃ pramāṇam āha -- samānapadeti(=NVTTP) / na hi yāgabhāvanāyāḥ svargaphalatve dhātvarthasyātatphalatve samānapadopāttatvabhāvyatvayoḥ kaścid virodhaḥ / tasmāt tadvirodhena svargaphalatvaṃ yuktam / dhātvarthasya ca sādhyatvaṃ viruddhatayā ayuktam ity arthaḥ //

1.3.1.9 NVTTP 142.24

nanu pramāṇānugrahāya yuktatvāyuktatve vivecayati *tarko* na tu niścinoṭīti kuto viśeṣād ity atāha -- na ceti (=NVTTP) / kriyātipattir iti (=NVTTP), kriyātipattiḥ pratyayopasthāpīte ghaṭasattvadhātvarthasādhyatve eva kriyātipattiśabdēna vivakṣite, na hy evaṃbhūtapratyayāviśayo ghaṭo vā sādhyatayā dhātvartho vāstīty arthaḥ / kim ato yady evaṃ ity atāha -- yadāśrayeti (=NVTTP) / yasminn āśraye tulyopalambhayogyatvena duḥkhatvena vā anīṣṭaprasaṃjakena hetunā upapannas *tarko* yuktāyuktaviśayaniścayasādhanaṃ bhaviṣyati sa eva nāstīty arthaḥ / tad anena prasajyamānasyāśrayāsiddhisādhanaśiddhī darśite, pūrvam tu svarūpāsiddhir darśitā / tasmād āropatvān na svaviśaye pramāṇam svaviśayavyāpyaviparyaye niyāmakābhāvāc ca / niyatasambaddhasvaviśaye viparyayāpekṣitve tu pāratantryāt na pramāṇam ity arthaḥ / tarhi kvāsyopayoga ity atāha -- niścayāya tv iti (=NVTTP) //

1.3.2 NS 1.1.40

avijñāta.tattve arthe kāraṇa.upapattitas tattva.jñānārtham ūhas *tarkaḥ*.

「吟味」とは、その真理がまだ知られていない対象について、真理を認識するために、理由の可能性という観点から熟考することである。（服部訳）

1.3.2.1 NBh 581.16

katham punar ayaṃ tattvajñānārtho na tattvajñānam eveti? anavadhāraṇāt / anujñānti ayaṃ ekataraṃ dharmam kāraṇopapattiyā, na tv avadhārayati na vyavasyati na niścinoṭi evaṃ evedam iti / katham tattvajñānārtha iti ? tattvajñānaviśayābhyanujñālakṣaṇād ūhād bhāvitāt prasannād anantaram pramāṇasāmarthyāt tattvajñānam utpadyata ity evaṃ tattvajñānārtha iti // so 'yaṃ tarkaḥ pramāṇāni pratisandadhānaḥ pramāṇābhyanujñānāt pramāṇasahito vāde 'padiṣṭa iti / 対象認識を確定する（「これはこれこれ」というように）ものではないから、タルカは真知そのものではなくて、真知のためのものなのである。

1.3.2.2 NV 583.21

ūhaḥ saṃśayanirṇayābhyāṃ na bhidyate iti kecit / ayaṃ kilohaḥ saṃśayo vā syāt nirṇayo vā ? yadi saṃśayas tadā tena smgrhita iti pṛthak na paṭhitavyaḥ / atha nirṇayaḥ, tadā tena saṃgrhita iti //

1.3.2.3 NV 583.24

apare tu anumānaṃ *tarka* ity āhuḥ / hetus tarko nyāyo 'nvikṣā ity anumānam ākhyāyate iti //

1.3.2.4 NV 583.26

apare tv anumānam eva *tarkaṃ* yuktyapekṣaṃ varṇayanti //

1.3.2.5 NV 584.1

yat tāvan nirṇayasamśayābhyāṃ na ūhaḥ bhidyate iti / tan na pratyayasvarūpānavabodhāt / avijñātatattve 'rthe bhavatīti sāmānyenākṣipto bhavān / satyam avijñātatattve bhavatīti, na punaḥ pratyayasvarūpaṃ vyajñāyi bhavatā / anavadhāraṇātmakāḥ pratyayaḥ samśayaḥ kiṃ svid iti / avadhāraṇātmakāḥ pratyaya evam idam iti nirṇayaḥ / ayam tu samśayāt pracyutaḥ kāraṇopapattisāmarthyāt / na samśaye kāraṇopapattir asti / nirṇayaṃ cāprāpto viśeṣādarśanāt / viśeṣadarśanāt nirṇayo bhavati / na cāsmiṃ viśeṣadarśanam asti / etenānumānaṃ *tarka* ity etad api pratyuktaṃ viśeṣadarśanād iti / kiṃ punar asya svarūpaṃ ? bhaved ity eṣa pratyaya ity etad asya svarūpaṃ //

「～でありうるだろう」（「～であるにちがいない」）というこのような観念がこれ（タルカ）の本質である。」

1.3.2.6 NV 584.9

yair apy anumānaṃ yuktyapekṣaṃ *tarka* ity ucyate, tair apy anumānāt *tarka*bhedaḥ svayam evoktaḥ / yuktiḥ pramāṇopapattiḥ / tām apekṣyamāṇo yaḥ pratyayaḥ sa *tarka* iti kevalaṃ samjñābhedaḥ / atha na pramāṇopapattir yuktiḥ, anumānaṃ yuktyapekṣaṃ ity apekṣāsāmarthyam vaktavyam / svaviśayādhigame cānumānaṃ kim apekṣate ? athetarapramāṇāpekṣā yuktir ity ucyate ? evam apy anugrahārtho vaktavyaḥ / katham pratyakṣāgamābhyāṃ anumānaṃ anugrhyate iti ? aṭhānumānasya pratyakṣāgamaikaviśayatvam ? tatrāpi kaḥ *tarkaḥ* ? trīṇy etāni pramāṇāny ekaviśayatayā pratisamhitānīti bhavet, avadhāraṇāpratyayau bhinnanimittau viśeṣavattvāt pratyakṣānumānapratyayavat //

ユクティ(yukti)とタルカとアヌマーナの問題。ここで数えられているブラマーナは、三種類で、プラティアクシャとアーガマとアヌマーナであることに注意。

1.3.2.7 NV 584.16

anumānaṃ *tarkaḥ* līṅgalingisaṃbandhasmṛtyapekṣatvāt anumānavad iti / na *tarkas*varūpānavabodhāt / naiva līṅgalingisaṃbandhasmṛtyapekṣas *tarkaḥ* / katham iti ? dvayasyānadhigateḥ / yatra khalu dvayam adhigamyate dharmī sādhnadharmas ca, tatrānumānaṃ pravartate / yatra punar dharmimātrādhigatiḥ, na līṅgādhigatir asti sa *tarkaviśayaḥ* / tasmāt līṅgalingisaṃbandhasmṛtyapekṣatvam ayuktaṃ / anumānaṃ ca dharmigatadharmopalabdhyā pravartate, na punas *tarkaḥ* / tarkas tv anyagatadharmadarśanenāpi pravartate, yathā bhavitavyam anena puruṣeṇa, yathā asmin deśe aśvā vāhyante iti aśvavāhanaṃ na na puruṣadharmāḥ / so 'yam anyagatadharmopapattyā sthānuvyavacchedamātram ūha iti / so 'yam *tarkaḥ* pramāṇāni samdhatta iti pramāṇasahito vāde 'padiṣṭaḥ, na punar ayam pramāṇam aparicchedakatvād iti //

アヌマーナとタルカの区別。「あるものについて、ダルミンだけの認識があつて、リンガの認識がないならば、それがタルカの対象である。」アヌマーナの場合は、ダルミンとヘートウの両方が認識されている。つまり、タルカの場合には、論理的必然関係の成立の認識がない。

2. anumāna の用例

2.1 Nyāyaśāstra

2.1.1 NBh 182.7 ad NS 1.1.3

mitena liṅgena liṅgino 'rthasya paścān mānam anumānam /

「推理（は次のように性格づけられる）。－（知覚によって）知られた徴表によって、徴表をもっている（知覚されていない）対象を、後に知るのが推理である。」
（服部訳）

2.1.1.1 NBh 291.10

atha tatpūrvakam trividham anumānam pūrvavaccheṣavatsāmānyatodrṣṭam ca
/(NS 1.1.5) tatpūrvakam ity anena liṅgaliṅginoḥ sambandhadarśanam / liṅgadarśanam
cābhisambadhyate / liṅgaliṅginoḥ sambaddhayor darśanena liṅgasmṛtir abhisambadhyate
/ smṛtyā liṅgadarśanena cāpratyakṣo 'rtho 'numiyate //

「それを前提とする」というこ（の語）によって、（推理が、）徴表と徴表をもつものとの結合関係の（過去における）知覚と、（現在における）徴表の知覚（にもとづくということ）が意味されている。結合関係にある徴表と徴表をもつものとの（過去における）知覚ということによって、徴表に関する（過去の知覚の）想起（が現在あること）が意味される。（徴表に関するこの）想起と、（現在における）徴表の知覚とによって、知覚されていない対象が推理されるのである。」（服部訳）

1.1.1.2 NBh 292.8

sadviṣayaṃ ca pratyakṣam sadasadviṣayaṃ cānumānam / kasmāt ?
traikālyagrahaṇāt -- trikālayuktā arthā anumānena gṛhyate / bhaviṣyatīty anumiyate,
bhavatīti cābhūd iti cāsac cakhalv atītam anāgatam ceti //

プラティアクシャは現在存在しているものを対象とする。それに対して、アヌマーナは、現に存在しているものと存在していないもの（＝過去のもの、未来のもの）の両方を対象とする。

2.1.2 NV 292.18

liṅgaliṅgisambandhadarśanam ādyam pratyakṣam, liṅgadarśanam ca dvitīyam /
bubhutsāvato dvitīyāt liṅgadarśanāt saṃskārābhivyaktyanantarakālam smṛtiḥ,
smṛtyanantaram ca punar liṅgadarśanam ayaṃ dhūma iti / tad idam antimaṃ pratyakṣam
pūrvābhyāṃ pratyakṣābhyāṃ smṛtyā cānugṛhyamāṇam liṅgaparāmarśarūpam anumānam
bhavati //

2.1.3 NV 293.15

liṅgaliṅgisambandhasmṛtir liṅgadarśanam veti sandehaḥ / eke tāvad varṇayanti
liṅgaliṅgisambandhasmṛtir anumānam itarair liṅgisambandhadarśanādibhir anugṛhyamāṇā
/ apare punar manyante liṅgaparāmarśo 'numānam itarair anugṛhyamāṇa iti / vyaṃ tu
paśyāmaḥ, sarvaṃ anumānam, anumites tan nāntariyakatvāt / ... / yasmāt liṅgaparāmarśāt
anantaram śeṣārthapratipattir iti, tasmāt liṅgaparāmarśo nyāyā ita / ... / tasmāt

smṛtyanugrhyamāṇo liṅgaparāmarśo 'bhīṣṭārthapratipādako bhavatīti / evaṃ copanayasyārthavattā / yadi cāyaṃ smṛtyānugrhitō liṅgaparāmarśo 'numānaṃ bhavati, evaṃ sati upanayo 'rthavān iti / evaṃ ca sati vākyāṅgatvam upanayasyoktaṃ bhavati / tasmād vyavasthitam etat tatpūrvakam anumānam iti //

ウッディョータカラ：「想起に補助されたリンガの反省がアヌマーナである」。

2.1.4 anumāna の諸定義

2.1.4.1 NV 300.1

apare tu bruvate nāntariyakārthadarśanam tadvido 'numānam iti / asyārthaḥ, yo 'rtho yaṃ artham antareṇa na bhavati, sa bhavati nāntariyakaḥ / /

アヌマーナの他の定義 1. nāntariyakārthadarśanam.

2.1.4.2 NV 300.25

etena tādṛg avinābhāvi dharmopadarśanam hetur iti pratyuktam /

アヌマーナの他の定義 2.

2.1.4.3 NV 301.1

apare tu manyante, anumāne 'tha tattulye sadbhāvo nāstitāsatiṭy anumānam / etena cānumeyaikadeśavṛttir api saṃgrhīta ity alakṣaṇam / yathā anityāḥ paramāṇavo gandhavattvād ghaṭavad iti /

アヌマーナの他の定義 3. ディグナーガの定義に対する批判。

2.1.4.4 NV 302.8

etena saṃbandhād ekasmāt pratyakṣāt śeṣasiddhir anumānam iti lakṣaṇam pratyuktam / katham iti ? na hy ekasmāt pratyakṣād anumānam bhavati / athāpi saṃbandhād ekasmāt pratyakṣāt iti ? etad api naiva, na hy ayam tadā saṃbandhaṃ paśyati yadānumimīte iti / tathāpy upalabdhasaṃbandhasya pūrvānumānakāle cānupalabdhalīṅgasyānumānam prasajyeta /

アヌマーナの他の定義 4.

2.1.4.5 NV 302.17

etena saptavidhaḥ saṃbandha iti pratyuktam / na hi kāryakāraṇabhāvādīnām saṃbandhānām rūpasparśayor anyatamaḥ saṃbhavati / tasmāt na rūpeṇa sparśānumānam yuktam / ato 'vyāpakatvād alakṣaṇam iti niṣṭhitam anumānam //

アヌマーナの他の定義 5.

2.2 Mīmāṃsā 学派

2.2.1 ZBh 30.18

anumānam jñātasambandhasya ekadeśadarśanād ekadeśāntare 'samnikṛṣṭe 'rthe buddhiḥ. tat tu dvividham pratyakṣatodṛṣṭasambandham sāmānyatodṛṣṭasambandham ca. tatra pratyakṣatodṛṣṭasambandham yathā dhūmākṛtīdarśanād agnyākṛtīvijñānam. sāmānyatodṛṣṭasambandham ca yathā devadattasya gatipūrvikām deśāntaraprāptim upalabhyāditye 'pi gatismaraṇam. śāstram śabdavijñānād asaṃnikṛṣṭe 'rthe vijñānam.

2.3 Vaiśeṣika 学派

Randle: Indian Logic in the Early Schools:

Randle p.148: The doctrine of the Nyāya Sūtra probably represents a later phase of logical development than that of the Vaiśeṣika-sūtra and it stands for a different way of thinking, really, although the early syncretism of the two schools has obscured the initial difference in standpoint. the Vaiśeṣika-sūtras is interested in the inferential process as such, whereas the Nyāya is interested in demonstration; the Vaiśeṣika therefore did not formulate a syllogism, which is essentially the form of argument rather than of inference; and he did not think of inference as an appeal to examples, but based it directly on the real relations of things. the Naiyāyika, on the other hand, was from first to last a tārīkī disputant, and therefore thought in terms of argument; with the result that he attached exaggerated importance to examples, as the instrument for confuting an adversary. had indian logic developed on the basis of the Vaiśeṣika-sūtra it would have been a very different thing in all probability: and perhaps it would have given a truer account of the essential nature of inference.

「ヴァイシェシカ学派の推理論は、具体例を要求するものではなく、直接に事物の実際的な関係の上に築かれていた。これに対して、ニヤーヤ学派は、あくまで論証中心で、過剰なまでに具体例にこだわったものであった。もしインド論理学がヴァイシェシカ・スートラの基礎の上に発展していたならば、それは多分まったく異なったものになっていたであろう。そしておそらくそれは推理の本質をより正しく説明するものであっただろう。」

ランドルによるニヤーヤ学派とヴァイシェシカ学派の推理論の傾向の違いの指摘。これまで見逃していたが、これはかなり重要な指摘である。われわれは（わたしは）、これまで、インド論理学を考える場合、あまりに形式的な面、つまり「因の三相」とか、「論理的必然性」とかの面からばかり、考えすぎてきたのではない。より本質的な定義から、もう一度考える必要がある。

2.3.1 Vaiśeṣika 学派における anumāna の定義

Randle p.147: Inference is there defined as *laiṅgikam jñānam*, 'knowledge from a mark or sign'. This inferential mark -- middle term -- is of two kinds; *drṣṭam liṅgam* on the one hand; and *adrṣṭam* or *sāmānyato drṣṭam liṅgam* on the other hand.

2.3.2 VS 9.18

asya idaṃ kāryam kāraṇam sambandhi ekārtha-samavāyī virodhi ca iti laiṅgikam. --- Candrānanda p.69: ... tatra 'evamvidhaprasiddhasambandhasyārthaikadeśam asandigdham paśyataḥ śeṣānuvyavasāyo yaḥ sa liṅgadarśanāt sañjāyamāno laiṅgikam' iti vṛttikārah /

この注釈中の Vṛttikāra は一体誰か？

Cf. VS IX.ii.1: asyedaṃ kāryam kāraṇam saṃyogi virodhi samavāyi ceti laiṅgikam. -- Randle pp.148-9: "Knowledge through an inferential mark is where this is (a) effect of, (b) cause of, (c) conjoined with, (d) opposed to, (e) resident in, that".

Randle p.149: But there are clearly recognised two different kinds of the inference based on these real relations, according as the 'mark' is 'seen' or 'unseen' (the latter case is commonly described as 'seen from likeness'). These two types of inference (dṛṣṭāliṅgāṇāṃ adṛṣṭāliṅga or sāmānyato dṛṣṭāliṅga) are referred to in numerous sūtras (e.g. II.i.8, 10, 15, 16; III.ii.6,7): and the principal examples of the application of the latter type of inference are the arguments proving the existence of a soul as the substrate of the psychical qualities and the existence of wind as the substrate of hot-cold touch. These are two of the nine substances (dravya) which the system recognises. they are both imperceptible, although their qualities are perceptible: and therefore their existence has to be established by an inference. But plainly it will not be an inference of the ordinary kind which established the imperceptible: and hence the necessity of admitting a special type of inference for the purpose.

2.3.3 VS 2.1.8-10

VS 2.1.8: viṣāṇi kakudmān prānte-vāla-dhiḥ sāsna-vān iti gotve dṛṣṭam liṅgam.

VS 2.1.9: sparśaḥ ca.

VS 2.1.10: na ca dṛṣṭānām sparśa iti adṛṣṭa-liṅgaḥ vāyuh.

--- Candrānanda p.12: yadi khalv ayam kṣityādisparśo 'bhaviṣyad gandharasarūpaiḥ sahopalabhemahi, na caivam, tasmāt pṛthivyādivyatiriktasya vāyor liṅgam /

このチャンドラアーナンダの注釈はやはり気になる。anupalabdhi の説が出てきた背景には、ヴァイシエーシカのこの種の議論があったことを考慮しなければならないのではないか。

2.3.4 VS 2.1.15-17

VS 2.1.15: vāyuh iti sati sannikarṣe pratyakṣābhāvāt dṛṣṭam na vidyate.

--- Candrānanda p.13: yathā 'ayam gauḥ' iti goś cakṣuṣā sannikarṣe sati praytakṣeṇa viṣāṇādīni tad yogi tayā dṛṣṭāni kadācil liṅgam, naivam tvacā vāyoḥ sannikarṣe sati ayam vāyur iti pratyakṣeṇa tadgunatayā sparśa upalabdho yenānupalabhyamānam kadācid vāyuh anumāpayet / kṣityādisparśavidharmatvād asya sparśasya nirāśrayasya cābhāvād vāyur āśraya iti cet,

VS 2.1.16: sāmānyato dṛṣṭāt cāviśeṣaḥ.

--- Candrānanda p.13: ākāśādīnām api paroḥṣatvāt tatpratīṣedhena vāyor evāyam sparśa ity ayam viśeṣa etasmāt sāmānyato dṛṣṭān nāvagamya / vibhūnām sparśavattve bhāvānām pratighāta iti cet, evam tarhi vāyor evāyam bhavat prasiddhasya sparśo na daśam asya dravyasyeti katham jñāyate ?

VS 2.1.17: tasmāt āgamikam.

--- Candrānanda p.13: tasmād vāyur astīti vākyam āgamikaṃ pravādamātram ity arthaḥ /

2.3.5 VS 3.2.6-7

VS 3.2.6: yajñadatta iti sati sannikarṣe pratyakṣābhāvāt dṛṣṭam liṅgam na vidyate.

VS 3.2.7: sāmānyataḥ dṛṣṭāt cāviśeṣaḥ.

VS 3.2.8: tasmāt āgamikam.

Randle p.150: The point of the example is that the movement of the heavenly bodies is a thing beyond direct experience. But the original application of this type of inference is to something which transcends experience in a completer sense than this: and the Sāṃkhya Kārikā (verses 5 & 6) is nearer to the original doctrine when it says sāmānyatas tu dṛṣṭād atīndriyānām pratītir anumānāt 'knowledge of things beyond the senses comes from sāmānyato-dṛṣṭa inference'. Gauḍapāda is giving the right illustration when he says that the existence of prakṛti and puruṣa is thus inferred.

Randle p.150: The distinction then was originally a very real and important one. The Vaiśeṣika-sūtra notes as a peculiarity of the sāmānyato-dṛṣṭa type that it does not lead to a definite or specific conclusion - sāmānyato dṛṣṭāc cāviśeṣaḥ - and this is perhaps the reason for the name given to it, partly. From psychical qualities you can infer the existence of a substrate: and you can adduce scriptural authority for saying that the 'soul' is this substrate: but the inference in itself tells you nothing as to the precise nature of this substrate, which, as thus inferred, remains quite indeterminate.

2.3.6 NBh 292.1

sāmānyato dṛṣṭam nāma --- yatrāpratyakṣe liṅgaliṅginoh sambandhe kenacid arthena liṅgasya sāmānyād apratyakṣo liṅgī gamyate, yatheccchādibhir ātmā. icchādayo guṇāḥ, guṇāś ca dravyasaṃsthānāḥ. tad yad eṣāṃ sthānam, sātmeti.

--- Randle p.151: 'The sāmānyato dṛṣṭa inference is where, the relation between the Mark and the Subject not being perceived, an unperceived Subject is inferred from the likeness of the Mark to something: as the Soul is inferred through desire and the like. Desire and the like are qualities; and qualities are grounded in substances. That which is the ground of these qualities of desire and the like, is the Soul'.

--- Randle's Note 2: But sāmānyāt should perhaps be translated 'from the Mark's community of nature with something else'. For desire, etc., are not merely like qualities. They are qualities. Yet they are qualities of so unique a kind that, to use Praśastapāda's enlightening phrase, we may say there is atyantajātibheda, complete difference of kind, between them and those physical qualities on the relation of which to (physical) substance the inference is grounded.

2.3.6.1 三種の推理

Nyāya-Sūtra は、上の二種の推理に代えて「三種の推理」(pūrvavat, śeṣavat, sāmānyato dṛṣṭa)を立てる。この三種についての解釈は、既にヴァーツヤーヤナの段階で、曖昧なものとなっていたと思われる。しかし、可能な解釈としては、――つまり、スートラカーラは、ヴァイシェシカ・スートラの推理論に対してなにを新たに付け加えたかったのかという観点から考えるならば、―― sāmānyato dṛṣṭam は、Vaiśeṣikasūtra のものそのものとすれば、dṛṣṭa-liṅga を pūrvavat と śeṣavat に区別したと考えることができるだろう。さらに、pūrvavat についての Vātsyāyana の説明の一つ :NBh p.291.14--: atha vā pūrvavad iti --- yatra yathāpūrvam pratyakṣābhūṭayor anyataradarśanenānyatarasyāpratyakṣasyānumānam, yathā dhūmenāgnir iti /

--- Randle p.153: ``Pūrvavat inference is where, of two perceptible objects such as have been before experienced, the sight of one leads to the inference of the other which is not perceived; as fire is inferred through smoke''.

これを、pūrvavat の本来の意味と認めるならば、pūrvavat は dr̥ṣṭa-liṅga に当たることになる。--- That is to say, pūrvavat inference comprises normal inferences of every kind (dr̥ṣṭa-liṅga); setting aside eliminative inferences which the sūtra-kāra has found it necessary to treat as a class apart, thereby innovating on the Vaiśeṣika-sūtra, which either had not noted these or had not regarded them as embodying any distinct principle. For all practical purposes the śeṣavat form is disregarded by the Naiyāyika himself.

Randle p.153, note 1: NBh 291.16--: sāmānyatodr̥ṣṭam -- vrajyāpūrvakam anyatra dr̥ṣṭasyānyatra darśanam iti, tathā cādityasya, tasmāt asty apratyakṣāpy ādityasya vrajyeti //

この説明は、Śabara や Praśastapāda のものに一致する。ヴァイシェーシカ・ストラからの発展形体を示すものと考えてよい。VS と これらとの考え方の違いは、前者が、未知の小前提 -- apratyakṣe liṅgaliṅginoh sambandhe --に関わる推理であるのに対して、後者はまったく新しい大前提に対する推理であるということである。この点については、別に Nenninger(1994) の論文を参照すること。

2.3.6.2 NBh における「三種の推理」の説明のまとめ。

- (1)pūrvavat -- a. yatra kāraṇena kāryam anumīyate;
b. yatra yathāpūrvam pratyakṣabhūtayor anyataradarśanenānyatarasyāpratyakṣasyānumānam yathā dhūmenāgnir iti ;
- (2)śeṣavat -- a. yatra kāryeṇa kāraṇam anumīyate;
b. pariśeṣaḥ ;
- (3)sāmānyatodr̥ṣṭam -- a. 「移動」の推理 ;
b. 「アトマン」の存在証明。

2.3.7 Randle p.154: プラシャスタパーダの推理論の評価。

He supplements the Vaiśeṣika notion of the liṅga and of the real relations which provide the basis of inference, by taking over the Naiyāyika notion of probativeness; and he attempts to make this notion more definite by conceiving all inference to rest on avinābhāva, or inseparable connection of characters. And in the light of this doctrine of inseparable connection he fixes the formula for a 'major premise', which really usurps the function of the Naiyāyika's udāharaṇa or statement of probativeness derived from likeness to examples.

プラシャスタパーダは、ニヤーヤ学派の「確実性」(probativeness)の教説によって、ヴァイシェーシカ学派のリンガと推理の基盤を提供する真の関係についての教説を補強した。そして彼は、すべての推理は avinābhāva すなわち諸特徴の不可分な関係に基づくと考えることによって、この avinābhāva の観念をより確実なものとしようとしている。そして、この不可分関係を考慮することによって、彼は、ニヤーヤ学派が認めている喩例―すなわち具体例との類似性から引き出される「確実性」を述べる命題―の働きを、実際的には無効にする、「大前提」(major premise)のための定式を確定するのである。

2.3.8 PBh 476.1

liṅgadarśanāt sañjāyamānaṃ laiṅgikam /

「リングの認識に基づいて、正しく生じてくる認識が、推理（リングに基づいて生じてくる認識）である。」

NKand 476.12--: darśanaśabda upalabdhi vacano, na cākṣuṣapratītivacanah, anumitānumānasyāpi sambhavāt / liṅgadarśanāl liṅgaviśayaḥ saṃskāro jāyate kintv asya na parigrahaḥ, buddhyadhikāreṇa viśeṣitatvāt / saṃśabdena samyagarthavācīnā saṃśayaviparyayaśmṛtīnā vyudāsaḥ / liṅgasya darśanāj jñānāt samyag jāyamānaṃ laiṅgikam iti vākyaṛthaḥ /

2.3.9 PBh 491.1

vidhis tu yatra dhūmas tatrāgnir agnyabhāve dhūmo 'pi na bhavatīty evaṃ prasiddhasamayasyāsandigdhadhūmadarśanāt sāhacaryānusmaraṇāt tadanantaram agnyadhyavasāyo bhavatīti /

---Randle p.154: 'The formula (vidhi) is 'Where there is smoke, there there is fire: and in the absence of fire smoke also does not occur'. In the case of a person who knows the connection in this way (prasiddhasamayasya), the conviction of fire arises, as the result of an undoubted experience of smoke and as the result of remembering the accompaniment of smoke by fire (sāhacaryānusmaraṇāt)'.

NKand 491: 'evaṃ prasiddhasamayasya' prasiddhāvinābhāvasya puruṣasya..../

NKand 492: ko 'yam avinābhāvo nāmāvyabhicāraḥ / sa kasmād bhavati ? tādātmyatadutpattibhyām iti saugatāḥ /... [ニヤーヤ・カンダリーは、以下仏教論理学説への言及・批判を行う。]

Praśastapāda の anumāna の定義: (1)liṅgadarśana と、(2)sāhacaryānusamarāṇa の二つの要素からなる。また、Śrīdhara によって、(1)liṅgadarśana と、(2)vyāptismaraṇa とされている。(NKand 491: liṅgadarśanavyāptismaraṇābhyām evānumeyapratītyupapatteḥ.)さらに、Śrīdhara によれば、これは、ウッディヨータカラが認めた、'liṅgaparāmarśa'を不必要なものすることになる。

Dignāga の定義: Randle p.155: Dignāga's definition, as quoted by Uddyotakara is nāntariyakārthadarśanaṃ tadvido 'numānam, --'experience of a thing as inseparably connected is the instrument of inference, for a person who knows this inseparable connection'.

Stcherbatsky は、プラシャスタパーダの定義を、このディグナーガの定義の形を変えた盗用したが、シャバラの定義との類似性を見るとそれは言えないであろう。そうではなくて、'jñātasambandhasya', 'tadvidah', 'prasiddhasamayasya'というように、「推理を可能とする二項の関係に、推理を行おうとする者は気付いていなければならないという条件を、推理の定義のうちに挿入するのは、当時の論理学にとって共通の事柄であったと思われる。」(Randle p.155: It seems to have been common to the logic of the time to insert into the definition of the instrument of inference a proviso that the person drawing the inference should be aware of the relation between the terms which makes the inference possible.)

2.3.10 ŚBh 30.18

anumānam jñātasambandhasya ekadeśadarśanād ekadeśāntare 'saṃnikṛṣṭe 'rthe buddhiḥ.

2.3.11 PBh 503.1

evam sarvatradeśakālāvinābhūtam itarasya liṅgam / śāstre ca kāryādigrahaṇam nidarśanārtham kṛtam nāvadhāraṇārtham, kasmāt ? vyatirekadarśanāt / tadyathā adhvaryuṣṭi śrāvayan vyavahitasya hetur liṅgam, candrodayaḥ samudravṛddheḥ kumudavikāsasya ca śaradi jalaprasādo 'gastyodayasyeti / evamādi tat sarvam asyedam iti sambandhamātravacanāt siddham /

---Randle p.156: 'Thus the Mark is something inseparably connected with something else in every time and place. the mention of the causal relation and other relations as grounds of inference in the Vaiśeṣika Sūtra (IX.ii.1) is by way of illustration and is not meant as an exhaustive statement of the grounds of inference: for we find other relations besides those mentioned (used as grounds of inference). Thus when we hear the officiating priest repeating the sacrificial formula we infer the presence of a sacrificing priest, who is concealed from view: the rising of the moon is the inferential Mark from which we infer the rise of the sea and the blooming of the lotus: and calm waters in the autumn are the Mark of the rising of the star Canopus. All such cases are comprehended in the words 'asyedam', this is related to that', of sūtra IX.ii.1, for these words refer to relation in general (not to this or that particular type of relation such as causality or identity)--- asyedam kāryam kāraṇam saṃyogi virodhi samavāyi ceti *laiṅgikam*.('Inferential knowledge arises where 'this is related to that' --- as effect, cause, conjoined, opposite, constitutive or inherentm, etc.)'.

Randle's note 1 of p.157: Praśastapāda's illustrations are not all favourable to his point, for it is easy to read the causal relation into some of them. Later logic manuals give the illustration of inferring colour or form from taste -- presumably as when tasting a fruit in the dark. TB comm. p.38 -- tādātmyatadutpattibhyām evāvinābhāva iti saugatamatam. tan na. rasādīnā rūpādyanumānasya sakalajanāsiddhatvāt. na hy anayoḥ kāryakāraṇabhāvo na vā tādātmyam iti.

暗闇の中で、味に基づいてその果実の色や形を推理する場合についての言及。

dr̥ṣṭam anumānam: 牛以外のものには喉の垂れ肉はないという経験から、別の場所で垂れ肉だけを見ることからその動物が牛であると推理する場合。(PBh:507.1--509.3:) tat tu dvividham --- dr̥ṣṭam sāmānyatodr̥ṣṭam ca / tatra dr̥ṣṭam prasiddhasādhyayor atyantajātyabhede *anumānam* / yathā gavy eva sāsnaṃ mātram upalabhya deśāntare'api sāsnaṃ mātradarśanād gavi pratipattiḥ /

---Randle's note 3 of p.158: The cow-hood which is to be proved (sādhyā) is precisely similar to the cow-hood as experienced in the cows which constitute the example or sapakṣa (prasiddha). As Śrīdhara puts it: gotvajātivīṣṭāyām eva govyaktau sāsnaṃ palabdhya sampraty api gotvajātivīṣṭāyām eva govyakter anumānam. (NK p.212 l.7). -- The example is that given of the dr̥ṣṭa liṅga in VS II.i.8 (VS 2.1.8: viṣṇāṇi kakudmān prānte-vāla-dhiḥ sāsna-vān iti gotve dr̥ṣṭam liṅgam.).

2.4 Vākyapadiya における anumāna の定義

(88.5-89.1: iha'avyabhicāritābhimata.sāhacaryasya dr̥ṣṭasya sambandhinah tat.sadr̥ṣasya vā darśanād adr̥ṣṭe sambandhini yaj.jñānam utpadyate tena'apratyakṣasya'arthasya prasiddhir

duravasānā / tathā hi / avasthā. antareṣu viniścita. bala. sattvādinām punar avasthā. antareṣu puruṣa. gamyeṣv apuruṣa. gamyeṣu vā dṛśyante svabhāvā vyabhicāriṇaḥ / bāhyānām api bija. oṣadhi. prabhṛtinām avasthā. bhedād upalabhyate śakti. vyabhicāraḥ / tathā deśa. bhedād api / atīṣṭaḥ haimavatīnām apām sparśaḥ / sa tu balāhakāgnikuṇḍādiṣu tad. rūpānām eva[^] atyuṣṇa upalabhyate /)

この世界で〔両者の〕随伴関係が決して逸脱しないことが認められている (avyabharitābhimata. sāhacarya) とき、その一方の現に知覚されている〔特定の〕関係項 (sambandhin) あるいはそれとの共通性をもつもの (tat. sadṛśa) を直接見ることに (darśana) に基づいて、〔そこでは〕知覚されていないもう一方の関係項について、ある認識が生じてくる。〔そのような認識が論理的判断であるが、〕そのような認識によって現に知覚されていない対象について確定するというのは、全く不確かなこと (duravasāna) である。すなわち、ある環境 (avasthā) においてある特定の能力や存在性などをもつもの (viniścita. bala. sattvādi) であっても、また別の環境においては、その環境が人間によって理解可能なもの (puruṣa. gamya) であっても、人間によって理解不可能なもの (apuruṣa. gamya) であっても、〔いずれにしても〕それらの本性 (svabhāva) が〔別の環境においてもっていたのとは〕同じものではないということ (vyabhicārin) は、現に知られていることである。現に外界に存在しているものについても、たとえば種子や薬草などは、〔それらが蒔かれ、あるいは育つ〕環境の区別に応じて、様々に異なった能力を示すこと (śakti. vyabhicāra) が見られるのである。同様のことは、場所の区別に応じても見られる。ヒマラヤの水には非常に冷たい感触があり、一方火山の火口 (balāhakāgnikuṇḍa) などにある水は、色は〔ヒマラヤのもの〕まさに同じであっても、非常に熱い感触があることが知覚される。

3. 推理（認識の一部）と論証（言語表現）の区別

3.1 PBh 509.3

tatra liṅgadarśanam pramāṇam pramītir agnījñānam / athavāgnījñānam eva pramāṇam pramītir agnau guṇadoṣamādhyasthyadarśanam ity etat svaniścītārtham anumānam /

3.1.1 NKand 512:

`etat svaniścītārtham anumānam' / niścitam iti bhāve niṣṭhā, svaniścītārtham svaniścayārtham etad anumānam ity arthaḥ /

--- Randle's note 1 of p.160: I have deliberately rendered svaniścītārtham in what seems to me a wrong way here, making it identical in meaning with svārtha. But it should probably be "inference in which the object or conclusion is established (inferred) by oneself".

3.1.2 Randle's statement

Randle p.160: The distinction between inference as a thought-process in one's own mind, and that process expressed in words for communication to others, is an obvious one, and is already contained in Vātsyāyana's distinction between anumāna on the one hand, and nyāya or sādhakavākya or pañcāvayavopapannavākya on the other hand. But in defining the avayavas, or Members of the vākya, the Sūtrakāra does not keep the two things distinct, his definitions being sometimes rather definitions of aspects of the inferential process (premises in 'inference for oneself'), than definitions of those propositions (verbal expressions of premises) which alone can form part of a vākya

probative statement.....It was inevitable that all schools should draw the distinction between inference in the mind and inference expressed in words, ---whether or not they admitted Testimony as a *pramāṇa* or instrument of valid cognition.

4. 部分と全体：知覚か推理か

4.1 Nyāyaśāstra

NS IIa 28(Ruben)=2.1.31

pratyakṣam anumānam ekadeśagrahaṇād upalabdheḥ.

「直接知覚は推理である。なぜなら人は一部分を認識してから、[全体を推理を通して]認識するのであるから。」(Ruben p.28: Die Wahrnehmung ist [in Wirklichkeit] Folgerung, denn man erkennt [ein Ganzes erst durch Folgerung], nachdem man einen Teil erfasst hat.)

4.1.1 NBh (ND) 462.3

yad idam indriyārthasannikarṣād utpadyate jñānam vṛkṣa iti, etat kila pratyakṣam, tat khalv *anumānam* eva / kasmāt ekadeśagrahaṇād vṛkṣasya upalabdheḥ / arvāgbhāgamayaṃ grhītvā vṛkṣam upalabhate / na ca ekadeśo vṛkṣaḥ / tatra yathā dhūmaṃ grhītvā vahnim *anuminoti* tādṛg eva tad bhavati / kiṃ punar grhyamāṇād ekadeśād arthāntaram anumeyaṃ manyase ? avayavasamūhapakṣe avayavāntarāṇi dravyāntarotpattipakṣe tāni cāvayavī ceti / avayavasamūhapakṣe tāvad ekadeśagrahaṇād vṛkṣabuddher abhāvaḥ, nāgrhyamāṇam ekadeśāntaram vṛkṣo grhyamāṇaikadeśavad iti / atha ekadeśagrahaṇād ekadeśāntarānumāne samudāyapratibandhānāt tatra vṛkṣabuddhiḥ ? na tarhi vṛkṣabuddhir *anumānam* evaṃ sati bhavītuṃ arhatīti / dravyāntarotpattipakṣe nāvayavy anumeyaḥ, asya ekadeśasambaddhasyāgrahaṇāt grahaṇe cāvīśeṣād anumeyatvābhāvaḥ / tasmād vṛkṣabuddhir *anumānam* na bhavati // ad NS 2.1.31//

「(対論者：) 感覚器官と対象との接触に基づいて生じてくる「木だ」というこの認識は、直接知覚だと言われているが、それは実際には推理（アヌマナ）に他ならない。どうしてか。一部分の認識に基づいて木の認識があるからである。こちら側の部分からなるものを認識した後で人は木を認識する。そして木は一部分ではない。その場合、ちょうど煙を認識した後で火を人は推理するように、まさに同じようにそれ（木の認識）あるのである。（立論者：）それでは君は、一体何が、認識されている一部分とは別の対象としての「推理されるべきもの（推理によって認識されるべきもの）」であると考えているのか？もし君が、[全体とは、]部分の集合体であると考えているならば(avayavasamūhapakṣa)、別の諸部分が「推理されるべきもの」である。また[部分と全体は]別の実体として生起してくるものであると考えているならば(dravyāntarotpattipakṣe)、それら（諸部分）と全体との両方が「推理されるべきもの」である。まず、全体は部分の集合体であると考え場合には、一部分の認識に基づいて木の認識があることはない。[なぜなら、]現に認識されていない別の一部分は、現に認識されている一部分が木[という全体]でないのと同じように、木でない[からである]。（対論者：）一部分の認識に基づいて別の一部分についての推理がある場合には、[それに]集合体を連合させること(samudāyapratibandhāna)に基づいて、そこに「木」の認識があるのではないか。（立論者：）実際、そうであっても、木の認識は推理知ではありえない。部分と全体は別の実体として生起してくる場合場合には、全体が「推理されるべきもの」であることはない。一部分と結び付けられているこのものは認識されないのであるか

ら。そしてたとえ認識されるとしても区別はないのであるから、[全体が]「推理されるべきもの」であることはない。それゆえ、木の認識が、推理知であることはないのである。」

←こちら側の部分(arvāgbhāga)を見て「木だ」と認識するのと、喉の垂れ肉を見て「牛だ」と認識する(VS における *dr̥ṣṭam anumānam* の代表例) のとは別の認識だと言えるか？

4.1.2 NV 465.15 ad NS 2.1.31

arvāgbhāgaparabhāgayoś ca dharmadharmibhāvānupapatter *nānumānam* -- yatra khalv *anumānam* bhavati tatra dharmiṇo dharmaprasiddhau dharmāntaraviṣayam anumānam, na punar arvāgbhāgasya parabhāgo dharmah, parabhāgasya cārāvāgbhāgaḥ, tataś ca nAnumānam /

このウッディヨータカラの記述からは、かれが、一つのダルミンにある二つのダルマのうち、一方が知られている場合に、他方を対象とする推理があると考えていたことがわかる。

4.1.3 NV 466.2 ad NBh

(pratisandhāna): yac cedam ucyate pratisandhānapratyayajā vṛkṣabuddhir iti, tad ayuktam; vṛkṣasyāsiddhatvenābhyupagamāt na pratisandhānam -- pratisandhānam nām pūrvaprātīyānurañjitaḥ pratyayaḥ piṇḍāntare bhavati / yathā rūpaṃ ca mayopalabdhām rasaś ceti / bhavatpakṣe punar arvāgbhāgaṃ gr̥hītvā parabhāgam anumāyārāvāgbhāgaparabhāgāv ity etāvān pratisandhānapratyayo yuktaḥ, vṛkṣabuddhiḥ tu kutah? na tāvad arvāgbhāgo vṛkṣo na parabhāga iti / arvāgbhāgaparabhāgayoś cāvṛkṣabhūtayor yā vṛkṣabuddhiḥ sā atasmimstad iti pratyayo *nānumānād* bhavitum arthatīti / pramāṇasya yathābhūtarthaparicchedakatvāt / yaś cāyam atasmimstad iti pratyayaḥ sa pradhānānukāreṇa bhavatīti vṛkṣabuddhiḥ pradhānam vaktavyam, na hy aghṛhitasāmānyasyānadhyaṛopitatadviparīṭadharmaḥ vā atasmimstad iti pratyayo bhavati, pradhānam ca nāsti vṛkṣasyānabhyupagamāt / tasmān *nānumānapratisandhānād* vṛkṣabuddhiḥ /

4.1.4 NV 467.15

NV 467.15--: kaḥ punaḥ sāmānyatodṛṣṭasya pratyakṣapūrvakānumānād viśeṣaḥ, yadi sarvaṃ pratyakṣapūrvakam evānumānam iti / ayam viśeṣaḥ --- pratyakṣapūrvakam trikaprasiddhau pravartate sādhyasādhanaadharmyupalabdhou --- yatrāyam sādhyam sādhanaṃ ca dharmiṇam ca pūrva gr̥hītvā punar dharmadharmidarśanena dharmāntaram anumimīte tat pratyakṣapūrvakam, yat punaḥ sādhanaadharmam dharmiṇam copalabhyāntaparokṣam dharmāntaram anumimīte tat sāmānyatodṛṣṭam iti / bhavatpakṣe tu na sāmānyatodṛṣṭād anumānād vṛkṣabuddhiḥ na pratyakṣapūrvakāt, dharmiṇo 'nabhyupagamāt pratyakṣapratīṣedhāc ceti //ad NS 2.1.31//

ウッディヨータカラによる sāmānyatodṛṣṭam anumānam の解釈を示す箇所。

「これは sādhyā、これは sādhana、これは dharmin」と以前に認識した後で、今度は、dharma と dharmin を認識(darśana)することによって、別の dharma が推理されるならば、それは、直接知覚を前提とする推理である (pratyakṣapūrvakam ← dr̥ṣṭam anumānam あるいは pratyakṣatodṛṣṭam anumānam の言い換えとしてここではこの語が使用されている)。しかしながら、sādhanaadharmā と dharmin とを認識した後

で、まったく知覚不可能な別の dharma が推理されるならば、それが sāmānyatodṛṣṭam anumānam である。」

別に見たように、まったく不可見のものを dharmin とする推理が sāmānyatodṛṣṭam anumānam の特徴だと明示したのは、プラシャスタパーダであった。ウッディヨータカラのここでの論述はプラシャスタパーダを反映する。

5. 結論

以上、 tarka と anumāna という二つの語彙に関して、主として初期の論書における用例の収集と検討を行った。推論を心理的なプロセスとしてとらえるにせよ、論証法としてとらえるにせよ、いずれにせよ anumāna の方が、より術語的に、言い換えるならば、論理の形式化への志向をともなった概念として使われるということができるであろう。

2. 語彙研究 (2) バルトリハリにおける anumāna

1. Vākyapadiya 第一章の本文詩節と Vṛtti における anumāna の用例

1.1 (10.3-6: yaH sarva.parikalpaanaam aabhaase^apy anavasthitaH / tarka.aagama.anumaanena bahudhaa parikalpitaH // vyatiitaH bheda.saMsargau bhaava.abhaavau krama.akramau / satya.anRte ca vizva.aatmaa pravivekaat prakaaazate //)

われわれ人間が、ありとあらゆる想像を働かして[それを]思い描こうとも、そこにおいて捉えられたことには決してならないものであり、思量(タルカ)や伝承(アーガマ)や推論(アヌマーナ)によって、多種多様に想像されるものである。

1.2 (43.7-9: upadezaM ca^antareNa saMskaaravati nirapabhraMze zabda.brahmaaNi labdha.pratiSThaanaaM ziSTaanaam anumaanam / ziSTa.jJaanaac ca pRSodara.prakaaraaNaaM ziSTa.prayogatvaat saadhutva.pratipaadane nimittaM vyaakaraNam / tathaa ca^uktam /)

しかし、[文法規則についての] 実際的な教示(upadeza)が存在しない場合には[どうしたらよいのかというならば]、完全無欠性をもち(saMskaaravat)逸脱をもたない(nirapabhraMza)コトバ＝ブラフマンの内に、確固とした基盤を得ている(labdha.pratiSThaa)シシュタたちについて、[かれらが存在するという] 推論(anumaana)がある。そして、例えば<pRSodara>という語形が[文法規則には述べられていないにも関わらず]シシュタたちによって実際に使用されているということからも解るとおり(ziSTa.prayogatvaat)、[このような]シシュタたちの[存在についての] 知識(ziSTa.jJaana)を根拠として、文法学は[言葉に] 正しさ(saadhutva)を与えるための動因(nimitta)となるのである。そして次のように言われている。

1.3 (43.10-11: zabda.artha.saMbandha.nimitta.tattvaM vaacya.avizeSe^api ca saadhu.asaadhuun / saadhu.prayoga.anumitaaMz ca ziSTaan na veda yaH vyaakaraNaM na veda //)

「語と意味の結合関係(zabda.artha.saMbandha)および[語の] 発効原因(zabda.pravRtti.nimitta)の[両方の] 本質(tattva)について、また表示対象(vaacya)が異ならなくても[語の使用法において] 正しい場合と正しくない場合があることについて、そしてシシュタたち[の存在]は文法的に正しい語形の語の使用に基づいて推理される(saadhu.prayoga.anumita)ことについて、文法学を知らない者は何も知らないのである」。

1.4 (57.1-2: tasyaas tu zabda.aakRter astitvaM zuka.zaarika.manuSya.aadi.prayukteSu vRkSa.aadi.zabda.vyakti.vizeSeSu sa eva^ayam iti pratyaya.abhedaad anumiiyate /)

しかしながら、そのような[/ジュモク/などの] 語の普遍的かたち(zabda.aakRti)が存在することは、オウムが言おうと、鳥が言おうと、人間が言おうと、たとえば

「ジュモク」という特定の語の個体的現れ(vRkSa.aadi.zabda.vyakti.vizeSa)が使用されたときに「生じてくる」「それはこれである」という観念に区別はないということに基づいて、推理されるのである。

1.5 (65.1-4: triSv apy eSu zlokeSu prastutasya parisamaaptiH / tatra^apoddhaara.pada.arthaH naama^atyanta.saMsRSTaH saMsargaad anumeyena parikalpitena ruupeNa prakRta.vivekaH sann apoddhriyate / praviviktasya hi tasya vastunaH vyavahaara.atiitaM ruupam / tat tu sva.pratyaya.anukaareNa yathaa.aagamaM bhaavanaa.abhyaasa.vazaad utprekSayaa praayeNa vyavasthaapyate /)

この三つの詩節全体で、本書で論じるべき主題が言い尽くされている。それらのうち、(1)「抽出による単語の意味」(apoddhaara.pada.artha)とは、[本来、文の意味として]完全にひとつに混じり合っていたもの(atyanta.saMsRSTa)を、人は、概念的な(anumeya)仮構されたかたちによって(parikalpitena ruupeNa)、相互連関から切り離しつつ(prakRta.vivekaH san)、抽出するということである。実に、そのような完全に切り離されたものの[仮構された]かたちは、日常的な言語表現を越えたもの(vyavahaara.atiita)である。しかしながらそれ(仮構されたかたち)を、人は、一般に、それぞれの伝統に従って、繰り返し学びそれに慣れることによって、自分自身の観念(sva.pratyaya)に似させることによって、類似を想定すること(utprekSaa)によって、確定するのである。

1.6 (72.1-3: tatra saadhor yaH saMbandhaH^arthena sa jJaane zaastra.puurvake vaa prayoge dharma.abhivyaktaav aGgatvaM pratipadyate / viziSTa.pratyaya.utpattau ca pratyakSa.pakSeNa vyavasthaaM prakalpayati / anumaana.pakSeNa tu saMbandhi.saMbandhaad akSi.nikoca.aadivad apabhraMzaaH pratyaya.vizeSeSv aGga.bhaavam upagacchanti /)

[次に、(7)「文法的に正しい語形の語の場合には、ダルマの発現と意味＝対象の理解に対して原因となる結合関係」ということを述べる。] その場合に、文法的に正しい語形の語(saadhu)の意味＝対象(artha)との結合関係(saMbandha)こそが、

[文法的に正しい語形の語についての]知識があるとき(jJaana)、あるいは文法学に基づく(zaastra.puurvaka)語の正しい使用(prayoga)があるときの、ダルマ(功德)の発現(dharma.abhivyakti)に対する原因(aGga)であることが理解される。そしてそのような[文法的に正しい語形の語の意味＝対象に対する]結合関係は、特定の観念の生起(理解)(viziSTa.pratyaya.utpatti)に対して、直接的に(pratyakSa.pakSeNa)、決定を作り出すのである(vyavasthaaM prakalpayati)。一方、[(8)「文法的に正しくない語形の語の場合には、意味＝対象についての理解に対してだけ原因となる結合関係」について言えば、]文法的に崩れた語形の語(apabhraMza)は、たとえば目を閉じるなどした場合の[対象認識の]ように(akSi.nikoca.aadivad)、間接的に(anumaana.pakSeNa)、[文法的に正しい語形の語を介在させた、意味＝対象との]間接的な結合関係に基づいて(saMbandhi.saMbandhaat)、特定の観念[の生起]に対する原因(aGga)となるのである。

1.7 (84.6-85.3:ko hi ziSTaH saMbhinna.buddhir api lokaM praty abhiniviSTaH durjJaanaM duradhyeyaM ca svara.saMskaara.aadi.niyamaM laukika.vaidikaanaaM zabdaanaaM prayojanaM vyavasthaapayitum utsaheta / na ca^anarthakaH niyamaH / kRtaH^api ziSTair aparair na parigRhyate / pramaaNaM vaa viduSaaM loke na syaad iti / tasmaad anaadir guru.puurva.krama.aagataa ziSTa.anumaana.hetur avyabhicaaraa lakSaNa.prapaJcaabhyaaM paryaayaiH zabdavatii ca^azabdaa ca smRtir nibadhyate //)

シシュタ [といわれる者] が、混乱した知性をもち(saMbhinna.buddhi)、世俗に執着した者であるならば、一体どうしてそのような者が、知ることが困難でまた学ぶことも困難な音韻や語形の完成などについての規則(svara.saMskaara.aadi.niyama)をもつ、日常的な語やヴェーダの語の使用を、確定することができるであろうか。そして、規則(niyama)は、目的なしに存在するものではない。たとえ [目的をもたない規則が、] シシュタたちによって作られたとしても、[それを] 他の者たちが受け入れることはない。あるいはまた世間で、そのようなものが知識人(vidus)たちの拠り所とされるべき規範(pramaaNa)となることもないだろう。それゆえに、はじまりのない [永遠な] ものであり、先行する偉大な師匠たちによってこれまで連綿と伝えられてき(guru.puurva.krama.aagata)、[確固とした知性をもち、世俗の欲望を離れた] シシュタの存在を間接的に知らせる原因であり(ziSTa.anumaana.hetu)、過失を導くことのない(avyabhicaara)、スムリティが編集されるのである。そしてこのスムリティには、様々な定義や解釈をともなって言葉によって示されているものもあれば、言葉によっては示されていないものもある。

1.8 (88.3-4:VPI 32(R,I,B):avasthaa.deza.kaalaanaaM bhedaad bhinnaasu zaktiSu / bhaavaanaam anumaanena prasiddhir atidurlabhaa //)

環境や場所や時間(avasthaa.deza.kaala)が異なっていることによって、[個々の事物のもつ] それぞれの能力は異なっているから、そのような個々の事物(bhaava)について、論理的判断(anumaana)によって確定することは極めて困難である。(詩節三二)

1.9 (89.2-89.6: tatra ruupa.saamaanyaad apahRta.buddhiH parokSa.vizeSaH durjJaanaM bhedaM arvaag.darzanaH darzana.maatreNa^aagamyaM aagamena^eva prapadyate / kaala.bhedaad api / griiSma.hemanta.aadiSu kuupa.jala.aadiinaam atyanta.bhinnaaH sparza.aadayaH dRzyante / tatra suukSmam avasthaana.vizeSaM praakRtam apraakRta.gamyam aagama.cakSur antareNa^apratyakSam anumaana.maatreNa^anizcitaM kaH saadhayitum asaMmuuDhaH prayatate //)

その場合、[つまり色が同じなのに感触が違う場合、] 色(見た目)が同じであるということによって判断力が奪われ、[それぞれの] 特殊性が見えない者は、[普通には] 知ることが困難なそのような区別を、後になって見るのである。つまり、単に目で見ることだけによって理解されえない区別を、他ならぬアーガマによって理解するのである。時間の区別に応じてまた同じことが言える。たとえば夏と冬では井戸の水は全く違った感触をもつことが知られている。その場合、自然の状態にある(praakRta)微細な状態の区別、— それは非自然的な(apraakRta) [アーガマなどの] ものによってしか理解されないものであり、アーガマという目(認識手段)がなけ

れれば、知覚されえず、推理判断だけでは〔その特性が〕決定されないものなのであるが一、そのようなものを愚か者でもない限り一体だれが〔アーガマに頼ることなく、推理判断などによって〕立証しようと試みるであろうか。〔アーガマに基づくことによって始めてそれは可能なのである。〕

1.10 (90.7-8: VPI 34(R,I,B): yatnena^{anumitaH}apy arthaH kuzalair anumaatRbhiH / abhiyuktatarair anyair anyathaa^{eva}upapaadyate //)

ある事柄(artha)が、推理能力に長じた者たちによって、努力して推理されたとしても、別のよりすぐれた専門家(abhiyuktatara)たちによって、全く別様に立証されることがある。(詩節三四)

1.11 (90.9-91.1: anyad dravyaM guNebhyaH, vyapadezaat / tad yathaa / sati vizeSaNa.vizeSyabhedhe raajJaa raaSTraM vizeSyate na parivraajakena / vizeSyate vaa candanena gandhaH na ruupaadibhiH / tasmaad anyad dravyaM guNebhya ity anumaanena dravye vyavasthaapite na^{ayam} apadezaH yukta ity aahuH /

〔次のような論証式がある。〕(主張命題) 実体(dravya)は諸属性(guNa)とは別個のものである。(理由命題) [実体を表す語(dravya.zabda)は属性を表す語(guNa.zabda)の] 限定的指示語(vyapadeza)であるから。(喩例命題) すなわち、[あるふたつのもの間に、存在レベルで] 限定者(vizeSaNa)―被限定者(vizeSyabhedhe)関係による区別があるならば、[たとえば王と王国の場合であれば、「王の王国」(raajJo raaSTram)と言われて、]「王」によって「王国」が限定的に指示される(vizeSyate=vyapadiSyate)。しかしながら、[同じように両者が別個のものであっても、]「遊行者」(parivraajaka)によって「王」が限定的に指示されることはない。[つまり遊行者と王国の間には限定者―被限定者の関係は成立せず、「遊行者」が「王国」の限定的指示語(vyapadeza)となること、言い替えれば「遊行者の王国」と表現されることはないのである。] また[それと同様に]、[「白檀の香り」(candanasya gandhaH)と言われるときには、]「白檀」(実体語)によって「香り」(属性語)が限定的に指示される。しかしながら、[「色などの香り」というように、]「色」などによって「香り」が限定的に指示されることはない。[つまり色(属性)などと香り(属性)の間には限定者―被限定者の関係は成立せず、「色」などが「香り」の限定的指示語となることはない。](結論命題) それゆえ実体は諸属性とは別個のものである。[つまり、「実体の属性」という表現が成立し、「実体」が「属性」の限定的指示語であることが成立するならば、それは実体と属性との間に限定者―被限定者関係があることを前提するから、両者は別個の存在であると結論できる。] 以上のように推論式によって実体が確定されるが、この場合の理由命題(apadeza)は適当でないとされる。

1.12 (91.5-92.5: apara aahuH / pada.samuuha.eka.deza.bhaave^{api} padam Rcaa vyapadizyate, na padena Rk / apara aaha / ekatva.abhyupagamena^{eva} candanena vyapadezaH gandha.aadiinaaM ruupa.aadibhir avyapadeza iti viruddhatvaad asiddham etat / zruti.vizeSa.saMnidhaana.asaMnidhaana.kRtas tu puurva.pakSa.upanyaasaH / tasmaad dRSTaad adRSTam anugamyate ity avirodhaat siddham etat / tathaa

paaka.aady.anumaana.arthaani kriyaa.vizeSeSu pratiniyataani aGgaani vipralambha-
arthaani api kaizeit kathaMcid upaadiiyante //)

[先の論証を批判して、] 別の者たちは言う。[「讃歌」(Rc)は、] 単語の集合体 (pada.samuuha)の一部に数えられるものであるけれども、「単語」(pada)が「讃歌」(Rc)によって[「讃歌の単語」というように] 限定的に指示される(vyapadizyate)ことはあっても、「単語」によって「讃歌」が限定的に指示されることはない、と。また別の者は言う。[白檀(実体)と香り(属性)の間の] 同一性(ekatva)を認めるからこそ、「白檀」による「香り」などの限定的指示(vyapadeza)があるのであり、「色」などによる限定的指示がないのである。[したがって、AによるBの限定的指示が存在することを論理的理由にすれば、AとBの同一性が立証されることになる。]そこで、[先の論証式における論理的理由は、その論証式が示す結論とは]逆の事実を立証するのであるから、それは不成立[な論理的理由]となるのである、と。しかしながら、最初の立論者の主張(puurva.pakSa.upanyaasa)は、特定の語の発話によって[聞き手の観念のうちに特定の意味対象が]現在化し、[それ以外の意味対象は]現在化しないということをもとにして構築されたもの(zruti.vizeSa.saMnidhaana.asaMnidhaana.kRta)である。それゆえ、知覚された[論理的理由](dRSTa)に基づいて、知覚されていない[対象]が論理的に理解されているのであり、その限りでは、矛盾することはないのであるから、それは成立するのである。また例えば、「料理していること」(paaka)などを推論によって知るために、特定の行為(kriyaa)において確定されている諸要素(原因)(aGga)は、[別の場合には、]人を欺くための諸要素としても、人によっては何らかの仕方を利用されることがあるのである。

1.13 (93.1-2: VPI 35(R, I, B): pareSaam asamaakhyeyam abhyaasaad eva jaayate /
maaNi.ruupya.aadi.vijJaanaM tad.vidaaM na^anumaanikam //)

専門家(tadvid)たちのもつ宝石や貨幣についての知識は、他者に対しては決して説明しえないものであって、習熟(abhyaasa)からしか生じてこないものであり、論理的判断推理によって知られるものではない。(詩節三五)

1.14 (93.7-8: VPI 36(R, I, B): pratyakSam anumaanaM ca vyatikramya vyavasthitaH /
pitR.rakSaH.pizaacaanaaM karmajaa eva siddhayaH //)

祖霊、羅刹、ピシャーチャのもつ超能力は、行為[の潜勢力]から生じてくるものであって、直接知覚をも論理的判断をも凌駕して確立している。(詩節三六)

1.15 (95.4-5: VPI 38(R, I, B): atiindriyaan asaMvedyaan pazyanti aarSeNa cakSuSaa / ye
bhaavaan vacanaM teSaaM na^anumaanena baadhyate //)

天的な眼によって、超感覚的な諸物、不可知の諸物を見る[ことができる]者たちの言葉(vacana)は、論理的判断(anumaana)によって、否定されることはない。(詩節三八)

1.16 (95.6-96.5: antaryaamiNam aNu.graamam abhijaati.nimitta.nibandhanam anabhivyaktaM zabda.brahma zakti.adhiSThaanaM devataaH karmaNaam anubandha.pariNaama.zakti.vaikalyaani suukSmam aativaahikaM zariiraM pRthag anyaaMz ca tiirtha.pravaadeSu prasiddhaan arthaan ruupa.aadi.vad indriyair agraahyaan sukha.aadivat pratyaaatmam asaMvedyaan ye ziSTaa vyaavahaarikaad anyena^eva cakSuSaa mukta.saMzayam upaalabhante / teSaam *anumaana*.viSayataa.atiitaM vacanaM vyabhicaaribhir *anumaana*ir apaakartum azakyam / jaatyandhaanaaM ruupa.grahaNam evam utpadyate iti saavasthaa na^eva^abhyupagata.puurvaa kadaacit, tasyaaM katham *anumaana*M pravartteta //)

あるシシュタたちは、内制者(*antaryaamin*=*aatman*)を、種々多様なものの誕生に対してそれを生み出す原因根拠となっている(*abhijaati.nimitta.nibandhana*)微細な原子の集まり(*aNugraama*)を、未顕現のシャブダ・ブラフマン(コトバ)を、諸能力の拠り所を、諸神格を、[浄・不浄の]行為によって作り出された結果[としての潜勢力]の[果報を生み出すための]開展や能力の欠如(*karmaNaam anubandha.pariNaama.zakti.vaikalyaani*)を、[次の生において新たな身体を得るまでの]媒体(*aativaahika*)である微細な身体を、さらにまた聖者たちの言説(*tiirtha.pravaada*)において個々別々に確立されている様々なことを、色やかたちのように[通常の]感覚器官によって認識されることのないものを、快感などのようには各個人において感受されることのないものを、日常的なものとは異なった全く別の眼によって何一つ疑いなく知覚する。通常の論理的判断によっては計り知れないことを内容とする(*anumaana.viSayataa.atiita*)、このようなシシュタたちの言葉を、誤った認識をもたらすことのある論理的判断によって、拒絶することはできない。生まれつき盲目の人たちが色・かたちを認識するということも、このようにして起きるのである。したがって、それ以前には決して理解されたことがないそのような状態に対して、いったいどうして論理的判断が有効に働きうるであろうか。

1.17 (97.9: tasmaat pratyakSam aarSaM ca jJaanaM saty api virodhe baadhakam *anumaanasya* //)

それゆえ、直接知覚(*pratyakSa*)と神的知識(*aarSaM jJaanam*)は、たとえ[論理的判断による知識と]矛盾することがあっても、その場合は、論理的判断[によって導かれた結論]を拒斥する認識となる。

1.18 (98.9-10: VPI 42(R, I, B): hasta.sparzaad iva^andhena visame pathi dhaavataa / *anumaana*.pradhaanena vinipaataH na durlabhaH //)

盲人がでこぼこ道を手探りで走ればきっと倒れるであろうことは容易に想像される。それと同じように、推理を第一の頼りにする人も、きっと倒れるであろうことは全く容易に理解できるのである。(詩節四二)

1.19 (98.11-99.3: yasya hi sthaalii.pulaaka.nyaayena^ekadezaM dRSTvaa ziSTe^arthe pratipattiH so^andha iva viSame giri.maarge cakSuS.mantaM netaaram antareNa tvarayaa paripatan kiMcid eva maarga.eka.dezaM hasta.sparzena^avagamya samatikraantas

tat.pratyayaad aparam api tathaa^eva pratipadyamaanaH yathaa vinaazaM labhate tadvad
aagama.cakSusaa vinaa tarka.anupaatii kevalena^anumaanena kvacid aahita.pratyayaH
dRSTa.adRSTa.phaleSu karmasv aagamam utkramya pravartamaanaH niyataM mahataa
pratyavaayena saMyujyate //)

ある人が、「鍋の中の一粒の米が炊けていたらすべての米が炊けている」という世
間に通用している道理に基づいて、一部分を見ることによって他の残りのものにつ
いて理解するならば、そのような人は盲人に等しいのである。でこぼこの山道を、
先導する眼の見える人の助けもなしに、急ぎ足で駆けているとき、道のどこか一部
分だけを手探りによって了解してうまく通過したので、そのことからさらにその先
も同じに違いないと理解するならば、おそらくその盲人はけがをしたり命を落とし
たりすることになろう。まったくそれと同じように、アーガマという眼なしに、論
理的判断だけに頼る人は、あるもの・ことについて、ただ論理的判断(anumaana)だ
けによって自分の考えを作り上げるが、そのような人は、可見の結果と不可見の結
果をもつ様々の行為についてのアーガマ [の教示を] 無視して行動するものである
から、必ず大きな罪過を背負い込むことになるのである。

1.20 (128.3-7: tad anena zloka.dvayena^upanyastam / jaataav api dvayii pratipattir
aacaaryaaNaam / kecid aahuH - pratiniyata.svaruupa.bhedaa vyaktayaH / na hy
asaMvedyam avyapadezyam avidyamaanaM vaa vyaktiinaaM svaruupam / vyaktir eva hi
gaur na^aakRtiH / guNa eva hi niilaH na hi guNa.saamaanyaM niilatvaM niilam iti /
aakRtes tv akRta.samavaayaanaam api sa eva^ayam iti buddhi.anuvRttau bhedavatsv
artheSu nimittatvam / etad dhi tasyaaH sattaayaam anumaanam /)

そのことが、上の二つの詩節によって言及されているのである。語の普遍的かたち
についても、二通りの理解が師たちの間にある。ある人たちは次のように言う。個々
の語の個体的現れ(vyakti)は、それぞれに固有のそれ自身のかたちをもっており区別
を有している。実際、個々の語の個体的現れのそれ自身のかたちは、知られえない
もの(asaMvedya)でもなければ、指示されえないもの(avyapadezya)でもなく、また存
在しないもの(avidyamaana)でもない。牛は、実に個物にほかならず、決して普遍
(aakRti)ではない。青は、属性(guNa)にほかならず、属性レベルの普遍
(guNa.saamaanya)である青性(niilatva)が青なのではない。一方、普遍は、たとえ内属
関係をもたないものであっても、区別をもつ諸対象に対して、「それこそがこれで
ある」(sa eva^ayam)という [同一判断の] 知識の付随的生起に対する発効原因
(nimitta)である。なぜなら、それこそが、それ(普遍)の存在についての推論知な
のであるから。

1.21 (198.3-8: zrutir eva sarvaM zabda.arthaM svaruupa.pada.aatmani saMniviSTaM
darzayati / saa tam arthaM janayati^iva / sa hi tasyaaM pratyaaayya.aatmanaa nityam
avasthitaH / na ca baahya.vastu.gataM sad.asattvaM zrutir apekSate na^api
viparyaya.aviparyayau / tathaa hy alaatacakre^api sarva.pradeza.vyaapi.ruupaa ca
kriyaa.aadi.zabda.ruupa.bhaavanaa.anugataa zrutir avatiSThamaanaa
alaatacakra.aadi.zabdaanaaM vyaavahaarikaNaam arthavattaaM prakalpayati /
tac.zruti.bijja.aabhimukhye tathaa.bhuuta.nimittayaa zrutyaa prakalpitaH vastu.aakaaraH
saty apy anumaana.baliiyastve ruuDhii.bhavati /)

言葉（具体的音声）(zruti)こそが、語の意味＝対象(zabdaartha)として、それ自身の
 [具体的な個々の音声の] かたちをとった単語(pada)それ自体の内に内在している
 ものを示す。それはあたかも、言葉（具体的音声）が、その意味＝対象を、[それ
 自体の内から] 生み出すかのごとくである。実にそれ（意味＝対象）は、そこ（具
 体的音声）の内に[こそ]、認識させられるべき対象そのものとして、常に存在し
 ているのである。そして、言葉（具体的音声）は、外界の事物[そのもの]に所属
 する存在性や非存在性を期待するものではないし、また[外界の事物についての]
 誤った認識や正しい認識(viparyaya.aviparyaya)に期待するものでもない。すなわち、
 [たとえば、「旋火輪」（たいまつ）という言葉（具体的音声）が、その表示
 対象としての<旋火輪>を表示する場合を例にすれば次のように言うことができる
 だろう。実のところ、たいまつをグルグルとまわしたときに見える<旋火輪>は、
 目の錯覚でそのように見えるのであり、外界の事物としてそれ自体は真に存在する
 ものではない。しかし、そのような実際にはそんな風には存在しない]「旋火輪」
 [と呼ばれるもの]に対しても、[回転するたいまつが瞬間的・連続的に占め
 る]すべての場所に遍在するかたちをもち、<運動>などの語それ自体のかたち[を
 生み出す]言語能力に随伴された、言葉（具体的音声）が、存在しているから、そ
 のような言葉（具体的音声）が、日常の言語慣習において使用される「旋火輪」な
 どの諸々の語の、有意味＝対象性を生み出すのである。

1.22 (222.6-223.3: kaanacid vyaakaraNaani bahu.avibhaagaani bahuun
 pratyakSa.pakSeNa[pratyakSa.pakSa] zabdaan pratipaadayanti / kaanicit tu
 vibhajya^anumaana.pakSeNa bahuunaaM samudaayaanaaM pratipaadanaM kurvanti /
 saa^eSaa smRtir yathaa.kaalaM puruSa.zakti.apekSayaa tathaa tathaa vyavasthaapyate /
 santi tu saadhu.prayoga.anumeyaa eva ziSTaaH sarva.jJeyeSu[sarva.jJeya]
 apratibaddha.antaH.prakaazaaH / te viziSTa.kaala.avadhi.pravibhaagaM yathaa.kaalaM
 dharma.adharma.saadhana.bhaavena samanvitaaM zabda.zaktim avyabhicaareNa
 [avyabhicaara] pazyanti //)

[これまでにいくつもの文法学が作られているが、その内の]いくつかの文法学で
 は、不分析[的な説明]が多くなされ、多くの語を、直接的なやり方で、[そのま
 まのかたちで] 教えている。その一方で、[別の]ある[文法学]では、[語を]
 分析した上で、間接的なやり方で、多くの語の集まりを説明しようとしている。こ
 の[文法学]というスムリティは、その時代に応じて、[その時々]の人間の能力
 を勘案して、そのように様々に確立されてきた。実に、[その存在が、]文法的に
 正しい語の使用ということによって推論される（間接的に知られる）だけの、シシ
 ュタ[と呼ばれる人々]が存在する。かれらは、認識されるべきあらゆるもの・こ
 とに対する、なに一つ妨害するもののない内的な観照力をもつものであり、その時
 代に応じて、ダルマ（功德）やアダルマ（罪過）を実現するものとなるという性質
 をもつ言葉の能力---この言葉の能力は、限られた特定の時間という境界によって
 [区別されてそれぞれ異なった] 区分をもつが---を、確実に見る。

1.23 (230.6-7: VPI 177(R)=149(B, [II]): te saadhuSv anumaanena [anumaana]
 pratyayotpattihetavaH [pratyaya.utpatti.hetu] / taadaatmyam upagamyaa^iva zabdaarthasya
 prakaazakaaH //)

それらの語は、推論によって\ruby{文法的に正しい語形の語}{サードゥ}を思い浮かべる原因となる。つまりそれらの語は、あたかも「文法的に正しい語形の語と」同一のものとなったかのようにして、「正しい語形の語が表示するのと同じ」語の意味＝対象を表示するものとなる。（詩節一七七）

1.24 (232.8-10: saGkiirNaayaaM vaaci saadhu.viSaye^apazabdaaH prayujyante / taiH ziSTaa lakSaNa.vidaH saadhuun pratipadyante / tair eva saadhubhis tad.artham abhidhiyamaanaM pazyanti / *anumaanas* tu dhuuma iva^agner asaadhur itareSaam //)

言葉が混乱しているときには、文法的に正しい語形の語の対象領域に対して、崩れた語形の語が使用される。文法規則を知るシシュタ（知識人）たちは、それら（崩れた語形の語）によって、文法的に正しい語形の語を理解する。かれらは、他ならぬ文法的に正しい語形の語によっては、直接的に表示されているその意味＝対象を見る。しかし、文法的に誤った語形の語は、ちょうど煙が火にとっての間接的理解のための根拠となるように、他方「の文法的に正しい語形の語にとっての間接的理解のための根拠となる。

1.25 (233.1-4: iha^abhyaasaat strii.zuudra.caaNDaala.aadibhir apabhraMzaaH prayujyamaanaaH tathaa pramaadyatsu vaktRSu ruuDhim upaagataa yena tair eva prasiddhataaraH vyavahaaraH / sati ca saadhu.prayogaat saMzaye yas tasya^apabhraMzas tena saMprati nirNayaH kriyate / tam eva ca^asaadhuM vaacakaM *pratyakSa.pakSe* manyante / saadhuM ca *anumaana.pakSe* vyavasthaapayanti //)

この世界では、女性やシュードラやチャーンダーラといった人々によって、あるいはまた、話し手が不注意から間違えるなどして、崩れた語形の語が、習慣的に使用され続けてきた結果、そのような崩れた語形の語による言語表現の方が、より一層広く知られたものとなって、慣用となってしまっている。そして、文法的に正しい語形の語の使用から、疑念が起こったときには、それに対応する崩れた語形の語によって、決定がなされることになる。そこで人々は、まさにそのような崩れた語形の語こそを、意味＝対象表示能力をもつ語であると、見た目でも直接的に考えてしまうのであり、その一方で、文法的に正しい語形の語「の意味＝対象」を、間接的なものとして確定する。

2. Vākyapadīya 第二章の本文詩節と Vṛtti における anumāna の用例

2.1

(211.23-25: yas tarhi ogyataavicchedahetuH sambandhaH sa ca na[^]arthebhyaH vaakyasya[^]abhidheya iti praaptaM saH[^]api sarvaabhidheyadharmaanatikraantaH sambandhaH / yadi sarvaabhidheyadharmaanatikraantaH kathaM tarhi saH[^]asti[^]ity avasiyate ---

(212.1-2: VP2.046 / kaarya[^]anumeyaH saMbandhaH ruupaM tasya na vidyate / asattvabhutam atyantam atas taM pratijaanate [prati[^]jJaa] //)

(212.3-7: na hi tasya sambandhasya svarupam avadhaarayituM zakyam / sa hi (eva?) yogyataavacchedakaaryaprasava[^]anumeya eva nityaM praaptasaMvijJaana[^]padavizeSa[^]nibandhanaH saakSaat sambandhe[^]asambandhe vaa (sambandhaad asambandhaad vaa?) sarvaprameyaatmasu aviziSTasvaruupaH / ataz ca[^]idantaad iti saakSaat paryaayazabdena vaa vyapadeSTum azakyatvaad atyantaasattvabhutam anekasambandhiviSayaM sambandham aacakSate //46//)

2.2

(221.13-14: VP2.086 / asya vaakyaantare [vaakya.antara] dRSTaal liGgaad bhedaH[^]anumiiyate [anu\maa] / ayaM zabdair apoddhRtya padaarthaH pravibhajyate //)

2.3

(223.14-15: VP2.156 / durlabhaM kasya cit[^]loke [loka] sarvaavayavadarzanam / kaiz cit tv avayavair dRSTair arthaH kRtsnaH[^]anumiiyate [anu\maa] //)

(224.22-225.6: na hi paripuura[^]NaavayavaM kazcit kalaapaM prakRtadarzanaH hy avikalaM pratipadyate / tatra keSaaJcid avayavaanaaM grahaNe vyaktajaatiyaH[^]avayavii nirdhaaryate / tadyathaa gavaadiinaaM puurvaardhasya[^]aparaardhasya vaa darzane / kvacit tu sandehaH[^]na[^]eva nivartate / tadyathaa --- dadhimaatradarzane / paTa praavaraNaadidarzane tv avayavaa dRzyamaanaa niyataa niyatanuma[^]anahetavaH bhavanti / tatra[^]api keciJ jaatyantarani[^]Rttyarthaaya[^]aM zrutau zrutipakSasya manyante / kecid dezaantarbhutebhyaH[^]avayavebhyaH[^]anuma[^]anaat svaviSaye zabdaaH pravartanta ity aacakSate //161//

(225.7-8: VP2.162 / yathaa romazaphaadiinaaM vyabhicaare [vyabhicaara][^]api dRzyate / gozabdaH na tathaa jaater [jaati] viprayoge [viprayoga] pravartate [pra[^]vRt] //)

(225.9-14: gandha.utpalabuddhy[^]anumitaH (gandha.upalabdhy[^]anumitaH?) hi jaatyutpalaadiSu yaH zabdaH prayujyate na sa gandhamaatram aazritya gandhasamavaayaM vaa dravyamaatraM pratyaa[^]yayati sahacaariiNi guNaantaraaNy api tatra[^]anumiiyante / na ca tadvaa[^]cinaH zabdaa dRSTe sahacaariiNy anuma[^]anena[^] hetau pravartanta ity abhyupagamyante / keSaaJcit samudaayavaadinaam utpalaadizabdavaacyatvam iti saMkhyaa[^]pramaaNasaMsthaanajanakatvena vinaa gavaadiSu gozabdasya viSaaNaadisannidhiprayuktaabhimukhyaa pravRttir dRzyate //162//

2.4

(234.10-11: VP2.189 / sthaadibhiH kevalair yac ca gamanaadi na gamyate / tatra^anumaanaad dvididhaat taddharmaa praadir ucyate //)

(234.12-16: kvacid dRSTena^anumaanena vyavasthaa kriyate / kvacit saamaanyataH dRSTena^anumaanena / tatra pratiSThata ity atra prazabdaH^anyatraadikarmadyotane dRSTasaamarthyaH, sa iha^api tadartha eva^avasiiyate / anyeSaaM ca kriyaavacanaanaam anekaarthatvaM tulyadharmaaNaaM dhaatuunaaM prasiddham iti tiSThater apy adRSTaM viSayaanatare gatyarthaabhidhaayitvaM pratiSThata ity atra vyavasthaapyate //189//

2.5

(236.9-10: VP2.195 / samuccitaabhidhaane [samuccita.abhidhaana] tu vyatirekaH na vidyate / asattvabhutaH bhaavaz ca tiGpadair abhidhiyate //)

(236.11-15: SaSThyazravaNaad ity etasmin dyotakatvasya^anumaane saadhanaaya-upaadiiyamaane kecid bruvate --- kaamaM samuccayaabhidhaane vaiyyadhikaraNyaat SaSThii prasajyate / samuccitaabhidhaane tu caadibhir vijJaayamaane saamaanaadhikaraNyaat plakSaH samuccitaH nyagrodhaH samuccita iti guNabhuutaH sambandhas teSaam anumiiyeta / tathaa asattvabhutaH bhaavastiGpadair abhidhiyata eva / tasmaad asattvavacanam api dyotakatve na^anumaanam iti //195//

(236.16-17: VP2.196 / samuccitaabhidhaane [samuccita.abhidhaana]^api viziSTa-arthaabhidhaayinaam / guNaiH padaanaaM saMbandhaH paratantraas tu caadayaH //)

(236.18-22: guNaazravaNaad ity etasminn anumaane kecid bruvate --- viziSTaabhidhaayiSu bhedaarheSu svatantraSu vizeSaNaanaaM yuktaH sannipaataH / caadayas tu viziSTasamuccitaabhidhaane viziSTaarthaaantaratantraaH / tasmaat teSaam eva viziSTaanaaM vRkSaadiinaaM guNaaH zruuyamaaNaaH zobhanatvaadayaH sambandhitvena^avasiiyante / tasmaad guNaazravaNam api dyotakatve na sambhavaty anumaanam iti /

(236.22-237.4: atra^ucyate --- karmasaadhane^api samucciiyate iti dvandvaH samuccita.upasarjanaH samuccaya eva^abhidhiyate / itaretarayukta.upasarjanaz ca^itaretarayogaH samaahriyamaaNaa.upasarjanaz ca samaahaaraH anvaacciiyamaana.upasarjanaz ca^anvaacaya ity evaM kRtvaa yataH liGgavacanany uktaani / SaSThyazravaNaadayaz ca saamaanyataH dRSTena^anumaanena vaacakavipariitaaH / tad evaM nyaayavidaaM vyabhicaaraabhidhaanam asamaJjasam iti //199//

2.6

(239.16-17: VP2.202 / karmapravacaniiyatvaM kriyaayoge [kriyaa.yoga] vidhiyate [vi\dhaa] / SatvaadivinivRttyarthaM [Satva.aadi.vinivRtti.artham] svatyaadiinaaM vidharmaNaam //)

(239.18-21: yady apy anvarthasaMjJaakaraNaat karmapravacaniiyasaMjJa anumiiyate saMjJiSu zabdapravRttinimittasannidhaanaM tathaapi prasaGgalakSaNaviSyaapatter avidyamaanapravRttinimittavyaapaarasvaruupamaatranibandhanaasvatyaadiinaaM saMjJaantarabaadhanaarthaa karmapravacaniiyasaMjJaa vidhiyate / tena gatyupasargasaMjJaazrayanighaataadikaaryaM na pravartate //202//

2.7

(244.22-23: VP2.219 / kaz ca saadhanamaatraarthaan adhyaadiin parikalpayet [pari\kLp] / aprayuktapadaz ca^arthaH bahuivriihau [bahuivriihi] kathaM bhavet [\bhuu] //)

(244.24-245.2: ihaantastiiramadhistriiti prasiddhaabhyaam anvayavyatirekaabhyaam adhyaadayaH karmakartRsamavetakriyaanugraahiNiiM stryaadizabdavyatiriktaaM kevalaam aadhaarazaktiM pratyayayantiity *anumaatuM* zakyam / bahuivriihau ca ruupaanvayayuktam avayavapadam antareNa padaantaraM tadabhidheye vartamaanaH samudaayaH dRzyate //219//

2.8.

(246.7: praatipadikatvaM tu samaasaruupasya zaastradRSTyanumaanena yathaakathaJcit kriyate /)

2.9

(246.16: *anumiiyamaaneSv* azabdeSu bhaageSu chidiH kriyaaphalaruupaabhyaam sannivizate)

2.10

(250.1-2:VP2.235 / yathaa^abhyaasaM hi vaag arthe [artha] pratipattiM samiihate [samiihata] / svabhaava iva ca^anaadir mithyaabhyaasaH vyavasthitaH [vyava\sthaa] //)

(250.3-6: iha^indriyasya kasyacid eva vyaapaareNa kenacid aagamena^utprekSayaa vaa yathaa yad vastu tathaabhhuutaM vaa buddhau praantaakaaram asann iva^iizam abhyastaM bhavati / tadetad anugamena tadanugraahiNii vaak pravartate / pratidezapratidezinaav *anumaanena*^uddezena vyavaharataaM yathaiva mama^ayam aham asmi^ity eSa vikalpHa ruuDhasvabhaavataH tathaa sarvaartheSu mithyaabhyaasaH vyavasthitaH //235//

2.11

(251.18: zabdair eva^*anumaanena* pravartamaanas tam upaadatte /)

2.12

(254.8-9: VP2.247 / stutinindaapradhaaneSu [stuti.nindaa.pradhaana] vaakyeSv [vaakya] arthaH na taadRzaH [taadRk] / padaanaaM pravibhaagena [pravibhaaga] yaadRzaH parikalpyate [pari\kLp] //)

saayana.upayogaadi ... na jarayati na^abhyupayogaat pRthivyaasma jjati yatra^abhidhiyate tatra^etaavaan arthaH diiptaagnir mandaagnir vaa bhavati^iti satatatvavacanam / satta*anumaanapakSeNa*^anugamyate / yastu na^asti pratyakSeNa tasmaan na pRthagarthatvaM padaanaam ity aahuH / athavaa^anyathaa vaa pratyakSa*anumaana*abhyaam tasya^arthasya pratipaadakam iti //247//

2.13

(274.20: tathaa vaakyaantare dRSTaal liGgaad bhedaH prasiddhaH^*anumiiyate* /)

2.14

(275.24-27: zaastre^api “prathamānirdiSTaM samaasa upasarjanam”(P.1.2.43.) iti samaasaarthe zaastre samaasazabdappravRttiH / “ekavibhakti ca^apuuvanipaate”(P.1.2.44.) iti / atra tu yaH samaasazabdaH^anumiiyate tasya praathamakalpika eva samaase pravRttiH /

2.15

(279.13-14: VP2.328=327 / zabdavyavahitaa buddhir aprayuktapadaazrayaa / *anumaanaM* tadarthasya pratyaye [pratyaya] hetur ucyate //)

2.16

(280.22-23: VP2.335=333 / yathaaprakaraNaM dvaaram ity asyaaM karmaNaH zratau / badhaana dehi vaa^iti etad upaayaad avagamyate //)

(280.24-25: yathaa prakaraNaM bahirantar vaa vyavasthitasya dvaaraM dvaaram ity anirjJaatena kriyaavizeSeNa^anumeyena^arthitve^anumaanahetor upaayaad badhaana dehi vaa^iti vi vaa^iti //333//

2.17

(282.8: kecit tu manyante --- yaavad ruupaatvam ucchritaad asandigdham artharuupan taavad abhidheyaM zabdasya tataH^anyat sarvam *anumeyam* iti taan prayujyate /)

2.18

(283.20-21: VP2.348=346 / utsargavaakye [utsarga.vaakya] yat tyaktam azabdam iva zabdavat / tad baadhakeSu [baadhaka] vaakyeSu [vaakya] zrutam anyatra gamyate //)

(283.22-25: aakaaraantarvarjitebhyaH dhaatubhyaH karmaNyaN (P.3.2.1.) bhavati^ity evaMbhuutam eva tadutsargavaakyam / tatra tu kavidhaanaanuroodhaad aakaaraantaa dhaatavaH prakRtayaH^anyatra zruuyamaaNavidhivaakya eva^upasargasya^apraapty-*anumaanaM* bhavati / tasmaat punar etad eva kalpyate //346//

(284.1-9: nanu saamaanyacodanaasu tatra vRttau vizeSaaNaam abhedatvaad bhedapratipattau sandigdhatvaad aazritavizeSair vidhibhir anaazritavizeSaaNaam vidhiinaaM baadhanaM bhaviSyati^iti / atra kecid aahuH --- na zabdena praapitasya zabdaantareNa baadhanaM bhavati / ubhayor arthaparityaage bhedaabhaavaat / nanu loke gamyataaM bhuujyataam ity uktaa doSaM kaJcid dRSTvaa sthiiyataam iti / na ca taavad apraapty*anumaanam* atra^asti / na ca baadhyabaadhakabhaavena tiSThate / evaMprakaareSu taavad akalpitaa^avakaazaantareSu zaastreSu vikalpaa dRzyante / pratiSedhaH vikalpaarthas tulyaM cet praaptikaaraNam ity api ca gamyataaM bhajyataam iti doSaz cen na^asti^ity etad utsargavaakye prakramyate / tac ca doSaantaradarzanaat prayojanaabhaavaac ca prayojanaantareNa vaa^apavaade prakramyamaaNe^asti doSaabhaava ity azeSavizeSaH^anumiiyate //346//

(284.10-11: VP2.349=347 / braahmaNaanaaM zrutir dadhni prakraantaa maaTharaad vinaa / maaTharas takrasaMbandhaat tatra^aacaSTe [aacaSTa] yatharthataam //)

(284.12-18: kauNDinyavarjaM dadhi braahmaNebhyaH diiyataam ity etad utsargavaakye prakraantaM takrasya tv azruuyamaaNasya^api vaakyazeSasya takradaanaviSayaa kauNDinyazrutir *anumaanam* / athavaa vidyata eva^aparaH braahmaNazabdaH kauNDinyavartii teSv eva braahmaNeSu yasya vRttiH / pradezasaamaanyaM hi bahu prakaram tadyathaa braahmaNaH^asty atra kaaJcid gaaM pazyati^iti / nanu ca dadhidaane kauNDinyasya^*anumeyasya* zabdapratiiitaM dadhidaanaM takrantu zabdapratiiitam / na bruumaH kauNDinyatvaM dadhidaanasya praapakam / braahmaNatvaM tac^zabdavad eva / (284.18-28: nanu yuktaM pratiSedhaH^anyaarthatvaad apraapty*anumaanam* anarthakam / aatmaruupaprakalpaneSu kRtaarthavidhyantaram upajaayamaanaM saamarthyaad vikalpam eva prakalpayet / tatra katham apraaptir *anumiiyate* / sarvathaa na^asti^*anumaanasya* vyaavRttiH / kathaM na taavat pratiSedhaH kvacid api pravartata ity abhyupagamyate / kintarhi svaabhaavikyaa nivRtter dyotakaH / sa khalu nityaparatantratvaad asya^arthaH / taam anyasamavaayiniiM nivRttiM dyotayann *anumaanaM* prakalpayati / yatra yatra ca pratiSedha itthaMbhuutas tatra tatra saamaanyavizeSabhaavaH^anyadRSTavyabhicaaraH sahacaaripratiiitivataH vidyate / sa ca^*anumaanaaya*^alam / yathaa^agner dhuumaH pataGgadhuumakaa iti sambandhaat sambandhasambandhaac ca^*anumaanaM* bhavati / saamaanye prayujyamaanaM vizeSe kvacit prasuptaprasaGgam iva buddhyaa svabhaavanivRttam / vaakyazeSeNa svaabhaavikena vaa vaakyarthasya^avicchedena^avizeSe praapyamaaNam saty api sambhave vidhau sannidhaana*anumaanatt*vaat tadviSayaM buddhiprasaGgam vyaavartayan baadhaka ity ucyate //347//

(284.29-30: VP2.350=348 / anekaakhyaatayoge [aneka.aakhyaata.yoga]^api vaakyam nyaayaapavaadayoH / ekam eva^iSyate kaiz cid bhinnaruupam iva sthitam //)

(285.1-8: iha kecid aacaaryaa utsargaapavaadayor ekavaakyatvaM / tatra yeSaam ekavaakyatvaM ta evam aahuH / apavaadasya viSayasya viSayaan utkramya utsargavaakyaM pravartate / ata eva ca^idam ucyate --- na vaakyaprakaraNaad iti / tathaa ca^uktaM --- tatra^aakhyaanaad iti pratiSedhaH naanaavakyatvaad iti / tathaa na^avidezam ity ataH naanaavaakyatvam ity evamaadiH yeSaam tulya utsargaapavaadayor naanaavaakyabhaavas ta evam aahuH / ekatra praaptaanaam baadhaanaam ekatve^aGgaaGgibhaavaH syaat / (a)bhyaasaac ca ye vikalpabhedaaH syuH naanaatve vaakyaanaam ekatve^aGgaaGgibhaavaH syaat / tathaa ca^uktam / yady ekaM vaakyam tatra (?) ca^idaM ca tataH^ayaM tacc.zeSaH, atha naanaavaakyaM tataH^ayaM tadapavaada iti / tatra^anekaakhyaatayoga iti /

(285.9-17: yady api sa.upaskaareSu suutreSu vRttikaaraa bhinnaan kriyaazabdaanuccaarayanti dhaatoraN bhavati^aakaaraantaat kaH^bhavati^iti kartari kRtaH bhavanti, karaNe khyun bhavati, tathaapi yathaa^eva devadattaM bhojayati, suupena bhojaya, vratena bhojaya, lavaNena bhojaya ity eka eva^ayaM bhujir nimittaapekSazrutimaatreNa^aavartate tathaa dadhi braahmaNebhyaH diiyataaM takraM kauNDinyaayaa^ity eka eva^ayaM dadaatiH kauNDinye karmaantaraM pratipadyate / na hi vaakyaantareNa pratipaaditaM baadhakena zakyaM nivartayitum / virodhaM ca^abhisamiikSyaa^etad uktam / atha naanaavaakyaM tatas tadapavaada iti / tatra hi SaSThiiviSayaan samaanaayaaM pravRttau yady anusandhaanam anusetsyate tataH virodhena tadanugamaad ekaarthakaaritve saty ekaviSayatvaad ekaM vaakyam iti vyapadizyate /

(285.17-27: atha tv anusaMhaaravaakyavizeSaNavizeSyabhaavena^utkRSyamaaNam anusaMhaaravaakya eva ... guNavRddhidhivaavikaH^apraapty*anumaanam* / ataH naanaakaaryatvaan naanaarthakaaritayaa naanaavaakyam iti vyapadizyate / yeSaam

tu^utsargaapavaadayor naanaavaakyatvaM te^api tatra khyunaa pratiSedhaH
naanaavaakyatvaad ity atra samarthayante / naanaarthaM naanaaviSayaM vaakyaM
naanaavaakyam ity eSa puurvapakSaH / tadyathaa vikaaravivakSaayaam
apatyasya^avivakSitatvaad vikaare vizeSavihitaaH pratyayaa na^apatyapratyayaan
baadhante tathaa^eva karmavivakSaayaaM kartur anupaadaanaat kartRvivakSaayaaM ca
karmaanupaadaanaat anyatarasannidhaane yad anyat kaarakaM vivakSitaM tatra^anyena
pratyayena bhavitavyam iti dvayor api kartRkarmaNoH paryaayeNa khyunaadayaH
prasajyante / athavaa prakaraNavaakyaM tatra^upanyastaM guNavaakyaM
pradhaanavaakyam iti kvacid eva viSaye kiJcid upaadiiyate / ye tu^utsargaapavaadayor
ekavaakyatvam icchanti teSaaM

(285.28-29: VP2.351=349 / niyamaH pratiSedhaz ca vidhizeSas tathaa sati / dvitiiye
[dvitiia] yo lug aakhyaatas taccheSam [tat.zeSam] alukaM viduH //)

(286.1-6: vidhikaala eva^utkRSTasya punaH zruter apraaptir anumiiyate
sandehehamaatranivRttimaatraJ ca kvacid evakaareNa kriyate / tathaa guNavRddhiprakaraNa
eva dhaatulopamaarddhadhaatukanimittabhaavaad utkRSTaM pratiSedhena^anumiiyate /
yaz ca supo dhaatupraatipadikayoH (P.2.4.7.) iti dvitiiyena luganvaakhyaayate tasya
tasminn eva^avadhivaakye uttarapadavizeSaM varjayitvaa^iti prathamam eva vidhinaa
prakalpitaH zeSaH^anumiiyate //349//

(286.7: naanaavaakyavaadinas tu bruvate

(286.8-9: VP2.352=350 / niraakaaGkSaaNi nirvRttau pradhaanaani parasparam / teSaam
anupakaaritvaat kathaM syaad ekavaakyataa //)

(286.10-11: iha saakaaGkSaaNaaM saMsargaat parasparam upakaare vartamaanaanaam
ekavaakyatvam upapadyate //350//

(286.12-13: pradhaanaatmiSu pRthag anirvRttau vyaapRtaani teSaaM niraakaaGkSatvaad
asati^upakaare na^asti^ekavaakyatvam / ekavaakyavaadinas tu bruvate ---

(286.14-15: VP2.353=351 / vizeSavidhinaa^arthitvaad vaakyazeSaH^anumiiyate /
vidheyavan nivartye [nivartya]^arthe [artha] tasmaat tulyaM vyapekSaNam //)

(286.16-21: tathaa hi tavyattavyaaniiyaraH (P.1.9.6.) iti keSaaJcid anakartRkasya
bhavater ekatvaad ekavaakyatvaM keSaaJcit pratipradhaanaM kriyaa bhidyate / tatra
niraakaaGkSaaNaaM pradhaanaanaaM vaakyatvaM bhavati / ekavaakyavaadinas tu
manyante / satyaam apekSaayaaM tavyadaadayaH pRthak pRthak bhavateH kartaaraH
vijJaayante bhinnaadhaaraa vaa / tavyaadiinaam eka^eva kartRzaktir iti //351//

2.19

(287.7-12: pakSaantare ca tasminn anumiiyamaane tadarthaH zabdaH^aprayujyamaanaH
lupta iti vyapadizyate /

2.20

(288.11: api ca kartaa samudaayasvaruupaM sannipaataayan na^arthena
ruupeNa^anumiiyamaanaany avayavasvaruupaaNi sannipaataayituM samarthaH /

2.21

(288.16: kiM tarhi niyamena^anumiiyamaanaH^api zruuyamaaNavad eva pratyayam
utpaadayati /

2.22

(291.4: yeSv api ca nimittaantaraM vidyamaanam apekSitaM bhaavi vaa buddhya
prakramya bhuutapadaasaktaM taany api nimittasannidhaane ruupavizeSaad
anumaanamaatraM bhavanti, na nimittam abhidheyatvena^abhyantariikurvanti /

2.23

(292.13-14: VP2.371=367 / zaastre [zaastra]^api mahatii saMjJaa svaruupopanibandhanaa
[svaruupa.upanibandhana] / *anumaanaM* nimittasya saMnidhaane [saMnidhaana] pratiyate
//)

(292.15-19: yaa^api kaaraka.upasarjanasaMkhyaa sarvanaamaadiH zaastre mahatii saMjJaa
kriyate saa^api hrasvaadivat (?) svaruupamaatram eva^upaadaaya pravartate / tasyaas tu
gaur evaM vyutpattinimittaM sannidhaana*anumaanam* abhidhiyamaanam api
tannimittasaMjJiSu yeSv asti teSv eva sati sambhave viziSTaviSaye pravartate /
karmapravacaniiyasaMjJaatvaM sati sambhave susiktaadiSu svaruupamaatraazrayaa
saMjJaantaranivRttiM karoti //367//

(292.20-21: VP2.372=368 / aavRtter [aavRtti] *anumaanaM* vaa saaruupyaat tatra gamyate /
zabdabheda*anumaanaM* vaa zaktibhedasya vaa gatiH //)

(292.22-293.2: viziSTasvaruupaM gurusaMvijJaanapadam upaadiiyamaanaM
nimittayuktena guNapadena svaruupaM sakRduccaaraNe^api zabdagataayaa aavRtter
anumaanaM saamidheniivat samprasaaraNasaMjJaavac ca laghvarthantu
sakRduccaaraNaM bhinnayor vaa zabdayoH pradezeSu svaruupNa samiikRtaylor
vyaapaarabhedapratipattiyartham ekatvapakSe vaa zaktibhedaadhyaaropaH^*anumiiyate*
//368//

2.24

(294.20: tadeva^idam aakhyaayate --- saMghaH yatra^avayava upasarjaniibhuutaH
vanaadiSu vRkSaadivad vaa^*anumeyaH* braahmaNaa bhojyantaam saGghaH bhojyataam,
pariSad bhojyataam, ekazeSaH yatra pravibhaktazabdaanaam anvarthaanaam avasthaanaM
na^asti, braahmaNaa bhojyantaam iti /

2.25

(309.10-11: VP2.427=423 / astitvena^anuSaktaH vaa nivRttyaatmani [nivRtti.aatman] vaa
sthitaH / arthaH^abhidhiyate yasmaad ataH vaakyaM prayujyate //)

(309.12-15: itaz ca vaakyanibandhanam avacchedaM sarvaH hi tattvaparasya^arthaH
sattaaM viyogaM vaa yadi na^apekSate niruupayitum eva na zakyate /
pravRttisaMsargaH^api vaakyadharma eva / tasmaac^zruuyamaaNakriyaapadam
anumiiyamaanakriyaapadaM vaa vaakyam eva sarvavyavahaareSv avatarati //423//

2.26

(313.16-17: VP2.442=438 / padaarthe [padaartha] samudaaye [samudaaya] vaa samaaptaH na^eva vaa kva cit / padaartharuupabhedena [padaartha.ruupa.bheda] tasya^aatmaa [aatman] pravibhajyate //)

(313.18-20: sarvathaa pratipaadanartham yadi samudaaye saGkhyavada atha^api zabdaantaraabhaavaan na kvacid avasthitaH vaakyarthah / tasya tu kevalapadaprayogeh yaH vizeSaH nirdhaaritah tena vizeSeNa^anumaanena sambandhaat saa pRthak zaktih pavibhajyate //438//

2.27

(317.10: ///ntah manyante saamaanyamaatram eva tatra vivakSitaM vizeSaas tv anumeyaaH, na teSaam zabdena saMsparzaha^asti^iti /

2.28

(325.1-5: sakRd api zrutilyaruupazabde liGgaiH zrutair yathaa^eva^aazrutaa bhinnarupaa vaakyazeSaah samarthante tathaa vRttiruupaanubhuutaanumiiyate saamidheniivat / tasmaad eva prasaGgaat tatra zaktibhedaparigrahaH^anumiiyate / pratipattau tu nityatvaM vibhaagadarzanam upajaayate / tathaapi samprasaaraNasaMjJaa suvibhaktivizeSanirdezas tu jJaapaka ubhayasaMjJaatvasya^ity uktam //473,474//

3. 成果発表 (1) 第12回国際サンスクリット学会における発表要旨
(ヘルシンキ大学、2003年7月14日)

The Epistemic Structure of *Anumāna*
in Bhartṛhari's *Vākyapadīya*

Akihiko Akamatsu (Kyoto University)

0. The aims of this paper are to describe and analyse the structure of *anumāna* as Bhartṛhari used in his *Vākyapadīya*, and to consider it, in particular, in relation to the larger problem of the development of logic in the period of the classical India.

1. Bhartṛhari's view on *anumāna* and other's view against it

It is well known that Bhartṛhari deals with *anumāna* by contrast with *āgama* in his *Vākyapadīya*¹, and that his opinion is referred to sometimes as Lokāyata's view maintaining that *anumāna* is not *pramāṇa*. Bhartṛhari says:

- 1.1 *Vākyapadīya* I 32: avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /
bhāvānām *anumānena* prasiddhir atidurlabhā //
(=Tattvasaṃgraha 1459; Nyāyamañjarī p.314, v. 192)

[My translation:] "Because their powers are different according to difference of state, place, and time, it is extremely difficult to gain by *anumāna* the certainty (or truth) of objects."

- 1.2 *Vākyapadīya* I 34: yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātrbhiḥ /
abhiyuktatarair anyair anyathaivopapādyate //
(=Tattvasaṃgraha 1461; Nyāyamañjarī p. 316, v. 208)

[My translation:] "Even a matter inferred by clever logicians with effort is explained otherwise by others more specialised."

Against these arguments, Śāntarakṣita or Jayantabhaṭṭa say:

"No, no, it is not very difficult to be attained. No, no, it is not demonstrated otherwise even by the cleverer ones."

- 1.3 *Tattvasaṃgraha* 1475: avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /
bhāvānām *anumānena* nātaḥ siddhiḥ sudurlabhā //

- 1.4 *Tattvasaṃgraha* 1476: yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātrbhiḥ /
nānyathā sādhyate so 'nyair abhiyuktatarair api //

¹ VP I 30—43 ; I 151—154. I treated *anumāna* and *tarka* as synonym for a while. But I know the use as the following: Vṛtti 10.3--5: yaḥ sarvaparikalpānām ābhāse 'py anavasthitaḥ / *tarkāgamānumānena* bahudhā parikalpitaḥ // (Regarding to this verse, see Chr. Lindtner: Linking up Bhartṛhari and the Bauddhas, *Asiatische Studien / Etudes asiatiques*, XLVII—1 1993, pp. 212—3. Fragment 2.)

1.5 *Nyāyamañjarī* p. 326, v. 229: yatnenānumīto yo 'rthah kuśalair anumātr̥bhiḥ /
abhiyogaśatenāpi so 'nyathā nopapādyate //

But I should say here: what is the meaning of 'anumāna' in these texts? Does 'anumāna' in Bhartṛhari's idea have the same contents as in Śāntarakṣita's and Jayantabhaṭṭa's concept? Of course 'no', because Bhartṛhari worked before Dignāga (480–530), who is generally held to be the founder of Indian formal logic as we know it. It was Dignāga who introduced the formulation into *anumāna*. But, on the other hand, before Dignāga, and Bhartṛhari also, Vaiśeṣikasūtras deal with many problems which may reasonably be considered problems of logic, for example, the question of the relation between a thesis and the grounds in its support². So the question I have to ask here is: In what meaning does Bhartṛhari use the word 'anumāna', and how does he explain the structure of 'anumāna' in his epistemology?³

2. Definition of *anumāna* by Bhartṛhari and its surroundings

Among the *Kārikās* of 3 Kāṇḍas of *Vākyapadīya* and the *Vṛtti*, we can find out the passages only as the following mentioning a kind of definition of 'anumāna'.

2.1 *Vṛtti* ad VP I 32, p. 88. 5–6:

ihāvyabhicaritābhimatasāhacaryasya dṛṣṭasya sambandhinaḥ tatsadṛṣṭasya vā darśanād
adṛṣṭe sambandhini yaj jñānam utpadyate tenāpratyakṣasyārthasya prasiddhir duravasānā.

[My translation:] 'In this world, for the person who is convinced that the concomitance [between two relatives A and B] is certain, as the result of a seeing of the [same] one (A), experienced before, or of the similar one to it (A), a cognition on the other (B), being not experienced, arises. By such cognition, to attain the certainty about the object which is not perceived directly is very difficult.'

First of all, I will focus my attention on the word 'avyabhicaritābhimatasāhacaryasya'. As my translation shows it, I treat the expression 'avyabhicaritābhimatasāhacaryasya' as referring to the person who knows the logical necessity (*sāhacarya*). According to *Paddhati*, a sub-commentary of the 1st kāṇḍa of *Vākyapadīya*, however, the word can be explained as follows: the one, for example smoke, whose concomitance [with the other, for example fire], namely the non-deviation (*avyabhicāra*), is believed for certain, is *avyabhicaritābhimatasāhacaryam*⁴. This interpretation seems to be more acceptable in the context⁵. But if we put the word into the historical context of the development of idea about logical necessity, my interpretation will appear to be proper.

Let us begin with a passage of *Vṛttikāra* cited in *Śābarabhāṣya* as the following:

² Nancy Schuster, 'Inference in the Vaiśeṣikasūtras', *Journal of Indian Philosophy* 1 (1972), pp. 341–395.

³ As for the fact that Bhartṛhari admitted two kinds of *anumāna*: *dṛṣṭam anumāna* and *sāmānyato dṛṣṭam anumāna*, see Akihiko Akamatsu, 'The Two Kinds of *Anumāna* in Bhartṛhari's *Vākyapadīya*', *Journal of Indian Philosophy* 27 (1999), pp. 17–22.

⁴ *Paddhati*, p.88, 25–26: avyabhicaratīty abhimataṁ sāhacaryam avyabhicāro yasya dhūmādes tad avyabhicaritābhimatasāhacaryam.

⁵ Iyer's translation: 'what is connected and considered invariably concomittant'.

2.2 Vṛttikāra in *Śābarabhāṣya* (ed. by E. Frauwallner, p.30.):

anumānam jñātasambandhasya ekadeśadarśanād ekadeśāntare 'saṃnikṛṣṭe 'rthe buddhiḥ.
[Frauwallner's translation:] "Die Schlußfolgerung besteht darin, daß jemand, der die Verknüpfung (beider) kennt, auf Grund des Sehens des einen Teiles den andern Teil, der ein nicht in Kontakt befindlicher Gegenstand ist, erkennt."

And see the next example, a definition of *anumāna* by Dignāga:

2.3 Definition of *anumāna* by Dignāga:

apare tu bruvate nāntarīyakārthadarśanam tadvido 'numānam iti. (NV 300.1: Cf. H.N. Randle, *Indian Logic in the Early Schools*, 1930, p.155.)

[Randle's translation:] "experience of a thing as inseparably connected is the instrument of inference, for a person who knows this inseparable connection".

And the following is Praśastapāda's explication on the process of inferential cognition.

2.4 *Praśastapādabhāṣya* 205.10--13:

vidhis tu yatra dhūmas tatrāgnir agnyabhāve dhūmo 'pi na bhavatīty evamprasiddhasamayasyāsandigdhadhūmadarśanāt sāhacaryānusmaraṇāt tadanantaram agnyadhyavasāyo bhavatīti.

[Randle's translation:] "The formula (vidhi) is 'Where there is smoke, there there is fire: and in the absence of fire smoke also does not occur'. In the case of a person who knows the connection in this way (prasiddhasamayasya)⁶, the conviction of fire arises, as the result of an undoubted experience of smoke and as the result of remembering the accompaniment of smoke by fire (sāhacaryānusmaraṇāt)". (Randle, p.154.)

The question at present is how to interpret the word "avyabhicaritābhīmatasāhacaryasya" used in the definition of *anumāna* by Bhartṛhari. If we pay attention to the definitions mentioned above, and we notice that all of them refer to the person who knows the logical necessity⁷, in the case of the definition by Bhartṛhari also, it will be suitable to consider the word as referring to the person who knows the logical necessity. And from these definitions, we realize that the scholars of those days consider the logical necessity as being dependent on human knowledge. As for the insertion of such words 'jñātasambandhasya', 'tadvidah', and 'prasiddhasamayasya' into the definition of *anumāna*, Randle says as the following: "It seems to have been common to the logic of the time to insert into the definition of the instrument of inference a proviso that the person drawing the inference should be aware of the relation between the terms which makes the inference possible." (Randle, p. 155.) In fact, at the later time when the question how to ontologically determine the logical necessity between two terms will be the most important problem, the insertion of such word must be regarded as inappropriate to the definition.

⁶ Śrīdhara indicates clearly: 'evam prasiddhasamayasya' prasiddhāvinābhāvasya puruṣasya.

⁷ The same type of definition is found also in Candrānanda's commentary on VS IX.18 (p. 69.16—18): tatraivaṃvidhaprasiddhasambandhasyārthaikadeśam asaṃdigdham paśyataḥ śeṣānuvyavasāyo yaḥ sa līngadarśanāt saṃjāyamāno laṅgikam iti vṛttikāraḥ.

We may now proceed to the second half of the passage ‘*tenāpratyakṣasyārthasya prasiddhir duravasānā*’. (“By such cognition, to attain the certainty about the object which is not perceived directly is very difficult”.)

3. Why is the *anumāna* unreliable?

Here Bhartṛhari insists on the uncertainty, unreliability of *anumāna*. Why is the *anumāna* unreliable? That is because the object of the *anumāna* is something that is not perceived directly (*apratyakṣa*), something that is beyond perception. What does it mean?

3.1 *Vākyapadīya* I 32 : avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu / bhāvānām anumānena prasiddhir atidurlabhā //

Vṛtti 88.5-89.6: ihāvyabhicāritābhimatasāhacaryasya dṛṣṭasya sambandhinaḥ tatsadṛṣasya vā darśanād adṛṣṭe sambandhini yajjñānam utpadyate tenāpratyakṣasyārthasya prasiddhir duravasānā / tathā hi / avasthāntareṣu viniścītābalasattvādīnām punar avasthāntareṣu puruṣagamyēṣv apuruṣagamyēṣu vā dṛṣyante svabhāvā vyabhicāriṇaḥ / bāhyānām api bījauśadhiprabhṛtīnām avasthābhedād upalabhyate śaktivyabhicāraḥ / tathā deśabhedād api / atīṣṭo haimavatīnām apām sparśaḥ / sa tu balāhakāgnikuṇḍādiṣu tadrūpānām evātyuṣṇa upalabhyate / tatra rūpasāmānyād apahr̥tabuddhiḥ parokṣaviśeṣo durjñānam bhedam arvāgdarśano darśanamātreṇāgamyam āgamenaiḥ prapadyate / kālabhedād api / grīṣmahemantādiṣu kūpajalādīnām atyantabhinnāḥ sparśādayaḥ dṛṣyante / tatra sūkṣmam avasthānaviśeṣam prākṛtam aprākṛtagamyam āgamacakṣur antareṇāpratyakṣam anumānamātreṇāniścitaḥ kaḥ sādhyatūm asaṃmūḍhaḥ prayatate //

[Iyer’s translation :] “... The ordinary man (*arvāgdarśana*), misled by external resemblance, is unable to see the difference and can see it only with the help of tradition. Similarly, properties of things change with time. The temperature of the waters of a well and the like, is very different in summer and winter. Which intelligent man would try to demonstrate, by mere reasoning, this subtle difference in nature, imperceptible to the ordinary man, unascertainable by inference and incomprehensible except through knowledge derived from tradition?” (Iyer, p.44.)

3.2 *Vaiśeṣikasūtra* II.1.15--17: vāyur iti sati sannikarṣe pratyakṣābhāvād dṛṣṭam liṅgam na vidyate / sāmānyato dṛṣṭāc cāviśeṣaḥ / tasmād āgamikam.

[Schuster’s translation :] “As for wind -- because of the absence of perception in the case of the actual connection (of wind with its mark), there is no perceived mark (of wind) / And from seeing from the general no particular (entity) can be known / Therefore (one must) appeal to scripture.” (Schuster, p. 387, n.11)

3.3 *Nyāyabhāṣya* 292.1—2 (ad NS Ia5): sāmānyato dṛṣṭam nāma --- yatrāpratyakṣe liṅgaliṅgiṇoḥ sambandhe kenacid arthena liṅgasya sāmānyād apratyakṣo liṅgī gamyate. yathecchādibhir ātmā. icchādayo guṇāḥ, guṇāś ca dravyasaṃsthānāḥ, tad yad eṣāṃ sthānam sa ātmeti.

[Schuster’s translation :] “*Sāmānyato dṛṣṭa* is when the connection of the mark with its possessor is not perceived, but because of the similarity of the mark with some other thing, the unperceived possessor of the mark is known. As, in ‘By means of desire, etc., the soul (is

known)'. Desire and the rest are attributes, and attributes have a substance as their abode; the soul is the abode of these (attributes).'' (Schuster, p. 393, n.59)

4. Structure of the *anumāna* (1)

4.1 *Vākyapadīya* I 34: yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /
abhiyuktatarair anyair anyathaivopapādyate //

Vṛtti 90.9--91.1: anyad dravyaṃ guṇebhyaḥ, vyapadeśāt / tad yathā / sati
viśeṣaṇaviśeṣyabhede rājñā rāṣṭraṃ viśeṣyate na parivrājakena / viśeṣyate vā candanena
gandhaḥ na rūpādibhiḥ / tasmād anyad dravyaṃ guṇebhya ity anumānena dravye
vyavasthāpīte nāyam apadeśaḥ yukta ity āhuḥ /

Vṛtti 92.3--4: śrutiviśeṣasaṃnidhānāsasaṃnidhānakṛtas tu pūrvapakṣopanyāsaḥ / tasmād
dṛṣṭād adṛṣṭam anugamyate ity avirodhāt siddham etat /

5. Structure of the *anumāna* (2)

5.1 *Vākyapadīya* II 157 (=162, ed. by Iyer)

tathā jātyutpalādīnāṃ gandhena saḥacāriṇām /
nityasaṃbandhinām dṛṣṭam guṇānām avadhāraṇam //

Vṛtti 225.9-14: gandhotpalabuddhyanumito (gandhopalabdhyanumitaḥ?) hi jātyutpalādiṣu
yaḥ śabdaḥ prayujyate na sa gandhamātram āśritya gandhasamavāyaṃ vā dravyamātram
pratyāyayati saḥacāriṇi guṇāntarāṇy api tatṛānumīyante / na ca tadvācīnaḥ śabdā dṛṣṭe
saḥacāriṇy anumānena hetau pravartanta ity abhyupagamyante / keṣāñcit samudāyavādinām
utpalādisabdavācyaṭvam iti saṃkhyāpramāṇasaṃsthānajanakatvena vinā gavādiṣu
gośabdasya viśāṇādisannidhiprayuktābhimukhyā pravṛttir dṛśyate .

5.2 *Vākyapadīya* II 163 (=163, ed. by Iyer)

tasmāt saṃbhavino 'rthasya śabdāt saṃpratyaye sati /
adṛṣṭaviprayogārthaḥ saṃbandhitvena gamyate //

Vṛtti 225.17-18: tasmāt saṃpratīyamāno 'pi saḥacāriṇaḥ saṃbhavinaḥ na śabdārtha ity
vijñāyate / na hi tathābhūtenārthātmanā śabdasya sambandho 'pi yujyate.

6. *Vākyapadīya* I 131:

na so 'sti pratyayo loka yaḥ śabdānugamād ṛte /
anuviddham iva jñānaṃ sarvaṃ śabdena bhāṣate //

4. 語彙研究 (3) vākyaārtha (文の意味)

4.1 (205.4-5:VPI 151(R)=135(B,[I]): vedazaastraavirodhii [veda.zaastra.avirodhin] ca tarkaz cakSur apazyataam / ruupamaatraad dhi vaakyaārthaH kevalaM na^atitiSThati [ati\sthaa] (I,B: kevalaan na^avatiSThate))// ヴェーダと論書に矛盾することがなければ、論理的思考は、ものを「はっきりとは」見ていない人々にとっての「対象を限定するための」眼である。なぜなら「教典の」文章の意味(vaakya.artha)は、「語それ自身の」外的なかたちだけから決定されるものでは決してないから。(詩節一五一)

4.2 (00226(P): vaakyalakSaNaprasaGgena ca tathaa vaakyaārthasya sambandhasya ca matabhedaM darzayiSyati /) 文の定義に続けて、さらに「文の意味」と「文と文の意味との関係」についての考え方の相違を以下に示そう。

4.3 (00301(P): tatra^akhaNDapakSe triSv api lakSaNeSu pratibhaa vaakyaārthaH / yathaa darzayiSyati --- “vicchedagrahaNe^arthaanaaM pratibhaa^anyaa^eva jaayate / vakyaārthaM iti taam aahuH”(v.143) iti /) [先に挙げた「文は部分をもたない」という立場と、「文は部分をもつ」という立場のうち、]「文は部分をもたない」という立場(akhaNDapakSa)では、先に述べた三種類の「文の」定義[、すなわち(3)「語の」集合体に存在している普遍、(4)単一で部分をもたない語、(6)知識による単一化、]のいずれにおいても、文の意味は直観(プラティバー)(pratibhaa)である。例えば次のように示されるであろう。「諸対象について個別的な理解がある時、全く[それら個別的な理解とは]異なる別のものとして<直観>(プラティバー)が生じてくる。諸々の単語の意味によって生み出されたそれ(直観)を、人は、「文の意味」と呼ぶ」(詩節一四三)。

4.4 (00305(P): avaziSTeSu paJcasu lakSaNeSu madhyaad “aakhyaatazabdaH^vaakyam” ity asmin pakSe kriyaa vaakyaārthaH / yathaa vakSyati --- “kriyaa kriyaantaraad bhinnaa”(v.414) ityaadi / yathaa ca pratibhaa yat prabhuutaartha yaam anuSThaanam aazritam / phalaM prasuuyeta yataH saa kriyaa vaakyagocaraH //iti) [上述の三種類の定義]以外の五種類の定義のうちで、(3)「文とは、動詞である」というこの主張においては、行為(クリヤー)(kriyaa)が文の意味として認められる。たとえば次のように言うであろう。「それぞれ特定の行為参加要素を基体としてもつがゆえに他の行為とは異なっている行為が、[文の意味として]最初に開始される」(詩節四一八)。またたとえば、「直観(プラティバー)は行為によって生み出されたものを対象とし、また結果は行為の実行に依拠して生じてくるのであるから、行為こそが、文の対象領域である」。

4.5 (00310(P): saMghaatapakSe kramapakSe ca saMsargaH^vaakyaārthaH / sa ca “saMbandhe sati yat tv anyad aadhikyam upajaayate / vaakyaārtham etaM sampraahur anekapadasaMzrayam //”(v.42.) ityaadinaa darzayiSyate /) (2)「文とは、語の集合体である」という主張と、(5)「文とは、分節的順序(クラマ)[からなる連続体]である」という主張においては、相互連関(サンサルガ)(saMsarga)(n.10)が文の意味として認められる。そしてそれは、たとえば「[文中の諸単語の間に]関係がある時、[各単語が表示する意味とは]別に、あるものが余分として生じてくる。それが、[それら]複数の単語に依拠する「文の意味」に他ならないと、人々は言う」(詩節四二)などの詩節によって示されるであろう。

4.6 (00313(P): tathaa saMghaatapakSa eva “sarvabhedaanuguNyam”(v.44.) ityaadinaa prakaaraantareNa^abhihitaanvayapakSe pratipaadyamaane “kaaryaanumeyaH saMbandhaH^ruupaM tasya na vidyate /”(v.46.) ity anena zlokena vizeSavizraantaH padaanaam eva^arthaH vaakyaaartha iti lakSyate /) また、(2) 「文とは、語の集合体である」という主張が、詩節四四などに見られるような別の立場[、つまり単語の意味は文中で他の単語の意味と関連させられてはじめて個別的なものとして実現するという考え方]によって、「文を構成する各単語が相互に関連付けられた一個の意味を表すとき、文の意味がある」という主張(anvitaabhidhaanapakSa)として説明されるとき、「[相互関連(サンサルガ)のような]関係は、結果から推理される[だけの]ものであって、それはどのような実的なかたちももっていない。それゆえ[個々の単語の意味とは別に文の意味としての相互関連といった]そのようなものは、絶対的に非存在なものであると、他の先生方は言う」(詩節四六)というこの詩節によって、個別性のうちに安住した、各単語の意味が、そのまま文の意味である、と定義されることになる。

4.7 (00316(P): “padam aadyam”, “pRthak sarvaM padaM saakaaGkSam” ity asmin tu pakSadvaye saMsRSTa eva prathamataaraM prakramyate vaakyaaarthaH /yathaa niruupayiSyati --- “teSaaM tu kRtsnaH^vaakyaaarthaH pratibhedaM samaapyate”(v.18.) tathaa --- “puurvair arthair anugataH^yathaa^arthaatmaa paraH paraH / saMsarga eva prakraantas tathaa^aadyeSv (tathaa^anyeSv) arthavastuSu //”iti(v.411)) 一方、(7) 「文とは最初の単語である」、(8) 「文とは、[他のそれぞれに対する]期待をそれぞれに有する単語のすべてである」というこの二つの主張においては、「混じり合ったもの」(saMsRSTa)こそが、最初に文の意味として表される。たとえば、次のように説明するであろう。「しかし彼らによれば、文の意味の全体(kRtsnaH^vaakyaaarthaH)は、その部分(単語)ごとに完結されている」(詩節一八)。また「[「文を構成する各単語によって表される各意味の相互関連が文の意味である」という立場(abhihitaanvayapakSa)では、] 先行する各[単語の]意味に随伴されて、後続する各[単語の]意味そのものが[、相互関連としての文の意味として]ある。同様に、[「文を構成する各単語が、相互に関連付けられた一個の意味を表すとき、文の意味がある」という立場(anvitaabhidhaanapakSa)では、]他ならぬ「混じり合ったもの」が、最初に表されるものとして、それとは別の[各単語の]意味であるもののうちに[文の意味として]存在している」(詩節四一五)、と。

4.8 (00321(P): “abhidheyaH padasya^arthaH vaakyasya^arthaH prayojanam”(v.113) ity anena prayojanaM vaakyaaarthatvena pradarzitam / tat keSaaJcin mate sarvalakSaNasaadhaaraNam iti na prayojanaM vaakyaaarthaH vaakyalakSaNeSu pRthag vibhajyate /) 「直接的に表示される対象(abhidheya)が、単語の意味(padasya^arthaH)であり、文の意味(vaakyasya^arthaH)は、発話意図・目的(プラヨージャナ)である」(詩節一一三)というこの詩節によって、「発話意図・目的」(プラヨージャナ)が文の意味として示されている。しかし、ある者たちの考えにおいては、それ(発話意図・目的)は、上述のすべての文の定義に共通するものである、したがって「発話意図・目的」は文の意味として、別個に文の定義のひとつとして数え入れられることはない。

4.9 (00323(P): tad evaM pratibhaa, saMsargaH, saMsargavazaan niraakaaGkSaH vizeSaavasthitaH padaartha eva, saMsRSTa eva^arthaH, kriyaa, prayojanaM ceti SaD vaakyaaartha iha^upadarzitaH /) 以上のように、(a) 直観(プラティバー)、(b)

相互連関（サンサルガ）、（c）相互連関の力によって「様々な限定を受けてそれ以上の限定をもはや何一つ」期待することなしに個別性のうちに安住している単語の意味、（d）混じり合った意味、（e）行為、（f）発話意図・目的、以上の六種の文の意味がここで示された。

4.10 (00325(P): saMsarge, saMsargavazaad vizeSaavasthite padaarthe ca vaakyaaarthe^abhihitaanvayaH / saMsRSTe, kriyaayaaM ca^anvitaabhidhaanam / pratibhaayaaM tv ekarasaa^eva pratipattir iti na tatra kaacid abhihitaanvayaanvitaabhidhaanacarcaa / prayojane tv abhihitaanvaya eva /) (b) 相互連関（サンサルガ）と、（c）相互連関の力によって「様々な限定を受けてそれ以上の限定をもはや何一つ」期待することなしに個別性のうちに安住している単語の意味とが、文の意味とされるとき、「文を構成する各単語によって表される各意味の相互連関が文の意味である」という立場(abhihitaanvayapakSa)が成立する。一方、（d）混じり合った意味と、（e）行為とが、文の意味とされるとき、「文を構成する各単語が、相互に関連付けられた一個の意味を表すとき、文の意味がある」という立場(anvitaabhidhaanapakSa)が成立する。しかしながら、（a）直観（プラティパー）が、文の意味とされるときには、[文についての]単一の(ekarasa)認識が成立する。したがって、その場合には[単語の自立的な存在性を認めることはないから]上のいずれの立場も成立することはない。しかし、（f）発話意図・目的(プラヨージャナ)が文の意味とされるときには、前者の「文を構成する各単語によって表される各意味の相互連関が文の意味である」という立場(abhihitaanvayapakSa)だけが成立する。

4.11 (00328(P): vidhiniyogabhaavanaasaMjJaas tu vaakyaaartha na niruupitaa, yasmaad bhaavanaakriyayaH paryaayataa praayazaH lakSyate /) しかしながら「ミーマーンサー学派が認める」「儀軌」（ヴィディ）(vidhi) とか「絶対的促進者」（ニヨーガ）(niyoga) とか「生成力」（バーヴァナー）(bhaavanaa) と呼ばれるものが、文の意味として説明されることはない。なぜなら「生成力」（バーヴァナー）と行為（クリヤー）とは同義語として一般に定義されているから。

4.12 (00406(P): tattadanaadivaakyaaarthavikalpaahitavaasanaaprabodhajanmaa, kramavadbhir iva^akramair bahiiruupatayaa^adhyastaiH padaarthaiz citriikRta iva, vikalpavizeSa.ullikhyamaana aakaaraH, bahiiruupatayaa^adhyastaH, nirvibhaaga eva, zaakyaanaaM vaakyaaartha iti praayazaH pratibhaasa.udara eva^asau mantavyaH /) それぞれ無始以来の文の意味についての概念的な思考によって蓄積された潜在的な印象の覚醒による生起をもつ、あたかも分節的順序（クラマ）をもつものであるかのごとくではあるが実際には分節的順序（クラマ）をもたず外界の存在物としてのかたちをもつものとして（誤って）想定されている各単語の意味（パダ・アルタ）によって修飾されているかのごとき、特定の概念的思考のうちに具体的なかたちをとって現れている形象(aakaara)が、外界の存在事物としてのかたちをもつものとして（誤って）想定されるのであり、それは部分をもたないものに他ならない、これが仏教徒(zaakya)にとっての「文の意味」とであると言われるが、一般的に言ってこれは内的な「観念の」顕現に他ならないと考えられるべきである。

4.13 (00409(P): vaakyam api, tattadanaadivaakyavikalpaahitavaasanaaprabodhajanma, kramavadbhir iva^akramaiH padaiz citriikRta iva, bahiiruupatayaa^adhyasyamaanaH, viziSTavikalpa.ullikhyamaana aakaaravizeSa eva, bahiiruupatayaa^adhyasta iti praayazaH buddhyanusaMhRtir ity asya sodaram eva^iti na tanmataanusaaNa vaakyavaakyaaarthayor

iha^asaMgrrahaH veditavyaH / 文もまた、それぞれ無始以来の文についての概念的な思考によって蓄積された潜在的な印象の覚醒による生起をもつ、あたかも分節的順序(クラマ)をもつものであるかのごとくではあるが実際には分節的順序(クラマ)をもたない各単語によって修飾されているかのごときものであり、外的なものとしてのかたちをもつものとして(誤って)想定されているものであり、特定の概念的思考のうちに具体的なかたちをとって現れてくる特定の形象に他ならないのである。したがって、一般的に言ってそれは、[上述の文の定義としてあげられたものの内で、] (6) 知識による単一化(buddhyanusaMhRti)といわれたこれと、母胎を同じくするものに他ならない。したがって、この考えに従うことによって、文と文の意味とがここではまとめられていないと、知られるべきではない。

4.14 (00413(P): naiyaayikaadiinaaM tu puurvapuurvavarNasmRtisacivaH^antyaH varNaH nazyadavasthaaanubhavaviSayiikriyamaaNaH padaM yathaa tathaa^eva puurvapuurvapadasmRtisacivam antyam eva padaM nazyadavasthaaanubhavaviSayiikriyamaaNaM *vaakyam* iti praayazaH saMghaatapakSa eva^antarbhavati / tathaa puurvapuurvapadaarthasmaraNasacivena^antylene padena^upajanyamaanaa pratiitir *vaakyaartha* iti praayazaH saMsargapakSa eva^antarbhaava iti na tadasaMgrraheNa^avyaaptir atra vaktavyaa / 一方、ニヤーヤ学派などが主張するところの文についての考え---単語(パダ)とは、先行する各字音(音素)についての想起を伴っている最後の字音(音素)であって、消えつつある状態において直接的な経験(知覚)の対象となっているものである。それとまさに同様に、文とは、先行する各単語についての想起を伴っているまさに最後の単語であって、消えつつある状態において直接的な経験(知覚)の対象となっているものである。この考えは、一般的に言って、[先に言われた]「文とは、語の集合体である」という主張(saMghaatapakSa)の内に含まれるものである。また、先行する各単語の意味についての想起を伴っている最後の単語によって生み出される理解が、文の意味であるという、この考えは、一般的に言って、外ならぬ「連関(サンサルガ)が文の意味である」という主張(saMsargapakSa)のうちに含まれる。したがって、それが取り込まれていないからこの定義は不十分な定義(avyaapti)であると、ここで言われるべきではない。

4.15 (00419(P): atha^atra^anavayava eva^ekasmin sphoTaatamake *vaakye*, pratibhaalakSaNe ca *vaakyaarthe*, *vaakyaavaakyaarthayor* adhyaasaruupaH saMbandhaH / yad vakSyati --- “*vaakyavRttasya vaakyaarthe vRttiH*” (v.262.) ityaadi / さてここで、文が、部分をもたず単一でスポーツを本質とするものであり、文の意味が、直観(プラティパー)を特徴とすると言うならば、文と文の意味との間には、仮託(アディヤーサ)(adhyaaasa)という関係(saMbandha)があることになる。次のように後に言うであろう。「[仮託(アディヤーサ)とは、]「文」となったものの「文の意味」に対する作用である」云々と。

4.16 (00421(P): avaziSTeSu pakSeSu vaacyavaacalakSaNaH yogyataakhya eva zabdaarthayoH saMbandhaH miimaaMsakadRSTyaa / zaakyadarzanaanusaareNa tu vijJaanavaadanayena bauddhe zabdaarthe sarvatra kaaryakaaraNabhaava eva / *vaakyaarthavaade* tu tatra saMketalakSaNaH^asau boddhavyaH / naiyaayikaanusaareNa ca saMketalakSaNa eva^asav ity evam atra *vaakyaavaakyaarthasaMbandhaanaaM* saMkSepataH svaruupaM boddhavyam / saMbandheSu madhyaad adhyaasam eva darzayiSyati / padakaaNDe tu sarvaan abhidhaasyati / もう一方の[文の単一不可分性を

認めない]諸主張においては、語と語の意味＝対象との間には、実に適合性（ヨーギッター）(yogyataa) と呼ばれる、「表示対象」－「表示者」関係の特徴とする関係があると、ミーマーンサー学派の者たちの見解に従って言われる。一方、釈迦の見解に従う唯識論者の考え方に従っては、知識内にある語の意味には常に「結果と原因の関係」(kaaryakaaraNabhaava)だけがあると言われる。一方、文の意味[の単一性]を認める立場では、そこにあるそれ（関係）は、言語協約（サンケート）(saMketa) を特徴とするものであると知られるべきである。また、ニヤーヤ学派の考え方に従うことによって、それは言語協約を特徴とするものに他ならない。以上のように、文と文の意味と両者の関係の本性が、簡単に理解されるべきである。各種の関係の内から、「仮託」だけを[本巻では]後に示すであろう。一方、第三巻『単語論』(PadakaaNDa)においては、それらの[関係の]すべてを説明するであろう。

4.17 (00426(P):tatra vaiyaakaraNasya^akhaNDa eva^ekaH^anavayavaH zabdaH sphoTalakSaNaH vaakyam, pratibhaa^eva vaakyaarthaH, adhyaasaz ca saMbandha iti padavaadipakSaduuSaNaparaH paraM TiikaakaaraH vyavasthaapayati^ity asya kaaNDasya saMkSepaH //1,2//) さてそこで、文法学派にとっては、文とは、不可分なものに他ならず、単一であり、部分をもたないもの（全体）であり、スポータを特徴とする語（シャブダ）である。文の意味は、直観（プラティバー）である。そして、「仮託」（アディヤーサ）が両者の関係である。以上のことを、単語論者(パダ・ヴァーディン)の主張を斥けることを第一の目的として、[『マハー・バーシュヤ』の]注釈の作者[であるバルトリハリ]が、主として確定する。以上が、本巻の要約である。

4.18 (VP2.007 / yahtaa^eka eva sarvaarthaprakaazaH pravibhajyate / dRzyabhedaanukaareNa [dRzya.bheda.anukaara] vaakyaarthaavagamas tathaa //) あらゆるものを対象とする認識は、[知識としては]単一であっても、認識される対象の区別に従うことによって区分される。文と文の意味についても、同様に、[本来単一不可分である文や文の意味が区分される]と理解される。(詩節七)

4.19 00810(P): citra.jJaanaM sarva.aakaaram ekam eva / pravibhaagas tv asya dRzya.bheda.samaazrayeNa kriyate / niila.piita.aady.aneka.aakaaram eva vijJaanam upajaatam iti / vastu.sthityaa tatra jJaana aakaara.bhedo na.asti / tathaa vaakya.vaakyaarthayoH svaruupaM boddhavyam /

4.20 00812(P): <vaakyaartha.anugamas tathaa> ity anena hi naanaa.vaakyaarthayor [→ vaakya.vaakyaarthayor] akhaNDatvaM paanakarasa mayuura.aNDa.rasa.citra.ruupa.narasiMha.gavaya.citra.jJaanavat samaanam eva.ucyate / yathaa vaakyaM nirvibhaagaM sphoTa.lakSaNaM vaacakaM tathaa vaakyaartho 'pi tathaavidha eva.ity anayor eka.yogakSematvam uktam //7//

4.21 00903(P): pade hi yathaa prakRti.pratyaya.vibhaago 'satya eva baala.vyutpaadanaaya kriyate, tathaa vaakye vaakyaartha.pratipaadanaaya.apoddhaaraH padaanaam upavarNyata iti boddhavyam //10//

4.22 00918(P): atha vaakyaarthasya.api tathaa.eva nirvibhaagatvaM pratipaadayitum aaha

--

4.23 (199.23-24:VP2.016 / azaabdaH yadi *vaakyaaarthaH* padaarthaH^api tathaa bhavet / evaM sati ca saMbandhaH zabdasya^arthena [artha] hiiyate //) もし文の意味が、語によるものではないならば、単語の意味もまた同様であるということになるだろう。そしてもしそうであるならば、語は意味との関係を失う。(詩節一六)

4.24 (200.18-19:VP2.018 / teSaam tu kRtsnaH *vaakyaaarthaH* pratibhedaM samaapyate / vyaktopavyaJjanaa [vyakta.upavyaJjana] siddhir arthasya pratipattRSu //) しかし彼らによれば、完全な文の意味がその部分ごとに完結されている。個別的に発せられた[単語のそれぞれが、文の意味の]開頭者となる時に、意味の完成(完全な理解)が聞き手においてある。(詩節一八)

4.25 (200.20-23: teSaam evam upagRhiitasarvavizeSa ekasminn arthe bahuzabdaan abhyupagacchataam avikalaH kRtsno *vaakyaaarthaH* pratipadaM prativarNaM vaa samaapyate / tad etat pakSaantaraiH saha darzanaM vicaarayiSyate / evaM vyakteSu hy upavyaJjaneSv arthaH pratipattRSu prasiddhiM labhate, na tu sannidhaanamaatraad anabhivyakta.upavyaJjana iti //18//) 「彼ら」、すなわちこのように[一つの文を構成する]多くの単語が、すべての個別的な意味をその内に含み込んだ一個の意味において存在することを、認める者たち、こういう者たちによれば、無欠で「完全な文の意味」が、[「その部分ごとに」、すなわち]単語ごとにあるいは音素ごとに「完結されている」のである。そこでそのような見解が、他の諸主張とともに後に考察されるであろう。このように「個別的に発せられた」それぞれが、[文の意味の]開頭者となる時に、[文の]意味は、完成を獲得するのである。しかし、単に[単語が]近接して並んでいるだけでは、個別的に発せられた[単語のそれぞれが、文の意味の]開頭者となることはないので、そのようなことはないのである。

4.26 (200.24-25: nirbhaagaikazabdaabhidheyaM tv ekaM *vaakyaaarthaM* pratipannaaH svamatam upapaadayanto nidarzayanti / しかし、無部分の単一の語によって表示されるべきものが、一個の文の意味であると理解している者たちは、自分たちの考えを明らかにしつつ、次のように表明する。

4.27 VP II. 43cd and VRtti: 211.6 and 211.9-11: jaativat samudaaye 'pi saMkhyaaavat kalpyate paraiH // 43cd // athaaparaH kalpaH -- yathaikasyaa viMzatyaaadikaayaaH saMkhyaaayaaH pratyadhikaraNaM tannimittapratyayahetutvaM tathaa *vaakyaaarthasya* pratipadaM pratyaaayatvenaavasthaanam iti //

4.28 (209.6-13: vicitraa hi bahudhaa pratipattRRNaaM pratipattiH / tadyathaa --- <zriitriyaMzchandaH^adhiite>(P.5.2.84) iti *vaakyaaarthe* padavacanaM chandasaH vaa zrotrabhaavaH ghezca pratyayaH, zrotraabhyaaM kRtaM karmeti vaa (M.Bhaa on P.5.2.84)/ tathaa ikaH vaktavyaH aakhanikaH, ikavakaH vaktavyaH aakhanikavakaH (P.3.3.125) paatre samitaadayaz ca (P.2.1.48) vaa aakhanikavaka iti paThyate / tathaa uSTragoyugaa iva SaGgavaadiSu pratyayatvena^anyathaa ca^anvaakhyaanaM kriyate / te yadi vibhaktaaH kadaacid apy anibaddhaa vaakye / vidyante saMsRSTaaH --- raajapuruSaH plakSanyagrodhau / vibhaktaaH --- raajJaH puruSaH, plakSazca nyagrodhaz ceti /)

4.29 (209.20-21:VP2.040 / saH^ayam ity abhisaMbandhaH buddhyaa [buddhi] prakramyate yadaa / *vaakyaaarthasya* tadaa^ekaH^api varNaH pratyayakaH kva cit //)

4.30 (209.22-209.26: na^avazyaM vicchinnapadarupavigraha eva zabdaH paurvaaparyayuktam anugata vibhaagam eva^arthaM pratyayayati / yadaa hi *vaakyaaarthasya*ivegyaNaH sthaane bhavatiityevamader buddhiviSayaH saMprasaaraNam iti vaadiiti vaa saH^ayam ity abhisaMbandhaH kriyate, athaH(?) yathaivegyaNa iti, anena paurvaaparyaanupaatinii pratipattirbhavati / evam apurvaaparyayaa bhami ity ekavarNayaa tasyaarthasya saMjJayaa pratyastamitapurvaaparyaH sa evaarthaatmaa pratiyate /)

4.31 (210.18-19:VP2.042 / saMbandhe [saMbandha]^sati yat tv anyad aadhikyam upajaayate [upa^jan] / *vaakyaaartham* eva taM praahur anekapadasaMzrayam //)

4.32 (210.20-211.3: yat tu padaantareNa sambandhe viiraH puruSa iti vizeSaNavizeSyatvaat saamaanaadhikaraNyaM jaatiguNavizeSayor ekaarthasamavaaya-pratipattipuurvakam artheSv aadhikyaM dRzyate *vaakyaaartha* evaasau / na hi tasya^antaH padaM zabdasamskaare nimittatvena vyaapaara aazriyate / yas tv ekapadaviSayaH vyatirekah karmaadivad baahyanimitta.upajanitaH raajJaH puruSa iti saH^antaH praatipadikaany eva vibhaktiyogavizeSayoge niyamayati / sa ca^ayaM *vaakyapadayor* aadhikyayor bhedaH bhaaSyaa eva^upavyaakhyaataH / ataz ca tatrabhavaan aaha ---"yathaa^ekapadagataH praatipadike^antaH padaM saMskaarahetur arthaH vacanaM pratitvaM bhavati tathaikapadagataH padasamskaarahetur eva vibhaktiyogaM pratyahetur bhavati graamaH graamaH ramaNiiya iti / anekapadasaMzrayas tu *vaakyaaarthaH* pratinighaataadivavasthaarthahetur aakhyaayate" iti //42//

4.33 (211.7-11: tad yathaa jaativat sattaavaan ekaadhikaraNayoge^api pratyadhikaraNam anyuunakaaryaa (yaa?) tathaayam ekeSaaM *vaakyaaartha* aavRtti (aakRti?) nyuunataasamatikrameNa pratipadam eva^avikalaH samaapyate / athaaparaH kalpaH --- yathaikasyaa viMzatyaaadikaayaaH saMkhyaaayaaH patyadhikaraNaM tannimittapratyayaheturvaM tathaa *vaakyaaarthasya* pratipadam pratyayyatvena^avasthaanam iti //43//

4.34 VP2.055 / anarthakaani apaayatvaat padaarthena [padaartha]^arthavanti vaa / krameNa [krama]^uccaritaani aahur *vaakyaaarthaM* bhinnalakSaNam //)

4.35 (214.11-12: apare tu manyante --- *vaakyaaartha* ekaH, tena ca^atyantam anarthakaany eva padaani, yathaiva ca padaarthena varNaaH /

4.36 (214.13-14:VP2.060 / prativarNam asaMvedyaH padaarthapratyayaH yathaa / padeSv [pada] evam asaMvedyaM *vaakyaaarthasya* niruupaNam //)

4.37 (214.15-18: yathaiva varNe varNe padaarthapratyayaH na^utpadyate ity arthaH na vibhajyate tathaiva pade pade *vaakyaaarthasya*^asannidhaanaat pratipadam tadviSayaH^api pratyayaH na niruupayituM zakyate / arthanirbhaasaa hi prakaazasvaruupatvaad aatmaniruupeNaa eva / atazce baaDham arthaanaam api saMvedyatvaM na vyatikraamanti //60//

4.38 (214.19-20: yasya tu *vaakyaaarthena* padaani pratibhedam arthavanti tasya padaarthena varNaaH pratibhedam arthavantaH praapnuvanti ---

4.39 (214.21-22:VP2.061 / *vaakyaaarthaH* saMnivizate padeSu [pada] sahavRttiSu / yathaa tathaa^eva varNeSu [varNa] padaarthaH sahavRttiSu //)

4.40 (214.23-24: yadi padeSu sahavRttiSv api sanniviSTaH *vaakyaaarthaH* pratipadaM niviSTa iti kalpyate tathaiva sahavRttiSu varNeSu kaamaM sanniviSTaH padaarthaH kalpayitavyaH //61//

4.41 (218.5-6:VP2.071 / viziSTaa^eva kriyaa yena *vaakyaaarthaH* parikalpyate [pari\kLp] / dravyaabhaave [dravya.abhaava] pratinidhau [pratinidhi] tasya tat syaat kriyaaantaram //)

4.42 (218.7-11: yasya tu puurvoktena dharmeNa kriyaavizeSaH zaktidvayasaMsargabhinna ekaH *vaakyaaarthaH* tasya^avibhaktazabdaarthatvaad vizeSaantaraavagame tasminn arthaatmanyavikalpena vRtte vizeSaantara.upaadaane putriiyati prakriyaantaraM muNDayati vaa pratipaadyamaana.uddezyavibhaagaM tat pratinihitaM syaat, aniSTaz ca kriyaayaaH pratinidhir iti vibhaagapakSa eva nyaayyaH /

4.43 (218.22-219.3: iha vanaat pika aaniiyataaM varaaGgii jarjaraa vRSalaaya diiyataam iti bahuunaam padaanaam artheSv aahitapratyayaaH pratipattaaraH yad eva pikaadyavijJataartharuupaM padaM tanmaatram eva jijJaasamaanaa vicchedena pRcchanti kaH^ayaM pikaH naama yaH vanaadaaneyaH kaa ca varaaGgii naama yaa vRSalaaya daatavyaa^iti / na ca vRkSavRSabhakaaNDiiraadiSu prasiddhabhedeSu RkSaRSabha aaNDiiraadyarthe nirjJaate varNamaatraviSayaH vakaaraarthe kakaaraarthe vaa praznaH dRzyate tasmaad avibhaagadharmaat pracyutena vibhaage *vaakyaaarthena* vyavasthitena bhavitavyam //72//

4.44 (219.19-26: yas tu zabdaruupasaamarthyaat sannihitaH^api zabdavyaapaareNa ^apraaptasannidhaanaH zukladir guNaH zuklaadiinaaM zabdaanaam upaadaanam antareNa vastutaH sann api zabdaarthatvena^apratiiitah zuklaadizabdasannidhaanena vyaapaaravaan pratiyate sa yatnapraapitasambandhaH zruti.arthavilakSaNaH *vaakyaaartha* eva / tatra payasaa bhuGkte devadattaH zRtena^iti *vaakyapraapitasya* prayogaviSayasya zrapaNasya^asambhave zrutipraapitattm upasecanaM nivartate / zrapaNaanugrahaaya vaa^upasecanatvena yad api prasiddhaM loke ... tena zatena zrapaNasya^anugrahaH kathaM syaad iti na bhujiyate, zruti*vaakyayor* vikalpaasambhavena zruti.artha eva kriyate na *vaakyaaarthaH* (73, 74//)

4.45 (220.9-10:VP2.076 / *vaakyaanaaM* samudaayaz ca ya ekaarthaprasiddhaye [ekaarthaprasiddhi] / saakaaGkSaavayavas tatra *vaakyaaarthaH*^api na vidyate //)

4.46 VP2.088 / avibhakte [avibhakta]^api *vaakyaaarthe* [vaakyaaartha] zaktibhedaad apoddhRte [apoddhRta] / *vaakyaantaravibhaagena* [vaakyaantaravibhaaga] yathaa^uktaM na virudhyate //

4.47 VP2.116 / avikalpitavaakyaarthe [avikalpita.vaakya.artha] vikalpaa bhaavanaazrayaaH / atra^adhikaraNe [adhikaraNa] vaadaaH puurveSaaM bahudhaa mataaH //

4.48 VP2.143 / vicchedagrahaNe [viccheda.grahaNa]^arthaanaaM pratibhaa^anyaa^eva jaayate / *vaakyaaartha* iti taam aahuH padaarthair upapaaditaam //)

4.49 (229.9-16: kazcid dhi kaaJcic^zaktiM pazyati / sa yathaadarzanaM tad vyaacaSThe / padaarthe *vaakyaaarthe* vaa tulyaruupam api padaM kvacid eva kayaacic^zaktyaanugrahaM karoti / tataz ca *vaakyaat* padasya^apoddhaare kriyamaaNe saa zaktir nimittatvena^aazriiyate / niyataakaalaavadhayaH^vaa zaktivizeSaaH pratikaalaM kecic^zabdavizeSeNa^upaadiiyamaanaaH saadhutve nimittatvena^avatiSThante / te ca pratikaalaM tathaa^eva^anvaakhyaatRbhiH ziSTaiH parigRhyante paryaayeNa samuccitaa virodhinya ekasya^aparimaaNaaH zaktayaH ruupabhedaM darzayanti / tatra ca viruddhair nimittair upalakSaNaM kiMzuka(dii?)naam iva kaalabhede zaktau kasyaaJcic^zabdasya vyavasthaayaaM na virudhyate //173//

4.50 (229.19-25: yathaa^eva hi (gavi) gamikriyaa jaatyantaraikaarthasamavaayiniibhyaH ^gamikriyaabhyaH^atyantabhinnaa tulyaruupatvaavidhau tv antareNa^eva gamim abhidhiiyamaanaa gauritizabdavyutpattikarmaNi nimittatvena^aazriiyate tathaiva girati garjati gadati ityevamaadayaH saadhaaraNaaH saamaanyazabdanibandhanaaH kriyaavizeSaas tair aacaaryair gozabdavyutpattikriyaayaaM parigRhiitaaH / vyutpattivaakyasthebhyaH vyaa(hyaa?)khyaatapadebhyaH saruupaana varNaanupaadaaya tatsaGghaata iva(pa?)thipadam anvaakhyaayate yaavad dhaatu.arthamaatraa vaa sanaadimaatraa vaa yaajyaanuvaakyaas vRkSu va *vaakyaaartha*anugraahiNii labhyate /

4.51 (230.8-17: apare tv aacaaryaa aukthikyaadayaH gauH kasmaat gaur ity eva gaur iti nirvacanam aahuH / gozabdavaacyaH gozabdena nityasambaddhaH / tasmaad gaur iti *vaakyaaarthe* padaarthamaatraazaktivizeSasannivezaarthaM viziSTaM vakSyaamiiti vyutpattir aarabhyate / ajaazvaH vaa pRthuu(da?)kaM vaa padiiyaM bhRtyabharaNiiya ityevamaadiSu / bhaaSye tu dvaav api pakSaav ekasminn eva kaaryartham aazritau / kazcid dhi paramaartham eva nizcitya zaastravyavahaaraH vyavatiSThate / kazcit saadhu pratipaadana.upaayaM zaastrasamayam eva^apekSate / zaastragataH vyavahaaras tatra^aparamaarthaaH dhaatupratyayaadibhedadarzanaM ca / ekatvaadivRttibhedas tu tadaa yaH yathaiva dhaaturuupaaNi tathaabhyupagamyate (abhyupagacchati?) / vyavahaarapakSe tu dhaatavaH^api kaizcid varNaaz ca dhaatu.antarebhyaH varNaantarebhyaz ca prakRtipratyayaadyanugamena vyutpaadyante //175//

4.52 (247.5-12: yadi vRttizabdaad arthaH^avibhaagena^aazriiyate tarhi avyayiiibhaava-tatpuruSabahuvriihidvandvaanaaM puurvapadaartha.uttarapadaartha.anyapadaartha.ubhayapadaarthapradhaanyan na^upapadyate ity etasmin paryanuyoge pratividhiiyate --- samudaayaarthaad anekazakteH zaktyapoddhaareNa^abudhaanaaM kaaryartham idaM pratipaadakam aarabhyate / tatra zabdaantatve^api nityayoH puurvaaparayor vRttivaakyayor abudhaa *vaakyapuuvikaam* eva vRttiM sukhena pratipadyate / tena hi *vaakyaruupavikaararuupam* iva samaasaruuPaM manyante / *vaakyaaarthayoni*Jca saamarthyaM vyavasyanti / tattatpratipattibhaavanaa^anurodhena^aacaaryas tathaa vyavaharati / tathaa ca^aaha / "evaM tarhi bhavati vai kiJcid aacaaryaaH kaaryabuddhiM kRtvaa paThanti"(M.Bhaa. I. p.404, 1.3--4.)//226//

4.53 (253.27-28:VP2.246 / viruddhaM ca^abhisaMbandham udaahaaryaadibhiH kRtam /
vaakye [vaakya] samaapte [samaapta] *vaakyartham* anyathaa pratipadyate [prati\pad] //)

4.54 (254.14-15:VP2.248 / atha^asaMsRSTa eva^arthaH padeSu [pada] samavasthitaH
[samava\sthaa] / *vaakyarthasya*^abhyupaayaH^asaav ekasya pratipaadane [pratipaadana]
//)

4.55 (254.16-17: puurvaM padeSv asaMsRSTeSu ... traapi sambandhaH / tadvaa
buddhyantaraM *vaakyarthapravibhaagapratipattypaayamaatram* abhyupagantavyam
//248//

4.56 (258.9-10:VP2.262 / arthasvaruupe [artha.svaruupa] zabdaanaaM svaruupaad vRttim
icchataH [iS] / *vaakyaruupasya vaakyarthe* [vaakya.artha] vRttir anyaanapekSayaa //)

4.57 (258.11-15: svaruupapadaarthavaadinas tu kecid aacaaryaa manyante --- yathaa^eva
padaani svaruupanibandhanaani^iha^artham anubhavanti tathaa *vaakyaany* api
svaruupanibandhanaani *vaakyarthena* vibhakta.uddezena sambadhyante / padaarthaanaaM
saMsparzamaatraapi na vidyate / anyeSaaM tv aacaaryaaNaaM darzanaM sattvabhuteSv
eva^artheSu svaruupanibandhanaaH zabdaa nimittaanapekSaaH sannipatanti / ... nyete
ca^avyutpatipakSa eva / vyutpattipakse tu nimittaany eva prayojakaani //262//

4.58 (270.5-11: etaabhyaaM zlokaabhyaaM kevalaM pratijJayaa vastumaatram upanyastam
/ uttareSu tu zlokeSu prapaJcaH^asya^udaaharaNaadir vakSyate / kriyaapradhaane
saadhane vaa zabda upaadiiyamaane nimittabhuutasya^arthasya yatra^upayogas tatra
tatpraadhaanyam anupakaarakaM kvacid ity etat prativivakSyate / kvacic ca prayojanavat
sannihitataarthasya kriyaayaam aGgabhaavena pratipattaavakaaraNam ity udaahariSyate /
anupaattam api padena kvacid vaakye vaa vyakti ... *vaakyarthe* sannivezaM karoti^ity etad
api nidarzayiSyate / praadhaanyaM kvacic^zruyate / tena^aazruuyamaaNam anyaartha
upalakSaNam eveti / etad api prativakSyate //304-305//

4.59 (272.21-273.9: *vaakyam* eva hi kiJcit kriyaavizeSanibandhanaM yatas tulyaayaam api
zrutau zabdasya ca^arthasya ca pravibhaagas tathaa vyavasthaapyate / tadyathaa
vaTavRkSaH rauti, vaTavRkSaH svaaduphala aaruhyataam, kezaan vapati, kezaan
namasyati^iti *vaakyartha* eva zabdaarthayoH pravibhaagahetuH / tathaa prakaraNam
azabdaM zabdaarthavyavasthaaM prakalpayati / tadyathaa --- raakSasaH dasyuH bhadraM
duHkham iti (?) bhojane mRgayaayaaM vaatisaindhavamaanavacchaayopagamane
dharmaadaav ayoge vaTavRkSaH pazyati (?) / arthas tu zabdavaan / tadyathaa --- aJjalinaa
juhoti, aJjalinaa suuryam upatiSThate / aucityaad api vyavasthaa / tadyathaa --- raakSasaH
dasyur bhavati / viparyayeNa nindaa prazaMsaa vaa gamyate / dezaad api vyavasthaa /
tadyathaa --- madhuraayaaH praaciinaad udiiciinaan nagaraad aagacchaami^ity ukte
nagaravizeSaH gamyate paaTliputraad iti / tathaa --- poTaapoTaala niti / kaalaat
ravalvapi vyavasthaa / tadyathaa jaagRhi jaagRhi vaa dvaaram / zle c
ca^udaaharaNamaatram etat sarvathaa na padamaatraac^zakyaM padaruupaM
padaartharuupaM vaa prakalpayitum iti //314//

4.60 (278.12-16: smRtiSu zaastraantareSu ... nedaM kRtvaa narakagamanam idaM kRtvaa
svargiiyam aapnoti^iti / tatra ca^enaM yas tuNDaani (?) payaaMsi bhakSayati tatra

ca^enaM avacuuDaa apsarasa upatiSThanti^iti / yady api satyam eva^etat na tv etasya
nimittaantaraad asambhavaH^api nirjJaanaM vihitaH pratiSiddhaM vaa^anyaM kriyate (?) /
pravRttinivRttipara eva vihitaH^apy upadezaH / teSu saa^eva *vaakyarthavyavasthaa*
//324//

4.61 (278.17-18:VP2.325 / ruupaM sarvapadaarthaanaaM *vaakyarthopanibandhanam*
[vaakya.artha.upanibandhana] / saapekSaa ye tu *vaakyarthaaH* padaarthair eva te samaaH
//)

4.62 (278.19-24: yady api kvacid arthazrutimaatraanvayavyatirekaabhyaaM
vyavahaaraanuvaadinii buddhyaa pravikalpitabhedaa vibhajya vibhajya^anvaakhyaayate
tathaapi^indriyaaNaam iva zariira.upanibandhanaarthakriyaavaakya.upanibandhanaa^eva
sarvapadaarthaanaam arthavyavasthaa / ye tu prakaraNavaakyaM tatra *vaakyarthaaH* te
yathaa^eva padaarthaaH saamaanyena^avyavasthita vyavahaareNa parityajya^eva
saamaanyaavasthaa ... pratipadyante yas tu yadavasthaa eva tu teSaam
avayavavaakyaanaam *arthaaH* vizeSagatis tadvantam eva^avidyaamaanazabde^api (?)
//325//

4.63 (284.18-28: nanu yuktaM pratiSedhaH^anyarthatvaad apraaptyanumaanam
anarthakam / aatmaruupaprakalpaneSu kRtaarthavidhyantaram upajaayamaanaM
saamarthyaad vikalpam eva prakalpayet / tatra katham apraaptir anumiiyate / sarvathaa
na^asti^anumaanasya vyaavRttiH / kathaM na taavat pratiSedhaH kvacid api pravartata ity
abhyupagamyate / kintarhi svaabhaavikyaa nivRtter dyotakaH / sa khalu
nityaparatantratvaad asya^arthaH / taam anyasamavaayiniiM nivRttiM dyotayann
anumaanaM prakalpayati / yatra yatra ca pratiSedha itthaMbhuutas tatra tatra
saamaanyavizeSabhaavaH^anyadRSTavyabhicaaraH sahacaaripratiitivataH vidyate / sa
ca^anumaanaaya^alam / yathaa^agner dhuumaH pataGgadhuumakaa iti sambandhaat
sambandhasambandhaac ca^anumaanaM bhavati / saamaanye prayujyamaanaM vizeSe
kvacit prasuptaprasaGgam iva buddhyaa svabhaavanivRttam / *vaakyazeSeNa*
svaabhaavikena vaa *vaakyarthasya^avicchedena^avizeSe* praapyamaaNaM saty api
sambhave vidhau sannidhaanaanumaanattvaat tadviSaaM buddhiprasaGgam vyaavartayan
baadhaka ity ucyate //347//

4.64 (293.21-294.5: *vaakyadharmavicaaraaNaam* prasaGgaad idaM vicaaryate / iha
vRddyaadiSu pratyekaM *vaakyaparisamaaptir* uktaa / samaasaabhyastayoH samudaaye,
aTkupvaaGnum vyavaaye^api ity etasminn ubhayatra laukikaani ca darzanaani
sarvatra^upanyastaani / tatra^idaM vaktavyam / katham iyaM tridhaa^apy avirodhena
kalpanaa sambhavati / laukikena ca dRSTaantena pravibhaktaM katham atra saadharmyam,
vaakyaparisamaaptiz ca kiM zabdaparisamaaptir atha^arthaparisamaaptiH /
arthaparisamaaptau vaa kiM kRtsnaH *vaakyarthaaH* parisamaapta uta ekadezaH /
ekadezasamaaptiz ca kiM zabdeSv atha^artheSu /

4.65 (294.5-11: tatra^aadye na^ekaadhiSThaanasambandhavizeSaH (?) *vaakyarthaaH* /
tasya pratyekam artheSu zabdeSu vaa kiidRzii parisamaaptiH / atha saadhanaviziSTaa
kriyaa *vaakyarthaaH* saa katham ekasmin saadhane parisamaapyate / bhojayati kriyaa tu na
bhujizabdaH^api na samudaayaH na^avayavamaatre parisamaaptim utsahate gantum /
yathaa samudaaye *vaakyaparisamaaptaavayaveSu* virodhaat samudaayaabhaavaad

apraVRttiH / keSaaJcic^zabdaH nidarzyate, keSaaJcid arthaH / tathaahi pratyekaM
vaakyaantaraaNy avatiSThante iti keSaaJcid darzanam / keSaaJcit tu kriyaa viniyujyate,
gargaaH zataM daNDyantaam iti /

4.66 (300.12-13:VP2.395=391 / yeSaaM samastaH *vaakyaaarthaH* pratibhedaM samaapyate
/ teSaaM tadaaniiM bhinnasya kiM padaarthasya sattayaa [sattaa] //)

4.67 (300.14-16: ye *vaakyaaarthaM* samastaM vaakye naamapadeSu ca sadravysaadhanaM
parisamaaptam apunar uktaM manyante teSaam evambhuute pratipadam avasthite^arthe
kim avaziSTena^apareNa padaarthena vikalpitenaa //391//

4.68 (300.19-23: kecin manyante saamaanyena vyavasthitaani padaani
sannidhiyamaanaani yataH vizeSaM janayanti sa teSu pratyekaM parisamaapyate / tasmaat
padaarthakalpanayaa vinaa na *vaakyaaarthaH* vyavatiSThata ity asmin darzane idam ucyate /
yaH^asau purvaM nimittabhuutaH padaarthaH uttarapadaarthapraadurbhaave virodhiny
upajanyamaane sa nivarteta vaa saha vaa tena vyavatiSTheta //392//

4.69 (301.21-23: yeSaam apy arthavantaH varNaa *vaakyaaarthena* padaarthena ca
pratyekaM teSaam api samudaayasya tadarthayogaad ekatvaM samudaayaad
ekena^utpadyamaanena supaa vyaktam ity ekatvaantaraabhaavaat prativarNaM
vibhaktyutpattau nimittaM na bhavati //396//

4.70 (305.9-14: ye tu parikalpitapadasvarupee puurvabhaagaaparabhaagasya
^avidyamaana.uddezavibhaagasya viziSTakriyaabhidhaayinaH *vaakyasya^eva*
^arthavattaM manyante tatra^aaha --- akSaadiinaam astikriyaaruupamaatra-
nibandhanaanaaM *vaakyaantaraaNaaM* kaamaM prayoge vimarzaH^ayam upapadyetaa
ktvaa ... dva ... makSazabdaH vartata iti *vaakyaaarthaprakalp*ite tv apoddhaare
prakalpyamaane vicchedagrahaNena^arthena na^eva^anyaH sambhavati / teSaam atakSa,
aanirjJaayataaM dRzyataam iti *vaakyaad* apoddhaareNa nivartate saMzayaH //408//

4.71 (305.17-19: yathaa^eva prativarNam arthamaatraasaMsparze krameNa^abhyuccaye
satyapi samudaaya uccarite vRkSaader arthaH viziSTaH^avasiiyate tathaa padaanaam
aanarthakye^abhyupagamyamaane padasamudaaya uccarite viziSTasya *vaakyaaarthasya*
sampratyayaH bhaviSyati //409//

4.72 (307.7-8:VP2.419=415 / avibhaagaM tu zabdebhyaH kramavadbhyaH^apadakramam /
prakaazate tadanyeSaaM *vaakyaM vaakyaaartha* eva ca //)

4.73 (311.13-17: viprakRSTadezeSv api kadaacid gRhyamaaNeSu padaartheSu
vaakyaaartharuupaH sambandhaH^abhidhiyate / tad yathaa agnaye vaacam iirayan /
tatra^aakhyaanaadipratiSedhaH naanaavaakyatvaan na videzanaanaavaakyastham iti
kRtvaa naanaavaakyatvam iti kadaacit tv aazliSTaH^api gRhyamaaNaH
padaarthaanuparizliSTa eva pratiyate / tad yathaa asuraan pratyajayan sarvatra
lohitaadikatantebhyaH iti /(4.1.18)//431//

4.74 (312.3-8: tad etat samucitaviruddhaaviruddhazaktiSu sarvabhaavasthiteSu
vaakyaaartheSu vivakSitasya sarvasya bhaavaad upapadyate / athavaa sa na sattvaan

niraatmaka eva zabdaM prati zazaviSaaNaadivad vastvarthaH
 zabdaadhyaaropitasarvazaktis tu pratizabdaniyataabhir viziSTa
 zabdaparigrahaadibuddhibhir arthakalpanaakRtaH sambandhaH baahyatvena
 buddhiparikalpita eva vastusvaruupe pratyastastu teSu teSu *vaakyaavayaveSu*
padaavayaveSu ca nityasambandhaH vyavahaaraartham aazriiyate //433//

4.75 (313.7-8:VP2.441=437 / *vaakyaarthaH* yaH^abhisaMbandhaH na tasya^aatmaa
 [aatman] kva cit sthitaH / vyavahaare [vyavahaara] padaarthaanaaM tam aatmaanaM
 pracakSate //)

4.76 (313.18-20: sarvathaa pratipaadanaarthaM yadi samudaaye saGkhyaaavad atha^api
 zabdaantaraabhaavaan na kvacid avasthitaH *vaakyaarthaH* / tasya tu kevalapadaprayoge
 yaH vizeSaH nirdhaaritaH tena vizeSeNa^anumaanena sambandhaat saa pRthak zaktiH
 pavibhajyate //438//

4.77 (314.1-7: ekatvanityatvadarzinas tu manyante --- viziSTaa hi kriyaa yathaasambhavaM
 kaalasaadhanadravyapuruSa.upagrahaadibhir anugataa vaakyena^abhidhiyate / sa ca^ekaH
 zabdaH vyavahaaraaya pravibhakta.uddezyaH sarvavizeSaviziSTe
 parikalpitavizeSaNavizeSyabhede ekasminn arthe vartate / tasya zaktiir apoddhRtya
 vyaavahaarikaH vibhaagaH^anugamyate / tena *vaakyaarthas* tv ekaH
 samprasaaraNaadiprakaarayaa maatraaparimaaNayaa vibhaaga.uddezam antareNa
 pratyaaipyate / *vaakyaarthasya* hi samprasaaraNasaMjJaa vibhaaga.uddezena vinaa
 sambandhini vijJaayate //439,440//

[Vākyapadiya 第2章本文詩節における vākyaārtha の用例一覧]

VP2.007 / yahtaa^eka eva sarvaarthaprakaazaH pravibhajyate / dRzyabhedaanukaareNa
 [dRzya.bheda.anukaara] *vaakyaarthaavagamas* tathaa //) 7 あらゆるものを対象とする
 認識は、[知識としては]単一であっても、認識される対象の区別に従うことによっ
 て区分される。文と文の意味についても、同様に、[本来単一不可分である文や文
 の意味が区分される]と理解される。

VP2.016 / azaabdaH yadi *vaakyaarthaH* padaarthaH^api tathaa bhavet / evaM sati ca
 saMbandhaH zabdasya^arthena [artha] hiyate //) 1 6 もし文の意味が、語によるもの
 ではないならば、単語の意味もまた同様であるということになるだろう。そして
 もしそうであるならば、語は意味との関係を失う。

VP2.018 / teSaaM tu kRtsnaH *vaakyaarthaH* pratibhedaM samaapyate / vyaktopavyaJjanaa
 [vyakta.upavyaJjana] siddhir arthasya pratipattRSu //) 1 8 しかし彼らによれば、完全
 な文の意味がその部分ごとに完結されている。個別的に発せられた[単語のそれぞ
 れが、文の意味の]開頭者となる時に、意味の完成（完全な理解）が聞き手におい
 てある。

VP2.040 / saH^ayam ity abhisaMbandhaH buddhyaa [buddhi] prakramyate yadaa /
vaakyaarthasya tadaa^ekaH^api varNaH pratyayakaH kva cit //) 4 0 「それはこれで

ある」というかたちで[同一性の]関係が、知識によって存在発動させられる時には、場合によっては、たった一つの音素でさえも、文の意味を理解させることがある。

VP2.042 / saMbandhe [saMbandha]^sati yat tv anyad aadhikyam upajaayate [upa\jan] /
vaakyartham eva taM praahur anekapadasaMzrayam //) 4 2 [文中の諸単語の間に]関
係がある時、[各単語が表示する意味とは]別に、あるものが余分として生じてくる。
それが、[それら]複数の単語に依拠する「文の意味」に他ならないと、彼らは言う。

VP2.055 / anarthakaani apaayatvaat padaarthena [padaartha]^arthavanti vaa / krameNa
[krama]^uccaritaani aahur vaakyartham bhinnalakSaNam //) 5 5 単語はそれだけでは
無意味なものである。消失するものであるから(n.16)。あるいは意味をもつとして
も、単語[それ自身のため]の意味をもつだけである。分節的順序(クラマ)[からな
る連続体のかたち]をとって発声されてはじめてそれらは、個別的であることを特
徴とする文の意味を表示するのである。

VP2.060 / prativarNam asaMvedyaH padaarthapratyayaH yathaa / padeSv [pada] evam
asaMvedyaM vaakyarthasya niruupaNam //) 6 0 一つの単語の意味の理解が、各音
素ごとに認められることはない。それと同じように、文の意味の理解が、各単語ご
とに認められることはない。

VP2.061 / vaakyarthah saMnivistate padeSu [pada] sahavRttiSu / yathaa tathaa^eva
varNeSu [varNa] padaarthaH sahavRttiSu //) 6 1 文の意味は、[文を構成する]すべて
の単語が協働する時に、[それら各単語のうちに]入り込んで成立している[、と言う
ならば]、まさにそれと同様に、単語の意味は、[その単語を構成する]すべての音素
が協働する時に、[各音素において]成立していることになる[だろう]。

VP2.071 / viziSTaa^eva kriyaa yena vaakyarthah parikalpyate [pari\kLp] / dravyaabhaave
[dravya.abhaava] pratinidhau [pratinidhi] tasya tat syaat kriyaaantaram //) 7 1 ある者は、
他ならぬ個別化された祭式行為を、[その祭式の実行を命じる]文の意味でとして想
定する。[その場合、]その者にとっては、[その祭式で使うことが命じられてい
る主たる]供物(たとえば、米粒)がない場合に、代用供物(たとえば、大麦の粒)
[の使用]があるならば、それは[もとの祭式行為とは]別の祭式行為であるというこ
とになるであろう。[これは不合理である。なぜなら、実際の祭式実行においては、
代用供物が用いられたからといって、それが別の祭式となってしまうことはないの
であるから。したがって、文の意味の単一的実在性を認めることはできないのであ
り、文中での単語の意味の独立的実在性を認めるべきなのである。]

VP2.076 / vaakyaanaaM samudaayaz ca ya ekaarthaprasiddhaye [ekaarthaprasiddhi] /
saakaaGkSaavayavas tatra vaakyarthah^api na vidyate //) 7 6 [主節や従属節といっ
た]いくつかの文からなる一つの全体[としての大きな文(複文)]があつて、実際に
それが一つのまとまった意味を成り立たせている場合でも、[文を構成する各単語
は、単一の「文の意味」を表示するのであつて、単語自身の意味はもたないという
文単一不可分説に立つ限り、]互いに他に対する期待をもつ部分(主節や従属節の
意味)からなる一つの[全体としての]文の意味もまた、存在しない[ということにな
る]。

VP2.088 / avibhakte [avibhakta]^api *vaakyaaarthe* [vaakyaaartha] zaktibhedaad apoddhRte [apoddhRta] / *vaakyaantaravibhaagena* [vaakyaantaravibhaaga] yathaa^uktaM na virudhyate //) 8 8 文の意味は、実際には単一不可分なものであるとしても、[各要素のもつ]能力の区別に基づいて、[部分的な文へと]抽出分析されるのであるから、上に[対論者によって]言われたようには、[文は単一不可分であるというわれわれの主張と、]文を別の[より小さな]文へと分割することとは、矛盾することではない。

VP2.116 / avikalpitavaakyaaarthe [avikalpita.vaakya.artha] vikalpaa bhaavanaazrayaaH / atra^adhikaraNe [adhikaraNa] vaadaaH puurveSaaM bahudhaa mataaH //) 1 1 6 [本来、単一不可分であって、]区分の想定がなされ得ない文の意味に対して、様々の区分の想定(ヴィカルパ)が、[論者の]思想傾向を基にしてある。この主題に関しては、先人たちによる数々の議論が多々なされてきた(n.30)。

VP2.143 / vicchedagrahaNe [viccheda.grahaNa]^arthaanaaM pratibhaa^anyaa^eva jaayate / *vaakyaaartha* iti taam aahuH padaarthair upapaaditaam //) 1 4 3 [人がある文を聞いた時、文を構成する個々の単語の]それぞれの意味について個々別々の理解がある一方で、[個々の単語の意味の理解とは]全く別のものとして、〈直観〉(プラティパー)が生じてくる。個々の単語の意味(パダ・アルタ)によって生み出されたそれ(〈直観〉)を、人は、「文の意味」(ヴァーキヤ・アルタ)と呼ぶ。

VP2.246 / viruddhaM ca^abhisaMbandham udaahaaryaadibhiH kRtam / *vaakye* [vaakya] samaapte [samaapta] *vaakyaartham* anyathaa pratipadyate [prati^pad] //) 2 4 6 たとえば〈udahaari〉など[の一連の単語](n.74)によっては、[諸単語間の]矛盾関係が作り出される。しかしひとたび文全体が完成したならば、文の意味は、別様に理解される。

VP2.248 / atha^asaMsRSTa eva^arthaH padeSu [pada] samavasthitaH [samava^sthaa] / *vaakyaarthasya*^abhyupaayaH^asaav ekasya pratipaadane [pratipaadana] //) 2 4 8 [単語論者の見解：文を構成する]各単語のうちに、[他の単語の意味とは]結びついていないそれぞれの意味が確固として存在している。それが、一個の文の意味を理解させるための方途となるものである。

VP2.262 / arthasvaruupe [artha.svaruupa] zabdaanaaM svaruupaad vRttim icchataH [i^S] / *vaakyaruupasya vaakyaaarthe* [vaakya.artha] vRttir anyaanapekSayaa //) 2 6 2 [結論:] 語のもつ意味とそれ自身のかたち(スヴァルーパー)とは、[語の]それ自身のかたち[だけ]に基づいて、[意味表示に関わる]その働きを果たそうとするのである。文のかたちは、他の何物にも拠らずに、文の意味に対する働きをもっているのである。

VP2.325 / ruupaM sarvapadaarthaanaaM *vaakyarthopanibandhanam* [vaakya.artha.upanibandhana] / saapekSaa ye tu *vaakyaaarthaH* padaarthair eva te samaaH //) 3 2 5 すべての単語の意味のあり方は、文の意味を根拠とするものである。しかし、文の意味であっても、他に対する期待をもつようなものは、単語の意味と[そのあり方が]同じものである。

VP2.395=391 / yeSaaM samastaH *vaakyaaarthaH* pratibhedaM samaapyate / teSaaM tadaaniiM bhinnasya kiM padaarthasya sattayaa [sattaa] //) 3 9 5 [右の見解への批判:]

文の意味の全体が、個々の単語のそれぞれにおいて完結していると考え者たちにとって、その場合、個々別々の単語の意味の存在が一体何の役に立つのか。

VP2.419=415 / avibhaagaM tu zabdebhyaH kramavadbhyaH^apadakramam / prakaazate tadanyeSaaM vaakyaM vaakyaaartha eva ca //) 4 1 9 一方、彼らとは別の者たちは次のように考える。単一不可分で、単語からなる分節的順序（パダ・クラマ）を欠いた文（ヴァーキヤ）と、他ならぬ文の意味（ヴァーキヤ・アルタ）とが、分節的順序（クラマ）をもつ個々の単語から輝き出す。

VP2.441=437 / vaakyaaarthaH yaH^abhisaMbandhaH na tasya^aatmaa [aatman] kva cit sthitaH / vyavahaare [vyavahaara] padaarthaanaaM tam aatmaanaM pracakSate //) 4 4 1 文の意味は関係であって、そのどこにも本質は存在していない。日常的な言語表現活動においては、それ（文の意味）は、単語の意味の本質であると考えられている。

5. 成果発表 (2) 意味とカタチ
 —『ヴァーキヤ・パディーヤ』第2章詩節 325 - 347 の研究—

John Brough が、彼の3つ論文 “Theories of general linguistics in the Sanskrit grammarians” (Brough 1951)、“Audumbarāyaṇa’s theory of language” (Brough 1952)、“Some Indian theories of meaning” (Brough 1953)を立て続けに発表して以来、すでに50年以上が経っている。最初の論文では、彼はスポーツを論じた。そして続く二つの論文で、彼は、Vākyapadīya 第2巻、kk. 250-347 でバルトリハリが詳説した主題である、文と文の意味をめぐる議論を論じている。本稿は、Brough が論じ残した問題を補い、VP II. kk.325-347 で展開された、意味とカタチについてのバルトリハリの見解を明らかにすることを目指すものである。

Brough は、上記の第3論文において、文と文の意味についてのバルトリハリの理論について次のように説明を加えている。

“Having characterized the sentence as “a single undivided utterance”⁸ which conveys a single undivided meaning, Bhartṛhari proceeds to indicate what he understands to be the nature of this sentence-meaning. One cannot claim that what he says is a definition, and indeed the theory itself really implies that definition as ordinarily understood is an impossibility. The important point is that the sentence-meaning is grasped as a unity.” (Brough 1953: 170)

Brough によってここで言及されている、文の意味についての Bhartṛhari の定義とは言えない定義とは、*pratibhā* 説を述べる詩節としてよく知られている PVII. 143—144 である。

*vicchedagrahaṇe 'rthānām pratibhānyaiva jāyate /
 vākyārtha iti tām āhuḥ padārthair upapādītām //
 idaṃ tad iti sānyeṣām anākhyeyā kathamcana /
 pratyātmavṛttisiddhā sā kartrāpi na nirūpyate //*

When the meanings [of the words, which are unreal abstractions from the sentence] have been grasped separately, an instantaneous flash of insight (*pratibhā*) arises as different from them [namely, the knowledge of the meanings of the words]. They (=

⁸ Brough がここで念頭においているのは、Bhartṛhari が VP II の冒頭で与えた文の定義のうちの4番目のもの、eko 'navayavaḥ śabdaḥ であろう。そして Brough のこの論述には、VP II の注釈者 Puṇyārāja が、その注釈で提示した次の要約が反映していると考えられる。 *tatra vaiyākaraṇasyākhaṇḍa evaiko 'navayavaḥ śabdaḥ sphoṭalakṣaṇo vākyam, pratibhāiva vākyārthaḥ, adhyāśaś ca saṃbandha iti padavāḍipakṣadūṣaṇaparaḥ paraṃ ṭīkākāro vyavasthāpayatīty asya kāṇḍasya saṃkṣepaḥ* (VP II: 4.26-28) “Summary of this book: the Ṭīkākāra (=Bhartṛhari), being intent on refuting the Padavādin’s view, establishes that the sentence is ‘indivisible’ (*ākhaṇḍa*), for the grammarian, namely it is a single undivided linguistic unit (*eko 'navayavaḥ śabdaḥ*); the sentence-meaning is an instantaneous flash of insight (*pratibhā*); and the relation is superimposition (*adhyāśa*).”

Grammarians) call it the sentence-meaning. [And it is] made to appear by the meanings of the words [, which are unreal abstractions from the sentence-meaning]⁹. “This (*pratibhā*) cannot in any way be explained to others in terms such as ‘It is this’; its existence is ratified only in the individual’s experience of it, and the experiencer himself cannot describe it.” (Brough 1953: 171, footnote 3)

Brough は、後の詩節に対してしか翻訳を与えていないので、前の詩節については、彼の叙述(Brough 1953: 170–171)を参考にして、私の翻訳を示している。

この詩節で言われている重要なことは、確かに、先に Brough が言ったように、文の意味を、直観的に把握されるものとすることによって、それが不可分な全体であることを言うことであるに違いない。つまり文の意味は、個々の単語の意味へとそれを分解して理解することが、本来的に出来ないものなのである。したがって、それについて自己にも他者にも述語的に説明することができないのは当然であり、その定義を与えることも不可能であるということになるのである。

しかし果たして文の意味をこのように捉えることは、われわれの日常経験に照らして妥当なことであるのか。たとえばわれわれは、外国語の難解な文に出会ったら、それをまず単語に分解して、それぞれの意味の連関から、文全体の意味を理解しようとするのではないか。このように考えるとき、文の意味の理解は、単語の意味の理解からしか出てこないように思える。ところが、Bhartṛhari を代表とする文法学派の者たちは、文をいくつかの単語へと分解するのは、文法学の言語分析の方法であって、それは artificial なことだと考えているのである。これは一見すると逆説的に見える。Brough は次のように言っている。“To Bhartṛhari and his school words were, in fact, artificial constructions of the grammarian, and looked on from the point of view of language functioning in the world, they were unreal (*asatya*). This extraordinary relegation of words to the realm of fictions is not at all easy to grasp at first sight, ... ” (Brough 1953: 165).

単語も単語の意味も、文法的分析の所産であり、それゆえ unreal であるとする、このような考えは、われわれの日常的な意味理解の成り立ちを否定するかのようであり、Brough の言うように、確かに一見理解しがたいものである。しかしながら、先の詩節に再び戻ってみるならば、そこでは、文の意味としての *pratibhā* は、また、個々の人間（話し手や聞き手）の内部でその存在がはっきりと確証されている(“its existence is ratified only in the individual’s experience of it”)とも言われている。つまりそれは、自分にはその存在がはっきりしている(*pratyātmavṛtisiddhā*)、つまり自明のものであるが、他者に対してはどのようなものであるかを説明することは出来ないものなのである。これは、確かに直観的な認識の特徴だと言ってよいだろう。では Bhartṛhari は、文の意味を、他者に対して伝達することができないもの、他者によっては理解されないものと考えていたのであろうか。実はそうではない。次に見るように、詩節 VP II. 330 においては、Bhartṛhari は、「意味」を、まさに聞き手と話し手の間のコミュニケーションにおいて成立するものとして、端的に定義しているのである。

⁹ 翻訳は、Ogawa 1991: (236), note (1) を参照した。単語が、文から抽出された虚構であること(that words are unreal (*asatya*) abstractions from sentence)は、VP II. 10cd (*apoddhāras tathā vākye padānām upapadyate*) に述べられている。また、単語の意味が、文の意味から抽出された虚構であること(that the meanings of the words are unreal abstractions from sentence)は、VP II. 269 (*vākyasyārthāt padārthānām apoddhāre prakalpīte*) に述べられている。

「意味」の定義

yasminn uccarite śabde yadā yo 'rthaḥ pratīyate /
tam āhur arthaṃ tasyaiva nānyad arthasya lakṣaṇam //

ある言語単位が[話し手により]発せられたとき、ある意味が[聞き手により]理解される。そのような意味を、他ならぬその言語単位の意味と、人は言うのである。それ以外には、意味の定義はない。(Whenever a linguistic unit is uttered [by a speaker], a meaning is understood [by a hearer]. Then, they say that this meaning is the very meaning of that linguistic unit. There is no other definition of meaning.¹⁰)

この「意味」の定義は、Patañjali (c. 2nd century BC)が、かれの Mahābhāṣya で示した śabda (言語単位) についてのよく知られた次の定義(The well known definition given by Patañjali in his Mahābhāṣya) と、呼応している。

atha gaur ity atra kaḥ śabdaḥ yenoccāritena
sāsnā-lāṅgūla-kakuda-khura-viṣāṇinām sampratyaḥ bhavati sa śabdaḥ.

“What then is this word (śabda) ‘cow’? ... It is that by means of which, when uttered, there arises an understanding of creatures with dewlap, tail, hump, hooves, and horns.” (Brough 1951: 31)

Patañjali は、śabda を、「それが発せられたとき理解が生じるもの」と定義し、他方、Bhartṛhari は、「śabda が発せられたとき理解されるもの」と「意味」を定義するのである。この二つは、広く一般に認められる公理と言ってよいだろう。「発せられるもの」としての śabda と、「理解されるもの」として「意味」の関係が、この二つの公理によって提示されているのである。しかも、ここで「発せられるもの」が単なる音以上の何者かを意味すべきこと(“the word ‘uttered’ (uccārita) must mean something more than the mere production of sounds”)は、すでに Brough が指摘する通りである(Brough 1951: 32)。「発せられるもの」は、「意味」の理解をもたらすものでなければならないのである¹¹。しかし、それが音以上の何者かであるにしても、それはまた音でなければならないことも事実である。話し手が発する物理的な音声という「かたち」を借りなければ、「意味」は聞き手に伝わらないのである。そして、話し手にとっても、聞き手にとっても、「意味」は彼ら自身の心のうちに(in the mind)生じるものであり、それゆえその存在を疑うことのできない「自明のもの」である。そうであるならば、話し手と聞き手の間に成立するコミュニケーションを、自明の「意味」と関連させて論じるときに問うべきは、まさに「発せられるもの」、また「聞かれるもの」としての śabda の「かたち」として、何を認めるかという問題だということになるだろう。目下の議論における論点を先取りすれば、「śabda (linguistic unit)のかたちは、音か、単語か、文か」ということになる。

さてそこで、先の「意味」の定義に戻ろう。実はここで「意味」と言われているのは、「文の意味」のことである。この定義がその中で述べられることになる一連の議論で問題となっている言語的な事象とは、一単語文(one-word sentence)の問題である。たとえば、ある話し手が、「木が。(A tree.)」(vṛkṣaḥ)と言ったとする。(vṛkṣaḥ

¹⁰ Brough は、ここに示した「意味の定義」については、かれの三つの論文ではどこにも触れていない。しかし、Brough の論文に大きな影響を受けて古代インドの言語理論を論じた Kunjunni Raja は、本稿と同じ問題設定の枠組みの中で、この定義に言及している(Kunjunni Raja 1977: 175)。

¹¹ この問題を出発点として、Brough は、1951 年の論文で、sphoṭa の問題を論じている。

は、＜木＞を意味する名詞語幹 *vrkṣa* に、主格単数の語尾がついた形で、これが単語としての語形である。) 聞き手は、この「木が。」という一単語のかたちを聞いて、＜木が立っている *a tree stands*> という意味を理解することがある。では、話し手が「木が立っている。『*A tree stands.*』」(*vrkṣas tiṣṭhati*)と、二単語からなる文のかたちで発話した場合、どのような意味が理解されるか。もちろん＜木が立っている> という意味が、ここでも理解される。「木が。」と発話されて、それを聞いた場合と、「木が立っている。」と発話されて、それを聞いた場合で、理解される意味に違いはない。文としてのかたちから言えば、後者の方が完全な文であろうが、同じ意味＜木が立っている> が、ともに理解されることから言えば、両方とも *śabda* としては同じだということになるかもしれない。しかし、もし同じだとすれば、文法学派の説は、以下のようないくつかの批判を招く可能性をもつことが予想されるだろう。

(1) 「木が。」というかたちによって、「木が立っている。」という文によるのと同じ意味＜木が立っている> が理解されるならば、「木が。」は単語であることは明らかであるから、単語から文の意味が理解されていることになる。これは、単語を *unreal* なものとする文法学派の説と矛盾するのではないか。

(2) 「木が。」は、そのかたちから見て、「木が立っている。」という文の部分であると思われる。つまり、この場合、文の一部分が意味を理解させるものとなっている。しかし、文法学派(*grammarians*)にとっては、すでに述べたように、文は単一不可分であるから、その内部に意味を担う部分をもつことを認めることはできないはずである。

(3) 「木が。」は不完全な文のかたちであって、それが＜木が立っている> という意味を、聞き手に理解させるのは、「立っている」という単語がそこに補われることによってである、と考えればどうか。あるいは、「木が。」から理解された＜木が> という意味に、＜立っている> という意味が補完されると考えればどうか。このような説が、単語を意味理解の基本におく *Mīmāṃsaka* の者たちからは、提出されるだろう。しかし、文法学派の立場は、先に見た「意味」の定義が示すように、「意味」は、実際に話し手によって発せられたかたちのみから理解されるものである。ある文のかたちを、別のかたちによって補完することで、文の意味が理解されるということも、別の意味を補完することによって完全な文としての意味が理解されるということも、文法学派は主張することができないのである。

ミーマーンサー学派の見解

さて上に想定したような批判は、主として *Mīmāṃsā* 学派 (*the school of the Mīmāṃsā*) からなされる可能性のあるものである。ここで *Mīmāṃsā* 学派が主張した、文と文の意味についての説を簡単に見ておきたい。

まず、*Mīmāṃsā* 学派の根本教典である、*Mīmāṃsāsūtras* of Jaimini (c. 2nd century BC) は次のように言う。

arthaikatvād ekaṃ vākyam sākāṅkṣaṃ ced vibhāge syāt (JS II.1.46).

“A group of words serving a single purpose forms a sentence, if on analysis the separate words are found to have *ākāṅkṣā* or mutual expectancy” (Kunjunni Raja 1977: 152).

そして、Bhartṛhari が、次に示す VP II. 4 において、Mīmāṃsā 学派の文の定義として提示するものが、この Jaimini の定義をもとにしたものであることは、Kunjunni Raja によってすでに指摘されている通りである(Kunjunni Raja 1977: 152)。

sākāṅkṣāvayavaṃ bhede parānākāṅkṣaśabdakam /
karmapradhānaṃ guṇavad ekārthaṃ vākyam ucyate //

The sentence, it is said, is something which has the parts (=words) having mutual expectancy when they are treated separately, which consists of the words having no expectation of words outside itself [to complete its meaning], which has the verb as the predominant word, which has qualifying words and which serves a single purpose.

一方、文の意味については、Mīmāṃsāsūtras に対する Śabara (c. 6th century AD)¹²の注釈の中に、次のような叙述を見出すことができる。おそらく時代的には、Bhartṛhari よりもやや後のものとなるだろう。

anekapadārthānurakto vākyārthaḥ, sa ca padārthamūlaḥ, na nirmūlaḥ, na ca saṃketamūlaḥ (ŚBh on JS 1.1.7)

The sentence-meaning is colored by many word-meanings; it has as its basis the word-meanings, and it is neither without a basis nor is based upon linguistic convention.

以上のような論述から見て、初期の Mīmāṃsā 学派では、文とは、諸単語が関連してひとつの意味を表現するものであること、諸単語の意味に基づいて文の意味が形成されること、つまり、単語と単語の意味が第一義的なものとして主張されたと言えるだろう。

結論：文の完全性

このような Mīmāṃsā 派の学説に見られるような単語と単語の意味を重視する立場からの反論を想定しつつ、Bhartṛhari は、VP II. kk. 325—347 において、先述の一単語文(one-word sentence)や、省略文(elliptical sentence)の例文を具体的にとり上げて、文と文の意味について論じ、文の完全性を立証しようとしている。この箇所を含む kk. 250—347¹³は、ある文を諸単語に分析して、その文中においてそれら諸単語に付与されるべき意味を分析的に決定する諸原理、たとえば発話状況(*prakarāṇa*: context of utterance)や文脈(*artha*: textual context)などについて論じることによって、文中の言語的かたち(linguistic form)とその意味について、全般的に考察する箇所にあたっている。同じ問題は、Vākyapadīya の第一巻(the first book of Vākyapadīya)の VP I. kk. 151—154 とその注釈 Vṛtti でも、同じ例文を用いて論じられている。そこでは、それら意味決定の原理は、論理的・分析的思考のうちに位置づけられている。つまり、直観的にある文の意味の理解の後に、文中における諸単語の意味が、分析的説明に

¹² Bhartṛhari と Śabara の年代関係が問題となるが、前者が後者よりずっと以前に活躍したとは考えられないが、また前者が後者より後に活躍したと考える根拠もないように思う。筆者は、Bhartṛhari は、Vṛttikāra と同時代の人間ではなかったかと考えている。

¹³ Brough は、この箇所のうち、VP II. kk. 342—346 を Audumbarāyana の言語論として、Brough 1952 で詳しく論じ、また Brough 1953 では、VP II. kk. 250—324 で論じられる文意と含意('implied' sense and literal sense)の問題の概略を述べている。

よって確定されると、Bhartṛhari は考えたと言えるだろう。目下問題としている箇所
の冒頭 VP II. k. 325ab で、彼はその主張の根本テーゼを提示している。

rūpaṃ sarvapadārthānām vākyārthopanibandhanam /

The nature of the meaning of all individual words is determined on the basis of the
meaning of the sentence [composed of those words]. (ある文を構成しているそれ
ぞれの単語の意味が、どのようなものであるかは、その文の意味を根拠にして
決定される。)

単語と単語の意味は unreal (asatya)であり、文と文の意味だけが real (satya)であると
考える Bhartṛhari の立場からすれば、文の意味こそが根拠であるのは当然であろう。
かくして、「木が。」という一単語文を例にして、先に想定した批判に対しては、
次のように答えられることになる。

(1) 「木が。」によって、<木が立っている>という文としての意味が理解さ
れるなら、それは完結した意味を理解させるのだから、一単語であっても「文」で
ある。(Single word that completes a self-sufficient meaning is a sentence.)

(2) 「木が。」と「木が立っている。」は、同じ意味を理解させるようであつ
ても、それぞれの意味は別のものである。したがって、両者は別個の完結した文で
ある。だから、「木が立っている。」の一部である「木が」が、文の意味を理解さ
せるわけではない。

(3) 「木が。」は、それだけで、<木が立っている>という意味を理解させる
完結した文であるから、「立っている」というかたちや、<立っている>という意
味をそこに補うべき余地はないし、そのようなことも必要ない。

文は文である限り意味をもたらし、かたちとして完全である、これが Bhartṛhari
がこの箇所でおうとした結論であると言えることができるだろう。

[テキストと略号]

JS = [Jaiminīsūtra] In: *Mīmāṃsādarśana*. Ed. by Kāśīnātha Vāsudevaśāstri Abhyāṃkara
and Pt. Ganeśaśāstrī Jośī. Poona: Ānandāśrama. 1973—84. (Ānandāśrama Sanskrit Series
97.)

VP = [Vākyapadīya] References to the kārikās follow W. Rau's critical edition of the
kārikās (Rau: 1977).

VP I = [Vākyapadīya, Kāṇḍa I] *Vākyapadīya of Bhartṛhari, with the Commentaries Vṛtti
and Paddhati of Vṛṣabhadeva*, Kāṇḍa I. Ed. by K. A. Subramania Iyer. Deccan College
Monograph Series. Poona, 1966.

VP II = [Vākyapadīya, Kāṇḍa II] *The Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa II, With the
Commentary of Puṇyārāja and the ancient Vṛtti*. Ed. by K.A. Subramania Iyer, with a
Foreword by Ashok Aklujkar. Delhi, 1983.

ŚBh = [Mīmāṃsā Bhāṣya] In: *Mīmāṃsādarśana*. (See JS)

[二次文献]

Akamatsu, Akihiko 1998a. *The Philosophy of Language in Classical India*, Vol.1.
Translation and Annotation of the First Kāṇḍa of Bhartṛhari's *Vākyapadīya* with the *Vṛtti*
(*Koten Indo no Gengo- Tetsugaku* 1), Tōkyō: Heibonsha. [In Japanese]

- Akamatsu, Akihiko 1998b. *The Philosophy of Language in Classical India*, Vol.2. Translation and Annotation of the Second Kāṇḍa and of the *Kriyāsamuddeśa* of Bhartṛhari's *Vākyapadīya* (*Koten Indo no Gengo-Tetsugaku* 2), Tōkyō: Heibonsha. [In Japanese]
- Brough, John 1951. "Theories of general linguistics in the Sanskrit grammarians," *Transactions of the Philological Society* 1951 (Oxford): 27-46. [Reprinted in *A Reader on the Sanskrit Grammarians*, edited by J. F. Staal, MIT Press, Cambridge—Massachusetts and London—England, 1972: 402-414; In *Collected Papers*: 79-98.]
- Brough, John 1952. "Audumbarāyaṇa's Theories of Meaning," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (London), XIV: 73-77. [In *Collected Papers*: 99-103.]
- Brough, John 1953. "Some Indian Theories of Meaning," *Transactions of the Philological Society* 1953 (Oxford): 161-176. [Reprinted in *A Reader on the Sanskrit Grammarians*, edited by J. F. Staal, MIT Press, Cambridge—Massachusetts and London—England, 1972: 414-423; In *Collected Papers*: 114-129.]
- Brough, John 1996. *Collected Papers*. Ed. by Minoru Hara and J.C. Wright. SOAS: University of London.
- Iyer, K.A. Subramania 1977, *The Vākyapadīya of Bhartṛhari*, Kāṇḍa II, English Translation With Exegetical Notes. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Kunjunni Raja, K 1977, *Indian Theories of Meaning*, Reprint. (The Adyar Library Series, vol. 91). [First edition: Madras 1963; Second edition: Madras 1969].
- Ogawa, Hideyo 1991, "Pāṇini-Bunpo-Gaku niokeru Bun no Imi," *Mayeda Egaku Hakushi Shojukinen Bukkyo-Bunkagaku-Ronshu*. [In Japanese]
- Rau, W 1977. *Bhartṛhari's Vākyapadīya. Die mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem pada-Index versehen*. (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4.) Wiesbaden: Franz Steiner.
- Yoshimizu, Kiyotaka 1999, "Śrutārthāpatti niyoru Ninshiki no Taisho ni tsuite," *Bukkyogaku* 40. [In Japanese]

シノプシス (VP11, kk. 325—347)

1. 文の意味が単語の意味の決定根拠である。(k. 325ab)
2. 一単語文は、「文」である。(kk. 325cd—330)
3. 同義語文は、それぞれ別個の言語単位である。(kk. 331—333)
4. [反論]「戸を！」の意味の理解は、別の要素の補填による。(kk. 334—338)
5. 「戸を！」は、名詞かつ動詞で、完結した文である。(kk. 339—341)
6. Audumbarāyaṇa 説：文こそが意味をもつ。(kk. 342—347)

補遺：翻訳と注釈

(以下の翻訳と注は、Punyarāja の注釈に基づくものである。Vṛtti に関しては、現状では読解は難しい。Vṛtti のテキストの校訂研究は今後の課題である。)

3 2 5 ab [ある文を構成している]すべての単語の意味が、どのようなものであるかは、その文の意味を根拠にして決定される。

[注記: Puṇyārāja はここで、VPI の Vṛtti 77.4-5 に引用される『サングラハ』の説に言及して、これが文法学派の根本的な主張であることを確認している。Saṃgrahaḥ py uktam – na hi kiñcit padaṃ nāma rūpeṇa niyatam kvacit / padānām rūpam arthaḥ vā vākyaṛthād eva jāyate // 「サングラハにも次のように言われている。—およそ単語と呼ばれるもののどこにも、そのかたちに関して何ひとつ確定したものはない。諸単語のかたち、そして意味は、他ならぬ文の意味だけから生じてくる。」この『サングラハ』については、Akamatsu 1998a: 278 を参照のこと。]

3 2 5 cd しかし、文の意味であっても、[意味の完成のために、他の要素に対する]期待をもつものは、単語の意味(pl.)と同じである。[それを文の意味とは言えない。]

3 2 6 ひとつの単語であっても、動詞なしに[完結した文の意味を理解させる]はたらきをなしたものは、それもまた「文」であると考えられる。文などが[そこでは、名詞でありかつ動詞であるという]二重性を示しているのだから。

[注記: ひとつの名詞単語でも、「木が。」のような単語は、<立っている>という動詞作用をその内部に実現したものとして、他の外部要素への期待なしに、完全な意味を理解させるから、「文」である。]

3 2 7 ある一つの動詞において、限定的に[その動詞によって表される行為(action)に関わる特定の]行為関与要素 (sādhana, kāraṇa, ‘action bearers’) が、[同時に]理解されるならば、それもまた完結した意味を有する一つの文であると、言われる。

[注記: 「雨降らす」(varṣati)は、ひとつの動詞単語であるが、作用主体(agent)である<神>と作用目的(object)である<水を>を含意しており、それだけで完結した文意<神が水を雨降らす>を理解させるから「文」である。]

3 2 8 [対論者の説:][そこで直接的に聞かれていない]単語によって隠されており、[そこで]発されていない単語を拠り所とする観念が[、ある文を聞いた時に生起してくることが]ある。間接知(anumāna)に基づいて生じてくるそのような観念が、その意味の理解に対する原因であると言われる。

[注記: Puṇyārāja は、これを Mīmāṃsā 学派の主張とする。たとえば、「木が。」と発せられた言葉を聞いて、<木が立っている>という意味を理解することがあるのは、「立っている」という単語が、śrutārthāpatti という間接知によって想定されるからだというのが、ここでの対論者の主張であると、Puṇyārāja は説明するのである。ここに説明されるような śrutārthāpatti については、Yoshimizu 1999 に詳しく論じられている。]

3 2 9 しかし、別の方々は、その意味は、その一つの単語だけに属すると主張する。その意味は、別の語との関係なしに確定されるのである。[別の語の想定など必要ない。]

3 3 0 ある言語単位が[話し手により]発せられたとき、ある意味が[聞き手により]理解される。そのような意味を、ほかならぬその言語単位の意味と、人は言うのである。それ以外には、「意味」の定義はない。

3 3 1 [たとえば、He goes to a film. と言われれば、He goes to see a film. という意味を、聞き手は理解する。]このように、不在の動詞(たとえば、ここでは see)が表す行為は、[聞き手によって、‘to a film’というだけで]理解される[のであって、対論者の言うように、間接知によって特に想定されるようなものではない]。また、統合形(compounds)の場合、niṣkauśāmbiḥ (from Kauśāmbī)というだけで、‘gone from Kauśāmbī’と理解される[ので、わざわざ「行った」ということを想定する必要はない]。

[注記: Puṇyārāja が出す前者の用例は、edhebhyo vrajati ‘he goes for firewood’ と、edhān ahartum vrajati ‘he goes to get firewood’である。]

332 [たとえば、「木が。」(vṛkṣaḥ)と「木が立っている。」(vṛkṣas tiṣṭhati)という]それぞれは、別個の語であり、ちょうど日常表現における同義語のようなものである。また、[一文中の]それら固有の意味は、textual context (artha) (文脈上の意味) や context of utterance (prakaraṇa) (発話の際の状況) によって決定される。

333 [文を分析して、その意味が決定された個々の単語は、]しかし、各人それぞれにとって、文の意味の理解のための手段・方法である。それらは、決して真に知られるべき事実と結び付いたものではない。

334 [対論者の説:]まったく意味が理解されない時、あるいは誤って意味を知らせるとき、そのような時でも、すべての語というものは、それ自身の意味との恒久不変の結合関係をもつものであると決定されている。

335 [対論者の説:]発話の際の状況 (context of utterance) に応じて、「戸を」(dvāram)とこのように行為の目的対象が、具体的な言葉として発せられた時、「閉めろ」とかあるいは「与えよ」ということが、その[発話の際の状況などの]要素にもとづいて、[間接的に]理解される。

336 [対論者の説:]その場合、行為関与要素としての働きをもち、実体(sattva 'an entity')を発効原因とする語が、[文の]主要な意味である達成されるべき行為を、[同時に]直接表示するものであることはない。[すなわち、「戸を」と言われた時には、目的対象としてある実体=戸を表示するものとしてのみ、この語は理解されるのであって、そこでなされるべき行為は「戸を」からは理解されないのである。]

337 [対論者の説:]それゆえ、他の語に対する期待をもつその語は、それ自身の意味だけを表した後、その働きを終えるのである。一方、その[語の]意味が、それと関連をもつものとして、[別の要素の]近接をわからせるのである。

338 [立論者の主張:]語は、それ自身の意味を表すことをその目的としている。しかし、それが他の要素を表すとするならば、[他のためのものであることにおいて]違いはないから、[そこで発された]語に基づいて、別の語の近接が表されることはない。また、[そこで発された語の]意味に基づいて、別の語の近接が表されることはない。また、[そこで発された]語に基づいて[別の語の]意味の近接が表されることもない。

[注記: Punyārāja は、この主張を、文単一不可分説を説く論者が、śrutārthāpatti 論者を斥けるために言ったものと注釈している。その注釈は、Mīmāṃsā 学派の śrutārthāpatti 説について考える上でも興味深いものであるので、ここに訳出しておく。『ここにいる太っている Devadatta は、昼間食事をしない』というこの場合、食事をするとなしに太ることが、Devadatta にあることはありえないから、夜間の食事を、それを直接表示する語の想定を通じて、理解させると言われている。それではこの場合、(1) 語によって語が間接的に示されるのか、(2) 意味によって語が示されるのか、(3) 語によって意味が示されるのか、それとも(4) 意味によって意味が示されるのか。以上四つの選択肢がある。そのうち、(1) 語によって語が間接的に示されることはありえない。それ自身の意味を理解させることにおいてこそ、語の表示作用があるのだから。そのことを言って『[そこで発された]語に基づいて、別の語の近接が表されることはない』と。では(2) 意味によって語の間接表示があると言われるならば、それに対して、『また、[そこで発された語の]意味に基づいて、別の語の近接が表されることはない』と。また、語そのものが[意味によって]間接表示されるというのも正しくない。しかし、直接表示対象が直接表示者を間接的に表示するというのは正しい。それゆえ、[ここでは]別の語の意味に対しても、また別の語に対しても、[そこで発された語の意味との間に]直接表示対象と直接表示者の関係は成立しないから、どうして[そこで発された語の]意味によって、語の間接表示がありえようか。あるいは(3) 発せられた語によって、

śrutārthāpatti によって想定された語によって表示される意味が間接的に表示されると言われるならば、それもまた適当ではない、ということを言って、『[そこで発された]語に基づいて[別の語の]意味の近接が表されることもない』と言われる。語に基づいて、別の語によって表示される意味の近接がもたらされることはない。直接表示対象と直接表示者の関係が成立しないのだから。したがって、どうして[そこで発された]語による[そこで発されていない語の]意味の間接表示があろうか。あるいは(4) 意味によって意味が理解されると言われる。それは推理(anumāna)であることは明らかである。『語にはそれ自身の意味がある』という語一性が捨てられることは決してないであろう。まさにそれゆえに、この場合の四つの主張の説示は適当なものでありえないのである。したがって、語とそれ自身の意味の一体性は、決して否定されない。それゆえ、一単語よりなるものについて、śrutārthāpatti による別の語の間接表示があるときに、文の意味の理解が可能となるという、この主張は何の役にも立たないのである。一単語からなるものは、他の語との関連なしに、発話状況などに基づいて、それぞれの意味を理解させることができるのだと考えなければならない。]

339 [反論:]もし、[行為の]目的対象を表示する語(たとえば、「戸を」)によって、動詞があたかもそこではかたちを失ったものごとくに含意されているというならば、[動詞によって表示される]行為・実現過程(bhāva ‘an action’)と[名詞によって表示される]実体(‘an entity’ sattva)の両方が、[「戸を」において、]同時に主要なものであることになってしまうであろう。[これは不合理な結論ではないか。] “Yāska (±500 B.C.) defines a verb as referring to an action (bhāva) and a noun as referring to an entity (sattva).

340 [答論:]ここでの動詞は、名詞と同じかたちをしているのだ[、すなわち、「戸を」は、名詞に似た動詞なのだ]と、彼ら(文法学者たち)は説明する。日常的な言語表現は、肯定的随伴(anvaya ‘agreement’)と否定的随伴(vyatireka ‘difference’)によって[その働きが]配当されるのである。

341 [答論:]また、かたちの[類似性の]せいで、たとえ疑念が生じるとしても、それが直接的表示者であることがなくなることはない。ちょうど、[「デーヴァダッタ Devadatta さんの犠牲獣の半分」と言われた時に、「デーヴァダッタさんの半分」ではなくて、]「犠牲獣の半分」ということが、syntactical な可能性(sāmarthyā)に基づいて、[意味として]成立するのと同じように。

[342～346については、Brough 1952: 75-76を参照のこと。]

347 別の場所で具体的に明示されている指示(liṅga)によって、また別の文によって、[その文の意味が]間接的に明らかにされる場合でも、そこで理解されているのは、それぞれその文自身の意味である。かたちに区別がないから、[両者は別の文だと、]はっきりとはそれが気づかれないだけである。

[Puṇyārāja がここで出す例は、VP I の Vṛtti 208. 3-8 に出るものと同じであり、さらにまた、VP II の Vṛtti (274.16-25; 283.15-19)にも出ている。]

平成 17 年 3 月 15 日